
白銀の王麻帆良の世界に

ファルーシュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白銀の王麻帆良の世界に

【Nコード】

N08620

【作者名】

ファルーシュ

【あらすじ】

ファルーシュです。

コードギアスLostColorsのライがネギま！に介入します。ライはチート気味な上かなり御都合主義です、加え誤字が多いのです。それでもいいという人はクリックして下さい。悪いところを指摘してくれると助かります。

プロローグ（前書き）

始めましファルーシユです。

コードギアスLostColorsのライがネギま！介入します。

初めての投稿なので至らないところが多々ありますが楽しんでいただけたら幸いです。

プロローグ

皇暦2119 - 皇帝直轄領 日本

狂王が世界統一後

日本では狂王に逆らったもの達の公開死刑が行われた。

そこには黒の騎士団、ブルタニア皇族であるナナリー、そしてライと共に王となって世界導こうとしたルルーシュがあった。

世間では民衆に対して寛大であったルルーシュを欺き自ら世界を手に入れた狂王として認知されていた。

ライが世界を手に入れてからはすべての人々が恐怖した。

「彼の狂王の生まれ変わり」

「なにが皇帝だ」「独裁者め」「あれは悪魔だ」「しつ。聞こえたら一族皆殺しにされるぞ」

など恐怖している最中一人の騎士があらわれた。

「スザクッ」「クルルギ」

ナイトオブゼロ、二人の王の騎士だった男が信じられない速さで狂王に向かう。

彼を迎え撃ちにジェレミアが前へでた。

「撃つなッ私が相手をする。」

だが、それは一瞬の出来事だった。ジェレミアが放つ剣撃を避け、肩を踏み台に彼が狂王のもとへ飛び上がった。

スザクが狂王に対して剣を構えたその時、ライの考えに気づいたのか、一部の死刑囚達が叫び声をあげていた。

僕とルルーシュの筋書き道理世界は話し合いとゆうテーブルつけれぬ。

後は任せたよ、ルルーシュ、スザク。

過去の愚かな王はこの時代に居てはいけない。

「ぐはッ．．．」

スザクの手にした剣がライの心臓を突き刺す。

「スザク．．ルルーシュ．．これからの世界．．をみんなを頼．．

」

「．．．その願い確かに受け取った」

スザクは涙をこらえながら答えた。

沈みつつある意識の中、この世界の中に居た時の感覚が身体に走った。

ふと意識が回復して目をさました。

「ここは、それに僕はあの時心臓を」

自分の心臓がある胸を見ると血の後があつた、それから傷がどうなつたか左手で調べたら傷が無く驚いた。

「なんで、刺さつた痕跡が服にあるのに身体にはまったく無いんだ。どうして？これは！？」

右手が何かを掴んでいたらしく其処に目を移すと、そこには王だつたころに使っていた剣があつた。

「なんで、この剣がここに？それにここは？」

あたりを見回してみると背後に巨大な大樹があつた。

「でかいな、こんな大樹見たことも無いぞ、ん！？」

ガキッ キン ガキッ

耳から剣激の音が聞こえてきた

剣激の音はする方向に向かうと其処には大きな化け物と黒髪の少女

が戦っていた
・
・
・

1話

ライ Side

剣の打ち合ってる音の方に行ってみると信じられない光景があった。

(なんだあの化け物は、あんなのが存在するのか？いや、それよりあの女の子を助けるのが先決だな)

ライは化け物の方へと駆けた。

「斬岩剣!!」

異形の化け物の切りかかる少女。

その少女はかなり息が上がっていて苦戦してる。

化け物の刀らしき物が少女に切りかかる前にライはかつて戦場を駆けてた時の剣で受け止める。

カキン

化け物の攻撃を止めた突然のイレギュラーに双方は驚いていた。

「悪いけど、どうみてもこの子の味方したほうが良いので貴方を切らせてもらいます」

「なんや？坊主邪魔するならつぶすで！」

そう言いながら化け物はライに切りかかる。

「遅い」

ライは素早く化け物の攻撃を避け振り下ろされた腕を切る。

「はあ」

すると腕は豆腐みたいに切れ、ライは化け物が反応する前には飛び上がり首を切り落とす。

すると化け物はきえた。

「な?!消えた?!」

(なんだ?今のは?まあいいかこの子助けられたみたいだし、それにここが何処か聞きたいし、それにしても変わらないなこの剣の切れ味は。)

ライは自分が握っている剣を見ながら考えていた。

刹那Side

刹那は数体いた鬼を切り倒し残り一匹になっていた。

「はあッ!」

カキン

自分の攻撃が効かず苦戦してた。

さっきまで相手していた鬼達とは桁違い強さをもった鬼は余裕な顔で刹那に切りかかった。

「斬岩剣!!!」

ギンツ

「つつつ!!!」

刹那の攻撃は効かずそのまま後ろの木まで叩きつけられた。

報告にあつた36体の鬼達の内の8体は自分達の担当で半分近く侵入者を倒した時は一人で大丈夫だと判断し頼れる狙撃手をほかの組の援軍に向かわせた、その後残りの鬼達を危なげなく撃退したが、最後に残った鬼は桁違いに硬く苦戦していた、刹那の攻撃をまともに食らっても殆んどダメージが与えられなかった。

(まずい、このままじゃ!)

鬼が刹那に切りかかろうとした瞬間。

カキンと音がして鬼の攻撃が止められていた。

其処には見かけない少年が立っていた。

年は16ぐらいだろうか。

体系はかなりスリム。

顔は美少年と言ってもいい。

しかしそれ以上に異常な白いやもう白銀といってもいいぐらい綺麗な髪。

手に握っている黄金の西洋の剣。

そしてこの場では似合わない服装、その服装は現代では異常な服だった、それに胸の辺りが赤い血がかなりついていていた。

「悪いけど、どうみてもこの子の味方したほうが良いので貴方を切らせてもらいます」

「なんや？坊主邪魔するならつぶすで！」

そんな問答した後鬼は少年に切りかかった、しかし少年はとんでもない速さで攻撃を避け切りかかった鬼の腕を逆に切り落とし、すぐさまに鬼の首を切り落とし、鬼は消えた。

「な?!消えた?!」

鬼を倒した本人は鬼が消えたことを驚いていた。

私はその隙きに夕凧を少年の首にあてて質問した。

「貴方は、何者ですか？何が目的でこの麻帆良に？」

ライSide

僕が化け物が消えた事に驚いてる隙に女の子は刀の刃を僕の首筋当てて質問してきた。

（まあ、こうなるよね、助けたとはいえ、戦ってる途中見ず知らずの男が西洋風の剣をもって目の前に現れたら、なんて答えようかな？ここは明らかに自分がいた直轄領じゃないし、それに僕がここに居る事より、生きてることも異常だし、あの時意識が無くなる瞬間Cの世界にいた時と同じ感覚したし、もしかしてC世界？いやあそこは人はいなかった、だったら一応ここが何処か聞いてみるか。）
などと瞬時状況把握したライが質問した。

「とりあえず、僕もはここが何処かどこなのか分からないんだ、ここってなんて名前の国？」

ライは場所より国の名前のほうが重要と考えた、日本語は通じるけどさっき見た大樹はライがいた日本には存在しなかった、ライはバトルレーの実験であらゆる情報、技術などをライの脳に刷り込ませた、結果ライは千年以上前の人間でも現代の生活は困らなかつた、情報

の中の地理にはあんな大樹の情報は無かった、ライはありえないよう結果を予測していた。

女の子はすぐに質問に答えてくれた。

「ここは日本の麻帆良という場所ですが」

(麻帆良ねえ、やっぱり聞いたことないし、ありえないと思いたいけど、まあ自分その者は千年以上の前の人間だし、ギアスの様なものあり、この世界にくわえて、さっきの化け物が消えたことを考えるとやっぱりここは異世界かな？確信を得られる質問はこれかな。)

「最後の質問だけど、今なに暦か知りたいんだけど？」

「？今は西暦2003年ですけど」

少女が答えた後ライは頭を抱えたかった。

(西暦2003って、うわあ、皇暦じゃない上2019ですらない、どう答えたら良いかな、悪い子じゃないみたいだし、明らかに異世界だし、信じてくれるかどうかは別にしても本当ことだからな。)

ライが答えようとした時。「刹那、誰だそいつは？」質問が聞こえた其処には空に浮いている金髪の少女がいた。

エヴァンジェリンSide

エヴァと茶々丸が刹那達と違う場所で残りの侵入者を倒したとき。真奈が到着した。

「ふん、帰るぞ茶々丸、ん真名か？ここはもう終わったぞ？」

到着した真名にエヴァは言った。その時エヴァは突然異常な魔力を真奈が来た方向から感じた。

「なんだ、この魔力、転移魔法か？茶々丸？この魔力を持つ奴どこにいる？」

「マスター世界樹の所です」

茶々丸が答えると真名は驚いて答えた。

「ち、刹那がいるところに、直ぐに戻らないと」

真奈は来た途端に逆戻りした。

エヴァめんどくさそうに言いながら真奈が来た方向に飛んだ。

「新しい侵入者か、茶々丸、我々もいくぞ、ええい面倒ごと終わっ
たと思つたら、新しい面倒ごとか」

エヴァは真名に直ぐ追いつき侵入者の死角に行くように命令した。

目的の場所に着いたときは刹那は侵入者の少年の首筋に夕風の刃を
当て質問していた。

エヴァはその光景に違和感覚えた。

（コレだけの魔力がありながら刹那に遅れを取った？それになんだあの服装は時代錯誤にもほどがある）

とりあえずエヴァはいつでも攻撃ができる体制で刹那に質問をした。

「刹那、誰だそいつは？」

私が質問すると少年は警戒もせずに応えた。

「単刀直入に言うところの世界と別の世界から来た人間かな？」

「（異世界？）、魔法世界から来たのか？侵入者？」

エヴァはまた質問すると少年は予想もしていなかった答えを口にした？

「魔法世界？いや多分並行世界からかな？それに僕はここ来る直前心臓刺をされて死んだはずだし、僕も詳しいことは分からないんだ、後僕の名前はライ。」

ライと名乗った男の答えに私と刹那は驚いた。

(並行世界？心臓を刺されて死んだ？)

「 ちょっと待て、自分が何を言ってるのか分かってているのか？ 」

ライは苦笑しながら「 うーん、気持ちは分かるけどそれしか答えようが無いかな、 . . . 」

ライの雰囲気からは嘘を吐いてるとは思えない、それに並行世界と
いった、だからエヴァはある質問をした。

「 並行世界といったな、こことどう違う？ 」

「 僕の世界ではつい最近まで戦争ばかりしていた、後あの大きな大
樹が無かった、この子が言った麻帆良も存在しなかったし、魔法な
んて物はなかったかな？ 」

ライが言ったことが本当なこちらの世界まったく違う歴史だろう、
それにまったく異なる歴史から来た人間、なにか引きつられるよう
な雰囲気、奴から感じられる莫大な魔力、奴以上に剣はさらにそれ
以上の魔力を感じた、いろいろと興味が尽きない人物ゆえエヴァは。

「 だったら付いて来い、爺の所で説明して貰おうか、茶々丸、爺に
知らせる後高畑の奴にも、もう良いぞ刹那、爺の所に連れて行く。 」

「 はい、マスター 」 「 分かりました、エヴァンジェリンさん 」

L i s i d e

(爺?この責任者かな?)

そんな事を考えていたら、後ろの女の子が刀を鞘に戻し謝ってきた。

「失礼しました、それと先ほどは、助けただいて有難うございました。」

その時、奥からもう一人の女の子があらわれた。

エヴァンジェリンと呼ばれた子が「貴様らは、どうする?」と刹那と呼ばれた子と最後に出てきた子に聞いた。二人からは答えは。

「気になりますから、私も行きます」

「面白そうだから、私も行こう」
と言うことで全員で爺と呼ばれてる人のところに行くことになった。

エヴァンジェリンSide

道中自己紹介を済ませた後、ライはエヴァどこに行くのか聞いた。この都市の代表がいる学園長室と答えた、質疑応答やればいいと答え道中質問はなかった。

エヴァ達は改めてライを観察した。

顔はかなり美形

スレンダー

昔の王様着るような服装

髪は白銀と言っても良いくらいに綺麗

瞳は綺麗な水色

なぜか信用できる雰囲気

結果三人とも少し赤くなった。

学園長室についてドアを開けると

「化け物？」

初対面のひとではもはやお約束の質問・・・

設定 追加

ライの能力

年齢 18

身長は 178 体重 57kg

性格：殆んど怒らない

天然ジゴロ

戦闘、訓練になると目つきが変わる

コードギアス反逆のルルーシュ LOST COLORS の主人公
R2ではギアス編ルート設定から始まり。ルルーシュ、スザクと一
緒にゼロレクイエムを行い、本編とちがってルルーシュの代わりに
死んだ独自の設定。

騎乗した KMF ナイトメアフレーム

専攻試作型月下

月下の後継機 蒼月

ロイド達と一緒に作った イシュタル

イシュタルあニーナのフレイヤをエンジンにし搭載された KMF。
ゲームではロイドがニーナの研究が成功すればエネルギー - 問題に革
命が起きることを言っていたためエンジンとして使用させてもらい
ました。世間ではフレイヤが恐怖の対象にもなったためエネルギー
革命にはならなかった為、
イシュタルが最初で最後の核エンジン搭載 KMF となった。ゼロレ
クイエム終了前にイシュタルは極秘に完全に破壊し、設計データや
設計にかかわった者達の記憶はライのギアスで消した。そのためも
う二度と開発できない。

パラメーター紹介（F a t e風）

筋力：B 気：？

魔力：A + 耐久：C

敏捷：A 幸運：C

保有スキル

カリスマA

大軍団を指揮する才能

本人の無意識に人を引き付ける

無窮の武練A ++

ひとつの時代で無双ほこるまでに到達した武芸の手練
バトラーの実験で殆んど武器（近代兵器も含め）を

達人並みに使える。剣、槍、弓はもともとあつた技術

心眼（真）B

修行、実戦経験よつて培つた洞察力。

窮地において、その場に残された活路を導き出す戦闘論理

特殊魔法（固有結界）

王の軍勢 アイオニオン・ヘタイロン（王の証を出してる状態のみ
使うことが可能）

死してもなおライに忠誠を誓つた一騎当千の臣下をライを中
心に展開した心象現象の内のみに存在させ共に戦つてくれる。臣下
というだけ数は少ないが得意分野ならライと同等のつよさ。

筋力、敏捷、耐久は幼い頃からの鍛錬および薬物投与、肉体強化の御蔭で常人離れしている、気を使うと更にワンランクアップ、魔力はギアスの暴走状態が魔力に変換した為かナギ並みにある、その為ギアスはもう使えない、Cの世界で世界の記録らしき（真理）を見た為か魔法は無詠唱で出せるが魔力は詠唱の時より2割は

魔力を多く使う。

順応能力が高く魔法と気もコツを掴めば直ぐに覚える。

技T O Vのユーリから使わせてもらいます。

武器はエクスカリバー

この聖剣はかつてライにギアスを渡した人物の組織がライに渡したもの。

ライが所有者ゆえ他の人では掴めない、表に出すと大事件なので剣に意思を伝えF A T Eの宝具みたいに出し入れが可能になったがあまり使わない。

その代わり学園長の伝手で他の剣を用意してもらった。

宝具：魔力を扱えるようになってからF A T Eのセイバー見たいに魔力を光に変換することが可能になる。

パクティオーカード ステータス

名前表記 ライ・エス・ブリタニア

称号 皇帝陛下

色調 銀

徳性 導手

方位 南

星辰性 冥王星

アーティファクト 王の証

王の証を出している状態だと今まで使っていた武器や兵器が再現可能。

再現可能な物は本や椅子などを武器として使ったことがあるなら再現が可能。

ただし、再現ができるのは一つに付き一つまで。フェイトのエミヤ見たいに何本も同じもの投影できない。

例：同じタイトルの本を二つとも武器として使ったなら二つとも再現ができる。

MKFも再現できるがエナジーファイラー存在しないためイシユタル以外は動かせない。

希望が多いならナギマ！の世界で使うかもしれない。

武器：草薙の剣

ライが15歳の時に母親から譲り受けたもの。

ライが持つてる武器で神話級の物はエクスカリバと草薙の剣だけ。再現できる武器は戦場で咄嗟に奪ったもの、拾って使ったものなら再現ができるから数は300を超える。

一斉発射はできないが、上から大量に落とすことができる。

2話改 (前書き)

とりあえず自分なりに直しましたが、未だに駄目なところがあったら
言ってください。

2話改

近右衛門 Side

ワシがその魔力に気づいたのはエヴァ達に侵入者を討伐している途中じゃった。

麻帆良学園の学園長にして関東魔法協会の長 それがワシ、近衛近右衛門。

生徒や先生の一部には妖怪だ何だと言われているが……れっきとした人間じゃ。

初対面だと高確率いわれんじゃが……げふん、まあそれは良いとして。

新たな侵入者との戦闘は起きた様子もないし、これからどうするかのう、と考えてる途中で茶々丸君から連絡が着て、これからこっちくるようじゃ、ワシは直ぐにタカミチ読んだ。

「学園長、さっきの侵入者は？」

と開口一番に質問してきた、まあ無理もなかのう、ナギクラスの魔力持つ侵入者がいきなり現れたからのう。

「ああ、茶々丸君がこっちに連れて来ると連絡が着たんじゃ」

「そうですね、戦闘の気配が有りませんでしたけど、他には何か聞いてませんか？」

わしは茶々丸君からの侵入者の情報タカミチに伝えた。

「魔法世界じゃない世界から来たよ」

「そうじゃ、おまけにここに来る直前心臓を刺されて死んだはずじゃとゆうてな、本人も困つとるみたいじゃ、それに刹那君助けたみたいだしのう。」

などと話していると窓からその人物を連れて来たエヴァ達が見えてきた。

「おぬしは、どう見るんじゃ？」

「はい、此処からだと正確でないですか、歩き方身のこなしが一般人じゃないですね、それにあの服はさすがにどう答えたらいいか正直こまります」

彼が着ている服は明らかに一般人が着るような服ではない、おまけに此処からでも胸あたりが血がかなについておる。

「爺、入るぞ」

ドアが開いて彼を目の前で見た感想は。

白銀の髪、綺麗な顔立ち、黄金の西洋の剣を右手に

と簡単な感想を抱いた。

その少年の開口一番は

「化け物!？」

妖怪でなく化け物とな、ワシ泣いてもええじゃろうか。

「残念ながら、あれはギリギリ人間だ」

エヴァが答える。

ライ Side

僕は信じられない生き物？をみて思わず「化け物？」答えてしまった。するとエヴァンジェリンから。

「残念ながら、あれはギリギリ人間だ」

と答えがきた。

「すみません、失礼なことをい言って」

「くくく、爺、仮面でも着けたらどうだ？」

どうやらこの人が此処の責任者みたいだ、今まで見てきた責任者より話分かる人だと直ぐに直感でわかった。隣の人も信用できる人みたいだし、僕はギアス以外は喋ってもいいと思っていた。

「まずは、おぬし名前を聞こうかのう」

「ライ・ランペルージです、ライで良いです」

僕はライ・S・ブリタニアスメラギではなくルルーシュとナナリーに貰った

名前で名乗った。

「じゃあ、取り合えず君のことを説明してくれんかのう」

僕は最初に3大国を軽く説明し、それからブリタニアの歴史そして僕が過去の人間、最後にゼロレクイエムのことを話した、普通は信じない話だが今僕が持っている剣エクスカリバーが信憑性をあげてくれた。

タカミチ Side

最初彼を見た時は多分学園長と同じ感想を抱いただろう、彼の世界の歴史を聞いたとき此処まで違うものかと思った。

神聖ブリタニア帝国は皇帝を頂点とした絶対君主制国家で、厳しい身分制度のしかれた階級社会を維持しており、『不平等においてこそ競争と進化が生まれる』という現皇帝シャルルの持論を国是としていた。

世界の3分の1を支配しており、巨大な軍事力を背景に、世界各地で植民地化を目的とした侵略を続けている、それで日本はサクラダイトと呼ばれるレアメタルの世界最大の産出国ゆえにブリタニアの日本侵略の名目にされた。

これを聞いたとき作り話しは出来すぎている、その上彼の雰囲気は嘘を語っているとは思えない、初対面なのに彼は信用できると思っってしまった。

歴史の後は彼の生い立ちの話は流石に驚いた。彼はブリタニアの辺境の小国の王の子供として生まれ、8歳の頃から自ら戦場に出て、12で王なり幾つかの国と敵対したり和平を持ちかけたり、最後はすべてを失いある遺跡で眠りに付いた。

それを聞いて彼の雰囲気に納得した、王としての人を引き付ける力
リスマ性なのだろうと受け入れた、それに彼が持っている剣があ
アーサー王のエクスカリバーだと説明された時、本能がこの剣が本
物と訴えてくる。

それほどまでに存在感と神々しさを纏った剣だった、彼の世界だと
アーサー王は鞘と共に盗まれたと歴史きざまれていた。

彼が眠りに付いてから、千年近くたっていて。

遺跡で発見された時は記憶を失っていた、ブリタニアの人体実験で
現代の知識と機械操作技術な脳に刷り込ませられた聞いた時は僕は
怒りを感じた、その後レジスタンスが実験所に近く事件を起こし混
乱した隙に逃げ、アッシュフォード学園に拾われ、その後記憶探す
ために都会に出たが、ブリタニアと日本人との格差に怒りを感じ黒
の騎士団という組織に入った。

格差のはなしを詳しく聞いた時はさすがに嫌悪感いだいた、僕も彼
の立場だったら同じことをしてただろう。

それに、僅かに歴史が変わるだけでこうも世界が変わるものと痛
感した、彼の世界では魔法などは無くこちらの近代兵器より進ん
でるそうだ。

ナイトメアフレームと言われる自在戦闘装甲騎はこの世界には実
現できないだろう。

彼が記憶を取り戻し再び眠りに付いた後、黒の騎士団は敗北し壊滅、
一年後彼は再び目覚め組織を立て直した、その時組織のリーダーが
親友だと知った。

その後、ブリタニアに対抗するために、ブリタニアと敵対している

国に協力を求めた。

ルルーシュとライの能力で超合衆国と呼ばれる連合国家を作ったと言われたときは驚いた、その後ゼロが敵国の帝国宰相の策略でゼロは組織に裏切られ、彼もその後、組織から離反した。

敵対していたもう一人の親友スザクとルルーシュと彼で人々の憎しみの連鎖を断ち切る計画ゼロレクイエムのことを行うと3人誓った。皇帝陛下を殺したと発表した。

最初に信用を得る為にナンバースの解除、差別的な身分制度の破壊。そのせいで、ブリタニアの貴族達の反乱。その反乱を利用して世界に力を見せ付けた。

そして、元皇帝陛下の直属のナイトオブブラウンスもが襲ってきた、それも撃退して世界に絶対的な力を見せ付けることができた。

最後の最大の難関は核兵器であるフレイヤを持つシュナイゼルだった。彼の考えはライとルルーシュには分かっていた。彼は世界中の紛争地帯にフレイヤを落とし世界を恐怖という今日と言う日で世界を固定しようとしていた。

それを止めるため超合衆国の代表を人質にし、黒の騎士団をシュナイゼルと結託させた。

シュナイゼルと黒の騎士団と戦争でライ達が勝ち。その後は計画通りにライがルルーシュを裏切り世界を手にした狂王として、世界の人々の憎しみを受けた。

このゼロレクイエムの最後の仕事、反乱分子を公開処刑にする前に、

親友であるルルーシユを裏切ったライをスザクが殺すことで成功する。

作戦は成功し、死んだはずのライが目覚めたら。かつて千年前に持っていた剣を握り締め世界樹のまえに居た。

ライ君の説明が終わった後聞いていた僕たちは啞然していた、特に僕は計画ゼロレクイエムを行った彼と彼の親友達に尊敬の念を抱いた。

まだ高校生である彼らが親友を民主の前で殺し、世界の憎しみを背負い、そして世界を軍事力ではなく話し合いという一つのテーブルに付けさせた。
戦争をとめるだけでなくその先まで考えた彼らに僕は涙が出そうになっていた。

近衛 Side

彼の説明を聞き終えたわしは、普通なら彼の話信じるには無茶がありすぎると考え一蹴するが、彼の態度と雰囲気ですら真実じゃろうと考えた、それに彼は此処に存在し生きている、これからの方が重用じやろう。

この後彼にこちらの現状を話し、彼にこの後どうするか質問した。

「ライ君、おぬしこれからどうすんじや？」

ライ Side

僕は近衛さんにこれからどうするのかと聞かれた、正直言ってしまう。ルルーシュ達はこれから苦労するであろう。彼ら他所に自分はこうして生きている、そのことに怒りと呆れなどの感情が頭に響く。けど立場が逆なら彼らには生きて欲しいと思うだろう、いや言い訳を作るのはやめよう、生きているなら生きるだけだ、それがこの世界で明日を望む人々の願い感じた答えだ。僕達の誓いだから。だから僕は答えた。

「生きているなら最後まで生きます」

近衛 Side

彼は真つ直ぐな瞳で答えた。

「そうか、ならどつじやこちらで便宜を図るコトも出来るぞ」

「得体の知れない相手であるが、下手に拘束するよりは手元で監視しておくほうが無難…という訳ですか…」

「ふおつふおつ、まあソレも含まれとるよ。だが同時に困っている者に手を差し伸べようという気持ちがあるのも確かじゃよ？それに大事な生徒を助けて貰ったんじゃからな」

「と言うより、僕の話信じた根拠なんです？自分から言っただけなんです、とても信じられないはなしですよ？」

「まあ、コレでも伊達に年はとつたらんよ、人を見る目には自信が

あるほうじゃぞ」

「じゃあ、ここはお言葉に甘えさせてもらいます、それと何か職と
かありますか？」

「職のほう無茶なものじゃなければお主の希望どつりに用意できる
ぞ」

ライは少し悩みながら答えた。

「喫茶店でいいでしょうか？料理は得意ですから」

「ああそれぐらいなら構わんよ、先月閉店した店を清掃とか準備を
考えると二週間後じゃな」

「有難うございます、それまでに何か雑用みたいのはありますか？」

「そうじゃな、店が開店するまで2・Aのネギ君の補佐をしてもら
おうかのう、期末試験始まるし」

学園長は2・Aの最下位脱出をネギの採用試験にするつもりだった、
その為の補佐ならライは適任だと思った、先の説明も分かりやすく、
要点をまとめていた。

「はい、それでいいです」

「そうじゃ、ライ君は腕も立つし裏の仕事もやってもらえんかのう」

「いいですよ、代わりに他の武器を用意できますか？この剣表に出たら厄介なことになりますし」

「ふおつふおつ、構わんよ武器は西洋の剣でええかの？」

「いえ、日本刀をお願いします、母が日本に持ってきた文献の御蔭で剣術も覚えてますので」

「そうか、じゃあそれなら明日の夕刻までに用意できるぞ、それにしても器用じゃの日本刀も西洋の剣も扱えるのわ、まあ後寝床じゃが」

わしがタカミチに頼もうとしたとき思わぬところから声 came。

「なら私のところに来い、部屋は余ってるしライには興味がある」

この一言はわし等は驚いた。

エヴァンジェリン Side

私はライの話聞いて興味をもった、アレは私と似ている、敵対する者を殺した目、幼い頃に人を殺した奴の空気が。

「いいのか？僕が泊まっても？」

「ああ、構わんそれにお前の腕を試したい、お前剣以外の武器も扱えるだろう？」

「よく分かったね、一応槍術と矢扱えるけど」

この返答で刹那の奴は驚いていた。

「そうか、それは楽しみだ、なら今晚見せてもらおう、お前達もくるか？」

「え！いいんですか？」

「私はいい、どうせそのうち見れるだろうし」

「それじゃ、私の家に行くぞ、じゃあな爺、ライは明日の夕方にくればいいだろ？」

「まあ、そうじゃな」

私達は学園町室をでた。

近衛 Side

彼らが部屋出た後ワシはタカミチに質問した。

「ライ君の話どう思う？」

「嘘は付いてないのは確かですね」

「まあ、そうじゃろな、にしてもあのエヴァに興味もたれるか、恐ろしいカリスマじゃのう」

「やっぱり、あの雰囲気は彼が王だから出せるカリスマですね」

「あれは一種の才能じゃろ、それに彼は覚悟がある、それに少なからぬ人に影響与えられるし」

「そうですね、ネギ君達にいい影響だといいますが」

「明日の他の魔法先生達に紹介し腕試ししてもらおうかのう」

「ほむほむにしてくださいよ」

「ふおっふおっ」

2話改 (後書き)

「フルーシュ」です、駄作ですみません、ギアスあらすじを説明するのが大変でした、

自分の才能の無さが恨めしい、あとライはギアスの事は話してません。

次回は別荘で腕試しです。

3話

エヴァ Side

学校から出て直ぐに真奈と分かれた後ライから質問が来た。

「エヴァンジェリンて何歳なの？見た目とは違うと思うけど？」

「なぜ、そう思う？」

そう私が質問するとライは。

「知り合いにピザ好きの不老不死の自称魔女がいたんだよ、エヴァンジェリンもそいつに雰囲気かにてたからかな？」

「私はこれでも600歳だぞ、それにしても貴様の世界にもそのような存在がいるんだな、そいつのこと教えてくれ面白そうだ、後私と事はエヴァでいい」

別荘に着くまで私は吸血鬼のこと、ライはその魔女のことを話した、名前C・C、追われている自覚を持ちながらも堂々と外を出歩いたり、その性格は気楽かつ傍若無人な性格、はっきりいって私より性質が悪い、など話してる内に着いた。

「凄いな、魔法はこんなこともできるの？」

「いえ、恐らくエヴァンジェリンさんだけですよこんなことできるのは」

刹那が答えた。

「ああ、此方の1日が外の1時間ではあるが、此方で最低1日過ごさないと外には出れん。なに、食糧もあるし、風呂もある、2、3日いたほうがいいな」

「「すごい」」

「呆けるより、早速貴様の實力見せてもらうぞ、ああ武器なら奥にあるものを使ったほうがいいな、その剣流石に規格外だ、刀、剣、槍、斧ぐらいならあるぞ、無銘だがな」

そう言ったら刹那が自分から相手をしたと言ってきた。ライは刹那に合わせ刀をえらんだ。

「ルールは、実践感覚の法がいいだろ？刹那？」

「はい、それをお願いします」

刹那 Side

エヴァンジェリンさんが合図をして直ぐにライさんが仕掛けてきた。

「なッ！！」

動いて既に私の懐まで来た、瞬動でもない、気がまったく感じられ

なかった。私はどうにか初撃防いだが、彼は次々斬撃を繰り返す、私は反撃は愚か息をする暇も無く彼の攻撃を防いでいた。

斬撃は鋭く、自分が反応できてるのが不思議なくらい。

体捌きは私が動く前から、動いている、コレはもう私の動きが分かっている動き、もうそれは未来予知。

それから、数分経過し彼の剣先が私ののだ笛で止まる。

私はまったく反撃できずに試合終わった。

ライさんの動きを今思い出してみると、改めて凄いと思った。

・

「なるほど、人間としては最強だな、刹那お前はなぜ反撃できないか分かったか？」

私は率直な感想で答えた。

「反撃に出ようとしたら、動きに反応したと言うより既に読んでいたという感じです」

「ああ、そのとうりだ、あれは敵の動きをを元に次の動きを何十通りの中から最善のてを予測し対応した動きだ」

それを聞いた瞬間、私は戦慄した、何度も打ち合いをした相手ならともかく、初めて相手、しかも僅かな動きから先を読むだけでなく最善の手を打って動きを封じられた。

「エヴァ、僕は最強とは流石に言いすぎだと思っけど」

ライさんがエヴァンジェリンさんに言う。

「アホ、私は人間として言ったんだ、お前は这个世界の戦い方をし
らんだろう、这个世界の戦い方は気や魔力で身体強化して戦うんだ
よ、貴様は魔力は愚か気すらねってないんだぞ、刹那は未熟とはい
え気を練っていた」

それを聞いて私もエヴァンジェリンさんに同意した。この人は強い、
もし気や魔力を使えたらまだ強くなるだろう。
だから私は彼にお願いした。

「あの、ライさん、私を貴方様の下に置いてくださらないでしょ
うか！」

「へ？それって」

「お前の弟子になりたいんだそうだ」

「まあ、それはいいけど、本当にいいの？僕なんかで？」

「はい、お願いします」

「ずいぶん、あっさり了承したな」

「断る理由もないしね、僕でいいならね、その代わり気の使い方を
教えてくれないかな？」

「あ、はい、これからよろしくお願いします」

「さて、刹那の次は私の相手をして貰おうか？私は刹那の様には行かんぞ」

「へ？でもエヴァが飛んだら僕は手も足もでないけど？」

「ああ、それなら安心しろお前が攻撃ができる高さまでしか飛ばんよ、後、本気で切りに来い、私は不死身だからな」

「ふう、わかったよ、少しまって奥から使いたい武器があるから、取ってきていいかな？」

「ああ、かまわんぞ、ただし本気で来い」

ライさん奥に武器をとりに入った。

「刹那、珍しいな貴様が弟子入りを志願したのは、奴に惚れたのか？」

「なツな、なに言ってるんですか、私は純粋にその、えっと、それよりエヴァンジェリンさんこそ珍しいじゃないですか？」

「ああ、私か？まあ確かにあいつ惹かれているな」

「へ！？」

あまりにあっさり返すから驚いた。

「くくく、あれは一種の才能だよ、アイツに対してお前も警戒心がもう無いだろ、王として人の上に立ったからか、あれは人を惹きつ

ける、それでか私はアイツに個人的に興味がある、お前はどうか茶々丸？」

「私えすか？分かりません、けどなぜだかライ様の近くに居ると安心します」

「だそうだ、刹那？」

「うう／＼／」

確かに最初に比べたらもう警戒心が消えていた。そんな話をしているとライさんが戻ってきた。

「ん？どうしたのみんなして？」

「んにゃ、なんでもない、始めるぞ、槍か」

ライさんは右手に槍を持って、綺麗に槍をくるりと回し、脇にて挟む、流れるようによどみもない槍さばき、それは明らかに素人のものではない。

これには、流石にわたしは声がでた。

「す、すい」

先ほどの剣も素人の動きではなかった、学園長室で言ったことが本当なら弓もとんでもない腕だろう。

「器用だな、剣だけでなく槍までソコまで使うとは」

「ああ、火器を使わない時代の戦場だと自分の身体能力は重要だから、それに剣一つだけじゃ血のりが付いて、駄目になるから、倒した敵の武器をつかんだよ、何本も武器を背負うと動きが鈍り、体力もすぐ持ってかれる、剣と槍は結構使われてたしね」

ライさんはそういった、あの人強さを改めて認識させられる言葉だった。

「さあ、始めようか」

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック…」

「氷爆！」

氷が雨の用にライさんの頭上に降りかかる、しかし彼は槍を構え、氷の雨を叩き落としにいった、致命傷になる氷を瞬時に見分けそれを優先した、その結果多少カスリ傷が付いた、しかし始めて見る魔法に対して最善の手を打ったことはやはり凄いと思った。

「やるな、次は、なツ！？」

するとライさんが消えた、いや消えたんじゃない、とんでもない速さでエヴァンジェリンさんの横に移動した。

「月下天翔刃」

そう、言葉を発し斬撃と蹴りを与え最後に斬撃で叩き落とし、槍を突

き付ける。

「くく、くはは！ハハハハ！！」

「面白い！くく、こつも簡単に決まるとは、さっきのどつやっただんだ？」

エヴァンジェリンさんが愉快そうに聞いた。

「ああ、あれは、初速から最大の速さで移動しただけ、ほら僕が居た場所足跡がついてるし」

ライさんが居た場所を見ると確かに足跡が付いていた、土の上とはいえあれだけの後だとかかなりの脚力を掛けたみたいだ。

「まさか、気を使わないで縮地を使えるとは、本当に面白いな、私が負けるとは」

「魔法使いと戦うの初めてだから、短期戦にもちこんだだけだよ」

そう言ったライさんは苦笑していた。

「それにしても、さっきの槍術はなんだ？」

「あれは。剣術と同じで母上が故郷の日本から持ってきた文献で習ったんだ、それとその本はかなり傷んでいたせいで使える技は少ないし、流派は分からないんだ」

「そうか」

エヴァ Side

改めて思い返すと、気も魔力を使わないのは厄介だと認識した、それらで身体強化すと気配が大きくなり奇襲を掛けられない、瞬間などは使われても気や魔力で強化したせい無意識にある程度反応できる。

「なあ、エヴァ、僕は魔法を使えるかな？」

どうやらライは魔法に興味を持ったようだ。

「お前は、覚えれば使えるぞ、気づいてないだろうが、お前の潜在魔力はとんでもなく高いからな」

「へ！？そうなの？」

「ああ、覚えてみるか？」

「教えてくれるなら」

「そうか、くくく、じゃあ早速」

あれから初級魔法や気を有る程度教えたらこいつは直ぐに覚えた。

とゆうか、無詠唱で使ってるぞ、呆れながらライを見ていた。

「ライ、何なんだお前は？無詠唱を使えるだ？」

「多分、あれかな、校長室で話したこの世界のせいかな」

「ああ、思考エレベータとか世界の理を変えられる力があるとか」

「うん、僕はそこで契約ギアスしたから、千年ぐらい寝てた、契約をする
ときこの世界（コード）を持つもの（はこ）だったんだ」

契約すれば、お前は人の世に生きながら、人とは違う断りに
生きることになる、

異なる摂理、

異なる時間、

異なる命、

王の力はお前を孤独にする、その覚悟はあるか？

それを聞いてなんとなく納得した。ライは人は違う理で生きている
と。

その後、食事はライが作った、茶々丸にも作り「茶々丸はエヴァの
家族だから一緒に食べよう」と言ってみんなで食べた。

このときの食事は素直に美味しいと感じた。

刹那は明後日てからライと早朝稽古する約束をし一日で別荘をでた。

私はライに魔法の知識などを教えた、こいつは一聞いて十を知ると言いたい位頭の回転が速い。

唐突にライは言ってきた。

「エヴァは魔力を回復させる為に血が必要なんだよね？僕の血じゃ駄目かい？」

素で言ってきた、こいつ天然だと思いながら私は答えた。

「ああ、大丈夫だぞ、でもいいのか？」

「うん、エヴァの家にお世話になるし、魔法も教えてもらった、着るものも用意貰ったんだ、それぐらいいいよ」

苦笑しながらライは答えた。

「お前が、そういうなら貰うぞ」

ライの首筋から血を吸った、今までに吸った血の中で一番美味しくつい必要以上に吸ってしまった。

「済まない、つい吸いすぎた」

「ああ、かわないよ、コレぐらい」

ライがかわないと言った直後にふらついて私の膝の上でたれた。

「ごめん、ちょっと」

「いや、私が吸いすぎてしまったから、少しこのままでいる」

私が膝枕をしている中ライに質問した。

「お前は、怖くなかったのか、私がお前を奴隷として意のままに操ってしつ待ったかもしれんだぞ？私が吸血鬼だと知っても怖くないのか？」

「んん、コレでも人を見る目があるからね、エヴァは優しいだと子し」

「お前、馬鹿か？此処に来る前に言ったる私がしたこと？」

私がそう質問するとライはとんでもないことを言った。

「僕には、ギアスと言う力があつたんだ、それは声だけで人を思いのままにする力があつたんだ、その力で父を殺し、兄達も殺し王になった、そしてその時代の最後はギアスが暴走しこう言った、蛮族達を皆殺しにしろと、そうしたら僕の国の人達が全員武器とり戦い、最後に僕だけが生き残った」

ライは淡々と説明した、なぜ記憶が無かったのか、大切な人たちに自分のことを記憶から消したと、そのことで親友はみんなが苦しんだと、爺たちには言っていない事まで話してくれた。

「コレが、僕なんだよ、エヴァこそ怖くないのか？」

それをきいて私はライの頭を撫でながら答えた。

「ありがとう、すべて話してくれて、私はこれでも6000年生きたんだぞ、お前よりは人を見る目がある」

ライはそれを聞いて微笑みながら寝てしまった。私はライの頭を撫で続けた。すると今まで黙ってた茶々丸が

「マスター、恋する乙女みたいです、顔を真っ赤にしたマスター、とてもかわいいです、全部記録しました」

「きつ貴様、後でネジをタップリと巻いてやるからな」

茶々丸に反論できない自分の心情に驚きつつ、茶々丸にある命令をした。

「茶々丸、ギアスの記録は消して、どんなことがあっても誰にも喋るな」

「はい、ギアスに関する動画は、只今削除しました、ただマスターが嬉しそうに微笑んでた動画はキッチリ残します」

「今は、気分がいいから突っ込まないからな」

そう、言いながらライが起きるまで待つて別荘を後にした。

絶対に他の連中に知られてはならんようにせんと、それにあつた
ライはいった、そのことは明日聞けばいいか、そう考えながら眠り
ついた。

3話（後書き）

一級フラグ建築士能力発動。

エヴァ陥落（合掌）。

戦闘シーンがあまりにも短くなったことを悔いています。

今回も駄文を読んでくれて有難うございます。

4話

ライ Side

鳥のさえずりで僕は目が覚めた。

別荘ですごした日を合わせると三日目となる、学園長が明日の夕刻に刀を用意してくれると言ってたが、別荘のせいで日付の感覚がちよつとへんだ。

僕は外に向かい、大きく息をする、すると中から茶々丸が出てきた。

「お早う御座います、ライ様。ずいぶんと早ですね？」

「ああ、うん、お早う茶々丸。茶々丸ずいぶん早いね、後様は辞めてくれると嬉しいんだけど。」

「分かりました、ライさんと呼ばせてもらいます」

「はは、有難う」

僕は苦笑しながら答えた。

それから茶々丸と紅茶を飲みながら、この学園と明日僕が手伝う2 - Aの生徒とその担任のことを聞いた、10歳の子供先生と聞いたときは、驚いた。そんな話を聞いて朝食を茶々丸と作った。

エヴァも起きてきて、一緒に朝食をとった。

「ライ、コレを使え」

そう言いながら、エヴァは封筒を渡してきた。

「これは？つてお金」

「ああ、お前が必要な物を買って来い、金のことは気にするな、どうせ裏の仕事と学校の教師の手伝いで直ぐに入るんだ、お前のことだから私が返さなくてもいいと言っても返す気なんだろう？そのときまで貸してやる」

「うん、それじゃお言葉に甘えさせてもらおうよ」

「んん、美味しいなこれ、お前普段から食事を作っていたのか？」

「ああ、妹や当時のラウンズ達に振舞っていたからね、毒殺とか注意しないとイケなかったから」

「まあ、確かに自分で作ったほうが安全だな」

「ライさんの和食も昨日は美味しかったですけど、やはりお母様から習ったんですか？」

「うん、当時は材料は無くあまり作れなかったけど、現代の時は、ほら脳にいろいろ情報が住み込まれたって言っただろ、その時料理のほかに裁縫とか機械の修理だとか、クラッキングの技術とかはもう頭に入ってるから」

「バトラーと言う奴はお前に何をやらせたかったんだ？」

「さあ？けどその御蔭で現代に馴染んでるし、あまり怨めないかな」

そんな話をしながら食事を終え、エヴァ達は学園に向かった、僕はとりあえず付近になんの店があるか見て必要な物を買いに言った。

エヴァ Side

「マスター、学園長がお呼びです」

「そうか、お前は教室に行ってる」

茶々丸と別れ爺に部屋にいった。

「入るぞ、爺」

中に入ると、タカミチも中に居た。

「すまんのう、わざ」御託はいい、何が聞きたい、どうせライの」とだろ?」「・うむ、どうじゃ、彼の強さは?」

「強いぞ、剣では刹那は一度も反撃ができず、私とやったときは初めて見た魔法に動じず対処し短期戦もちこみ、私に勝ったからな」

「マジ?」

「ああ、気も魔力も使わず縮地を使ったからな」

「なっ、本当なのかい?」

タカミチが驚きながら聞き返した、無理も無い。

「本当だ、それゆえ私は奴に反応できず、開始直ぐにやられた、私が油断しすぎたせいもあるがな」

「恐ろしいのう、これで気を「奴はもう使えるぞ」はッ?」

くくく、間抜け面しこいつ等の顔をみて笑いを堪えながら言っていた。

「ライはもう、気も練れるつえ、魔法の基礎を教えたら初級、中級魔法は使えるぞ」

二人はもう言葉を失っていた。

「一を聞いて、十を得る感じだあれば、戦神や闘神と言ったところか、あの才能は、ナギと違って頭の回転は速いからな」

「すると、ライ君は今どれくらい強いんだ？」

「アイツは応用力もあるからな、多分この学園で一番強いぞ、封印を解き空で戦わないと私も勝てないからな、アイツはまだ飛べない上、攻撃魔法しか覚えてないから」

「すえ恐ろしいのう、「敵に回ることはまず無いぞあいつは、貴様ら馬鹿なことをしなければな」・・・」

タカミチ Side

エヴァは愉快そうにいった。

正直彼は強いと昨日は思ったけど。

エヴァが酔狂で言ってるわけじゃないと思っているが、やはり自分で手合わせをしたいと思ってしまう。

それにしてもエヴァのあんな嬉しそうな顔は見た事がない。

「剣術は詠春より上だ、槍も剣と同様一流、おまけに料理も美味い、頭もいい顔は見てのとおり」

何その完璧超人？って顔を学園長がしていた。

「しかしお主だいぶライ君を持ち上げのう？もしかして惚れたのか？」

学園長が悪戯半分でからかったら。

「そうかも、知れんな」

とハッキリ言ってきたから僕も学園長も驚いた。

「今晚、ライの実力を見るんだろう、だったら刀子が適任だな、ライが遊べばある程度奴らに実力を見せられる、下手にタカミチとかけし掛けたら短期戦で終わるぞ、だからライに手加減させ、実力を見せたほうがいい」

「彼が、使える魔法の属性は？」

「火と風、雷と闇だな、あの聖剣に魔力を送れば光に変換するぞ、あれは大軍用ではなく対城用だな、後あの剣は出し入れが自由に可能だったぞ、あれはこちら側（魔法側）の物だからな、タカミチ命が欲しいなら本気で来いなど言わん方がいいぞ」

「後、アイツは自分で咸卦法を思いつき、数回ためしコツを掴み会得したぞ」

そう言いながらエヴァは退室した。

「どう思いますか？学園長？」

「ふむ、ライ君は信用できる子じゃろうし、こっち側に保護したほうが無難じゃろ、それに」

「それに？」

「あのエヴァが嬉しそうに他人のことを話すのは始めてじゃからのう、わしも嬉しいじゃよ」

エヴァの登校地獄が始まってから一度も見たことが無い顔だった、他人との関わりを拒絶してた彼女がああまで変わらせたライ君には学園長は感謝してるみたいだ。

夕方彼を呼び、届いた刀を渡した後、魔法先生達の前に紹介した。

「この場で君の力を見せてもらおうかの、まあ採用試験みたいなもんじゃ、刀だし刀子くん頼めるかの」

「はい」

「判定はどちらかが気絶、ないし降参した場合と儂が勝負ありと判断したらじゃ」

「神鳴流剣士、葛葉 刀子。参ります」

「ライ・ランペルジ。いきます」

先手を取ったのがライ君、間合いに詰めた疾走はとんでもなく速く、僕たちは驚いた。彼はワザと刀子先生の刀に当てた、それから刀子先生は防戦一方になった。

反撃をし様にも隙は無い。

彼は回転を活かし斬撃と突きと蹴りを繰り返した。

彼の動きは無駄が無く斬、突き、蹴りには前動作の無駄が無いのと、相手の動きを先読みし反撃をする前に潰される故、刀子先生の額に冷や汗が流れた。

彼は直感ではなく、経験と思考の速さで相手の動きを予測しを詰むという難易度の高い戦いしていた。

それを破るには彼の予想を上回る攻撃か反応できない攻撃をするしかない。

彼は攻撃を辞め、一旦距離を取り刀を構えた。

「刀子さん、少し本気で技を出します、覚悟してください」

「またつく、今までには本気ではなかったと？」

そう言いながら、刀子先生も構えた。

刀子先生が動いた瞬間

「幻狼斬」

彼は刀子先生の刀を瞬時に弾き背後を取って剣を突き付けた、それはまるで得物を狩る狼のごとくの気迫だった。

採用試験が終わり学園長がみんなに言葉を発した。

「これで、ライ君の実力は分かったところで解散するかのう」

5話

刹那 Side

ライさんの弟子入りし初日の感想。

「さて、終わりにしよう」

「はあッ、はあッ、はあッ、はあ、有難う御座いました」

はつきり言って、とんでもない人だ、初めて手合わせしたときは彼に反撃できず終わった、今回は私が攻め彼が守り一辺倒の打ち合いをしてもらった。こちらの攻撃は何一つ通じず、私のスタミナ切れで終わった。甘く見ていた、昨日の刀子先生と試験で彼は攻撃は最大の防御の戦い方をすると勝手に解釈していた、しかし彼は攻めよりの守りの法が凄かった、もしコレが敵なら恐怖心より絶望がさきに襲い掛かっただろう。

「頭の中はどう？かなりクリアになって自分の心臓の音がきこえる
だろ？」

「はい、それだけでなく普段気にしてなかった音まで聞こえます」
風の音が聞こえる、今はそれほど強くないのに、普段なら聞こえなかった。

「その感覚が理想だから」

「理想ですか？」

「うん、その状態なら僅かな気配も感じられるだろ？それに身体が疲れてるから無駄な動きをしなくなる、この時に基礎の型を丁寧にやる方が、ガムシヤラに五百や千回振るより効率がいい。スタミナがある状態と無意識に余計な力を入れるからね、それに筋力には限界がある、ちよつと見てて夕凧を少し借りるよ？」

「はい」

またしが返事をする、ライさんは夕凧を握り30cmぐらの岩に力も込めず夕凧を振り降ろした、そして驚くことに、岩は綺麗に真っ二つになっていた。

「なっ!？」

私は、まったく力も気も練らずに簡単に岩を切ったことに驚いた。

「このとおり、本来なら力も気も使わずコレぐらいは人にはできるはずだよ、それと」

そついつて彼はさつきと違って夕凧を構え、木の枝を切りかかった、普通はいや本来なら綺麗にきれいがずだ、しかし枝には刃が当たった音だけがひびいた。ありえない、あれだけ力を込め、あれだけ鋭く切りかかったのに。

「刀に意思を伝えれば、どんなに鋭く斬っても斬らないことができる」

ライさんは苦笑しなら言った。

「あ、あの私もそれが可能なのでしょうか？」

「生半可な覚悟じゃできない、それでも君は此処（高み）に来たいかい？」

そういつたライさんの目は鋭かった、まるで生半可で来れば命はないと暗に示してる感じだった。

「はい、守りたい方が居ます、例えこの身がどうなっても」

「この身がどうなってもか、残念だけどその考えは捨てる」

「え！？」

「どんなに無様でも、どんな恥をかいても生きると思えないなら、これない高みだぞ、死ぬ覚悟はその気になれば誰でもできる、生きたい、だから命を掛けて戦ってる最中でも活路見出すために思考がいつもより回転し、本来なら気づかないことが気づくことができる、僕はいつでもその状態になれるよう訓練した、自分の体力気力を極限まで追い詰め、クリアと言うより無我かなその感覚を肉体に脳に覚えさせた、人はいや、すべての生命は命を掛けた時が一番集中できる」

この人は才能の御蔭じゃない、極限まで気力を追い詰め常に鍛えてきた、自分の覚悟はとるに足らないものだど痛感した、生きたいから、戦いの最中、思考が回る。

「だから、死ぬ覚悟捨てる」

「はいっ」

ああ、この人に師事を頼んでよかったと思えた。

「明日からは、最初に今日と同じようにして、後は僕の攻撃を防ぐのがいいかな、刹那はいい勘してるから、理詰めより、相手の攻撃に無意識に反応させるのがいいな」

そう言っつて初日の訓練が終わった。

ライ Side

エヴァたちと朝食を終え、学園に向かった。

エヴァ達は教室に僕は校長室に向かった。

「学園長、入ります」

「おお、待つとつたぞライ君」

そういつた学園長のそばに眼鏡を掛けた少年が立っていた。

エヴァに魔力の感じ方を教わった御蔭で魔力を持っている人はある程度感じる事ができた。

「このこがネギ君じゃ、君のことも話してある、期末試験のための担任補佐じゃと」

「ライ・ランペルージだ、よろしく」

「ネギ・スプリングフィールドです、よろしくお願ひします」

挨拶をし僕たちは2・Aに向かった。

「ライさんは少しここで待っていてください、しばらくしたら呼びますので」

「えーと、まず皆さんに報告があります。今日から試験までの間の担任補佐が来ることになりました」

「「おおー!!」」

新たな先生の出現に、驚きと期待に満ちた声上がる。

「それではライさんは入ってきて下さい」

反応が全く無い、どうしたんだろう？

「「・・・か」」

(か?)

「「かつこいいー!」」

「どこから来たんですかー?」

「何歳ですかー?」

「彼女はいますかー?」

「その髪地毛なんですか？」

次々に質問された。

「はいはい、皆静かにしなよ」

何故かカメラを片手に持った女の子が皆を制止する。

「はいはい、質問は番記者のアタシ、朝倉和美が仕切らせて貰うよ」

「名前と年は？」

「名前はライ・ランペルジ、年は今年で18」

「趣味は？」

「チェス」

「その髪は？」

「地毛、イギリス人と日本人のハーフ」

「彼女は？」

「いないよ」

「どうして、期末試験までにしか居ないんですか？」

「学園長に喫茶店を開くまでにその日まで補佐してほしいとお願い

されて」

「その髪凄いサラサラしてるけど、何か特別な手入れを？」

「いや、全くしてないけど」

その後も質問攻めにあい、チャイムが」なった。

6話

ライ Side

学期末テスト。

今回に期末テストでネギを採用される為の最終課題なるものが学園長から出されたらしい。

ネギは最初は楽観していた。しかしじぶんの受け持つ生徒、学園のエスカレーターシステム、そしていままでの成績それを肌で感じたとき彼は屍となっていた。

ネギの採用試験だから大きな手伝いは彼の為にならない。問題はバカレンジャーが赤点を取らなければ最下位からすぐに脱出できるから、彼女達の成績をアップさせるのが採用試験の様なものだ。

彼女たちはネギと違う空き教室にいき特別授業を受けている、この案は僕がだした、彼女達バカレンジャーに分かりやすく教える必要があり、そのために試験まで別々に授業させた。

他の子達は普通に授業しても平均点が取れるゆえ、彼女達の授業は僕が見ることになった。

ある日の夜、図書館に本を借り行ったら、思いがけないじんぶつにあった。

「何してるの？刹那？」

「ラ、ライさんいつものまに・・・」

刹那は驚きながら慌てて振りかえってきた。
気配を消していたわけじゃないんだが。

それほど目の前に集中していた、と言うことが。

どれどれと僕が刹那の頭越しにその視線の先を見ると、

そこには図書館探検部＋バカレンジャー＆ネギがいた。

魔法の本だとか何か聞こえてきた。

そして彼らは図書館島に入っていた。

飛び出そうとする刹那を僕は抑える。

「落ちつけ、刹那」

「しかし、ライさん！ お嬢様があの中に……！」

「少し待って、学園長に聞いてみるから」

ワンコールで学園長が出た。

「どうしたんじゃ？ライ君、こんな時間に？」

ネギの採用試験と彼女達が魔法の本を探しに行ったことである可能性に行き着いた。

「魔法の本を餌に缶詰状態にして勉強させる」

「うぐっ、なぜそれを？」

「その答えで確信を得ましたよ、ネギの採用試験なのに僕に手伝わ

せたり、魔法は秘匿されているのに彼女達は魔法の本を知ったのは学園町が意図的に流したんでしょ、加えて図書館の地下には大方数日分の食料など準備されおまけに勉強ができる環境が用意されている、まあ、最後の二つは感ですけど」

「おぬし、とんでもないのう、僅かな情報で其処まで当てるとは」

「彼女達を缶詰状態にしてるときに、僕に他の子達を頼むつもりなんでしょう、学園長？」

「あたりじゃ、明日菜君達が赤点を回避するだけで採用できるから
のう」

「だから彼女達の学力アップはネギがやらないといけない」

「そうじゃ、だから試験が始まるまで教室の子達は頼む」

「分かりました、一つ聞きたいんですけど？」

「なんじゃ？」

「地下に行った子達は安全ですよね？」

「うむ、誓って言うが、だれも怪我などさせんよ」

「わかりました、では」

「だそうだ、刹那、君は部屋に戻ってテスト勉強したほうがいい」

「わかりました、ご迷惑を掛けてスイマセン」

「いいよ、コレぐらいは、後試験が始まるまでの三日間は早朝の訓練はなし」

「ええ!？」

「学生は勉強が本分だからね」

「はい」

返事しながら刹那は部屋に戻っていった。

近衛 Side

ライ君から電話がきて第一声におどろいた。僅かな情報でわしの計画を看破した、あの洞察力、以前彼がいた世界で連合国家を作ったのは伊達じゃないとゆうことかの。

ライ Side

試験当日。

ネギ達は結局試験ギリギリになって受験する事になった。そして結果発表の際に学園長のミスでまたもや学年最下位となってまた一悶着あったが、結果としては再計算の末になんと学年トップにまでなった。

6・5話

春休み最終日

喫茶店ランペルージ

アスナ Side

私とこのかはもと担任補佐がやってる喫茶店でかなり早めな昼食を取っていた、理由は昼ごろになると店が満員になる。

「おはよう、お兄ちゃん」

「おあよう、ライさん」

「ああ、おはよう二人とも」

私達は何時もと同じカウンター前に座った。

「今日のご注文は？」

「うん、今日は海鮮パスタで」

「うちは、パエリアで」

了解と言いながら作り始めた、この店が開店してからすっかり気に入入り私達は毎日昼食はここでしている。

「あゝあ、春休み今日で終わりか、この店も夕方からしか開けないのやっぱ？」

「うん、もともと学生達の為に開いたから、休日以外は17時かな」

そう苦笑しながら、お兄ちゃんは答えた。
私がライさんをお兄ちゃんと呼ぶようになったのは。

期末テストの為の小テストの時ネギは、

「アスナさんは英語ダメなんですねえ」

それに対してライさんは。

「ネギ、学校は本来分からない事を覚えるための学び舎だ、分からない事を貶すのが教師の仕事か？違うだろう。教師は生徒が分からない事を教えるのが仕事だ」

それに対してネギは。

「はい。ライさんの言う通り、僕が浅はかでした。アスナさん済みません。少しでも解りやすく授業をしたいので、皆さんも解りにくい所があれば言って下さい」

自分が非を認め謝ってきた。

「アスナ、分からないことは僕達に聞けばいい、教師は教えるために入るんだから、分からないことは恥じゃないよ」

そう言ってくれたおかげで気分が楽になった、その後の居残りでライさんに教えてもらったが、ネギより分かりやすかった、そのおかげ期末は乗り越えられたようなものだ。

ライさん曰く、成績の悪い人にとって普通の授業は、スタート地点が分からないのに通過点とゴールを教えるようなものと言っていた。何が分からないかじゃなく、どこからが分からないのかから始めたおかげで、解けなかった問題が解けるようになった。

ネギもそれを習ってか、教えるのが以前より美味くなり、図書館の

時も助かった。

喫茶店が開店して、常連になりそれから色々話すようになった、その時、私と同じで血の繋がった家族がいないと知ってから妙に親近感がわき、頼るようになり、お兄ちゃんっぽいなあ〜と思てたら、このかがそれでよべばええんちゃう？とか言ってるうちにいつの間にか呼ぶようになった。

そんな事思い出していると。

「はい、お待たせ」

「あ、ほら、アスナ。料理できたえ？ 食べよ？」

「へ？ あ、うん」

出てきた料理を口にする。

「ん〜、やっぱり、おいしい」

「うん、そやね〜」

あらかた食事が終ったあと、サービスと言ってデザートを持ってきてくれた。

この時間帯なら人が居ないからサービスもしてくれる。

こんなに人がいいのに彼女の一人も居ないのが最初の頃は驚いたが、朝倉から聞いたたら、朝倉曰く。

三週間足らずで300近くの女子生徒が恋の花を開きその全てが散った。

あの人は女子生に好意寄せられても知らずに散らせた花の数といっ

たらとか言いながら別名：

「一級フラグ建築士」

それを聞いてまっさか〜と思って観察をしたが女の子がお兄ちゃんに向ける視線は殆んど皆同じ、その内このかも狙ってることに気づいた、気づけよ私と思った。

しかしお兄ちゃん本人は自分がホテルことにまっつつつたく自覚がない。

さすがココまでくると言葉が見つからない。

会計をして店を出た後このかと最後の休みを満喫し寮に帰った。

7話

ライ Side

エヴァ達が新学期始まって数日。

店も繁盛、魔法防御も覚えられ、刹那は順調に強くなっていった。

けど店のお客さんから桜道理の吸血鬼の噂をきいた、加え何でも3

- Aの生徒が貧血で倒れた。

その日の夜、エヴァ達の帰りが遅かった上、多少の戦闘があった心配がした。

だから僕は気になって、直接エヴァに聞いた。

「最近、噂になってる桜道理の吸血鬼はエヴァだろ？」

「そうだとしたら？どうするのだ？」

「いや、聞いたただだよ、それに学園長が許可を出したんだろ」

僕がそういって、エヴァは驚いた顔をした。

「なぜ、そう思う？」

「なに、吸血鬼の噂と同時に3 - Aの生徒が貧血で倒れた。くわえ先ほど戦闘の気配があった。エヴァが勝手にやったのなら他の魔法先生が介入するはずだし。なのにしらない、それは学園長が許可した

からだろう。最後に3・Aの生徒に手をだしたら一人活発に動く人間がいるそれは、ネギ、先ほどの戦闘は大方ネギと戦ったんだろ？」

そう説明するとエヴァは笑いを堪えていた。

「くくくく」

「あれ？間違ってた？」

「いや、すまん。全部お前の予想道理だ。よくあれだけの情報でそこまで分かったな。それじゃ、なんで爺が許可を出したか分かるか？」

「ああ、幾つか候補が歩けど一番の可能性は英雄の息子ネギ・スプリングフィールド鍛えるためだろ。勝とうが負けようが経験豊富なエヴァと戦わせるのはいい経験になるから」

「ハハハ、クク、全部当たりだ、本当にお前は頭が切れるな、以前記憶を見せてもらったときも思ったが、改めて再確認したぞ」

「ホント、スゲエナ。料理ハデキテ、運動モデキル、ソノウエ頭ガ
イイ」

「私も、関心しました、素晴らしいです」

「褒めても、何も出ないぞ。それよりいいのか？」

「なにが？」

「学園長はエヴァをネギの踏み台にさせるために許可したんだろ
う？よく引き受けたな？」

「ああ、私は負けるつもりは無いぞ。勝ったら坊やの血をもらうか
らな」

「ネギの？僕のだけじゃたりなかったのか？」

「ちがうぞ、ナギに駆けられた呪いを解くためだ」

エヴァは説明した。呪いを解くためにはナギの血縁者の血が必要ら
しい。

「それって、絶対解除できるのか？」

「可能性は低いが、私は一日でも早くこの呪いを何とかしたい」

だからネギの血が欲しいと目が語っていた。

「ふうう、その呪い、僕は解く目処が付いたんだけど。それでもネ
ギの血が欲しいのか？」

エヴァ s i d e

今、ライの奴なんて言った？
ノロイヲトクメドガツイタ？
あまりにも予想外の言葉にもう一度聞きかいた。

「今、なんて？」

「うん？だからその呪い、僕は解く目処が付いたんだけど。それでもネギの血が欲しいのか？」

自分の耳を疑ったが、ライは呆れた顔しているが、冗談を言っている顔では無いとわかった。

「いいい、いつ。いつそんな目処がたった、それに解くって、あの馬鹿が掛けたの呪いなんだぞ？」

私が混乱している中、ライは淡々と答えた。

「たしかに馬鹿が掛けた呪いだねコレは。この呪いは掛けたナギさんの魔力が高いからじゃなく。

呪いの術式の構築式がめちゃくちゃだから解けないんだよ。だから構築式を解くんじゃなく、その構築式を建て直し、そこから解けばいいんだよ。」

「ああ、いや、確かに、それなら理論上とけるかもしれないが、しかし」

「だから、目処がたったといっただろ、あと二、三日でなんとかなるから。ココ最近図書館で調べてたんだよ僕は」

「本当？なのか？」

「うん、ちゃんとした呪いになれば少なくとも修学旅行にはいけるよ。その後はちゃんとした術式から解くのは時間が掛かるけど難しくないよ。」

幸いエヴァが言った。ただる僕の魔力はナギさんと変わらないって。」

ライ Side

説明を終えた後、エヴァが抱きついてきた。

「ほ、本当に信じていいんだな？」

「ああ、これでも勝ち目の無いことはしないんだよ、僕は」

よほど嬉しかったのか、涙ぐんでいた。その姿見た目相応の女の子だった。

「だから、ネギの血は必要ないよ。だから思いっきりやればいい」

「ライ、オマエ以外ト冷酷ダナ、敵二八」

「僕は単に、親友の言葉を気に入ってるだけだよ」

そついうと茶々丸が聞いてきた。

「どのようなお言葉ですか、ライさんが気に入ってる言葉とは？」

「「撃つていいのは、打たれる覚悟がある奴だけだ」。だからか自分が挑む相手が強くても弱くても結果は受け止めなければならぬ」

「ソウダナ、ソレハ道理ダ、ケケケ」

そんな話をした後僕達は眠りについた。

次の日

店の材料を買ったのはいいが、調味料が切らしたこと店に戻ったとき思い出し買いにいった。

その帰りに茶々丸に攻撃するネギが見えた。

その攻撃は人を殺すには十分な威力があった。

僕は直ぐに防御魔法を茶々丸の前に展開した。

「フォースフィールド」

アスナ s i d e

ネギの奴がエロオコジヨの言うことを間に受け絡繰さんの後を尾行していた。

私は流石に本気で襲撃をするなんて思わず、見ていただけだった。だってネギは迷った顔をしていたから、どこか安心しただろう。

けど私の気持ちとは裏腹にネギは魔法を放った。それは魔法の知らない私でも人は十分に殺せる威力だと分かったときは、後悔した。

絡繰さんが死んじゃう。そう思ったら思わない人が魔法を止めた。

「え！？お兄ちゃん」

「ラ、ライさん！？」

「やいやい、兄さん邪魔しないでくれよっ！」

お兄ちゃんは怖い顔をしてネギに質問をした。

「ネギ、君は今茶々丸を殺そうとしただろ」

「え！ぼ、僕は？」

ネギは混乱していた。自分が何をやるうとしたのかすら分からないほどに。

それでもお兄ちゃんは質問した。

「今の魔法の威力が当たったらどうなるか位は、放った君が一番分かっているだろう？」

その言葉でネギは自分が何をしようとしたのが分かったのか、顔が見る見る内に青くなっていく。

そしてネギは怖くなったのかその場から逃げ出した。

私はどうすればいいか分からず啞然としていた。

お兄ちゃんが絡繰さんと話、念為にメンテナンスをした方がいい言
つて絡繰さんを帰らせた。

その後、私の顔を見て苦笑しながら。

「アスナ、ちょっと店で話そうか？」

その言葉に従い私はこの場をはなれた。

7・5話

お兄ちゃんが絡繰さんを助けた後、私はお兄ちゃんと一緒に喫茶店に向かった。

それから喫茶店ランペルージに入った。

私はカウンター前に座った。

「紅茶でいいよね?」「うん」「はいこれ」

私が浮かぬ顔で紅茶を飲んでいたらお兄ちゃんが話をしてきた。

「なんで、「私はネギを止めなかったんだろう?」「って顔してるよ?」

ズバリの中され、私はその時の気持ちを話した。

「うん、あの時ネギは迷っていたからあんな強い魔法を放つなんて思わないようにしてたんだと思う」

「アスナはあれを見て魔法の事どう思う?」

「怖いと思った、もしお兄ちゃんが止めなかったら絡繰さんが死んでだし、ネギも躊躇してたのあんな魔法を簡単に使ったから」

「その気持ちはとても大事だよ」

「え!?!」

私はお兄ちゃんがなにを言ったのか理解できなかった。

「もし、銃や手榴弾を常に持つてる人間が居たら、どう思う?」

「怖いに決まってるじゃない!」

「どうして?」

「だってそんな危ないもの持っているんだから」

「そう、魔法も同じだよ、ただ武器みたいに常に形をしていないだけで。ネギのさっきの魔法は手榴弾と同じぐらいの威力だし」

「ああ!」

「この世界の殆んど魔法使いの悪いところは何かを解決する時は真っ先に魔法に頼ることなんだよ、ネギもそうだっただろ」

私は今までのことを思い出した。

「うん、ネギは何か解決する時は真っ先に魔法を使ってた」

「魔法は便利だよ。便利だからそれに頼る。魔法使いは他の手段など知らないと言っべきかな。他の手段など教えないからね」

「お兄ちゃんも魔法使えるんだよね?」

「うん、先月覚えたばっかだよ」

「え！？じゃあ今まで？」

「うん、魔法があるなんて知らなかったからね。話は戻して、魔法には銃見たくないな形が無いから危険だと認識できない。だから平気で人の命を奪える代物である事をまだ理解していないんだ」

「アスナ、ネギに教えてやってくれ。魔法を使えないアスナが一番いいんだよ。魔法は兵器と殆んど変わらない、あの魔法を見て怖いと思うなら、その気持ちをネギに伝えるんだ。少なくとも今日みたくないことは起こさないだろ」

「うん、わかった」

そう返事した私にお兄ちゃんは微笑みながら頭をやさしく撫でた。普通なら子供扱いだと反感するけど、なぜだか胸が熱くなり、私は急いで店を出た。

「そっそれじゃ、もう行くから」

ライ Side

アスナはなぜだかあわてて店を出た。

「顔が赤くなつてたけど、風でも引いたのか？」

僕は買った調味料を整理し家に帰った。茶々丸は無事にメンテナンス

スを終え何も問題は無かった。
翌日、エヴァはネギから果たし状を貰いそれを受けることになった。
勝負はその次の夜の停電の時間。ちなみに、その停電の日に0時に
投稿地獄の呪いを組みなおすことにした。

決戦の日の停電時間

僕は準備があるから家で留守番をした。

「さてと、最後の仕上げが終わったし。後はエヴァ達が戻るまで待
つか」

するとドアが開いた。そこにはエヴァ達だけでなくネギとアスナも
居た。

「オオウ、戻ッタぜ、ライ」

「ええ！？ライさん！？」

「お兄ちゃん！？」

あれ？そういえば言ってなかったな。とりあえず僕がここに住んで
ることを説明をした。

「それで？勝負は？」

エヴァが涙目になってたから、予想はできたけど。そんなに悔しか
つたのかな？

「ケケケ、ゴ主人ノ負エダ、ギリギリダケドナ」

その言葉である程度予想ができた。

「時間切れ?」

「ソウダゼ」

「なんでエヴァは涙目になってるんだ? そんなに悔しいの?」

「アア、違ウゼ、アレハ小僧ニ脱ガサレタカラダ」

「は?」

するとネギが答えた。

「あの、僕がくしゃみをして、エヴァンジェリンさんの服が吹っ飛んだんです」

「そうなの?」

僕がアスナ達の方え向くとアスナは苦笑していた。すると茶々丸から説明がなされた。

「最初、マスターが押していました。久々に魔力が戻っていて興奮していて、そのせいで調子にのって遊んでしまいました。ネギ先生は何とか持ちこたえ、そして切り札のくしゃみをし、マスターがーを下着姿にし、マスターの乙女心を利用し、その後、罨にかけ最後に時間切れで勝利しました。」

あの茶々丸さん?説明のしかたが?その?僕が困惑してる中。

「ライさん、マスターには好きな人が居るんです。しかも身近に。それでその人意外に素肌をさねした事を泣いてるんです」

茶々丸が困惑してる僕に分かりやすい説明をしてきた。

「茶々丸！貴様そんなにネジを巻かれないのか！？」

「へえ、エヴァの好きな人か。僕はエヴァを応援してるから」

それを聞いたエヴァは更に涙目になり。

アスナは呆れた顔をし。

ネギは何が何だか分からない顔した。

そして茶々丸は少しにやけて。

「マスター、どうやら私にもチャンスはあるみたいです」

なんだかわけの分からないことを言った。

「ゴ主人、本当ノ敵八身近ニイタミタイダナ、ククク」

チャチャゼロもわけの分からない事をいった。それよりエヴァの呪いの構築式を直すのが先決だな。

「エヴァ、それより呪いの構築式を直すからこれを持っていて」

僕は魔力のこもった宝石をエヴァに渡した。

「ああ、そうだったな、何だこの宝石！とんでもないくらい魔力が

込められてるが？」

「うん、僕の魔力を込め続けたからね」

するとネギ達になにをやるのかを聞いてきた。

「あの、ライさんコレから何をするんですか？」

「エヴァに掛かった呪い正常にするんだよ」

「正常？」

「ああ、ナギさんの魔法の構築式がデタラメなんで、僕が組みなおすんだ」

「そんなこと、できるんですか？」

「坊や、質問は後にしろ、私は早く始めたいんだ」

エヴァはなんだかネギにイラついてるみたいだ。その言葉でネギがしずかになった。

「エヴァ、始めるよ？」

「ああ、始めてくれ」

僕はエヴァの背中に触れ頭の中で構築式を理解し、それから分解、ここまでは楽だ。再構築するための演算を頭の中で始めた。

ライさんエヴァンジェリンさんの背中に触れてから、二人の居る地面から魔方阵が浮かび上がった。

この時、ライさんからとんでもない魔力を感じた。そして、その魔方阵が最初に赤い色してたけど、すぐに紫になった。最後に綺麗な水色になった。そして最後に水色の魔方阵が砕け、綺そのままエヴァンジェリンさんの体に入っていった。

「終わったよ」

そう言っただけでライさんは疲れた顔をしてエヴァンジェリンさんに離れた。

「確かに、さっきまでと違うな、ありがとう、ライ」

エヴァンジェリンさんはお礼を言った。

「へへえ、エヴァちゃんでもお礼はするんだ」

アスナさんがエヴァンジェリンさんをからかい始めた。

「当たり前だ、私だって礼位は言うぞ」

「私だって？お兄ちゃんにだけじゃなく？」

こうして二人は言い争いを始めた。

僕がお父さんの事を聞いたのはその次の日に持ち越された。

7・5話（後書き）

鋼の錬金術の理解、分解、再構築を付かせてもらいました。

修学旅行編に力を入れたかったのでエヴァとネギの戦闘シーンを飛ばしました。

修学旅行編はエヴァも加わります。

8話

ライ Side

エヴァとの事件があった次の日。

僕達は『ランペルージ』に集まっていた。

メンバーは僕、エヴァ、茶々丸、ネギ、アスナ+淫獣の5人+1匹。

それと言つのも事の顛末を説明する為である。

それぞれの前に紅茶を置いて、僕もカウンターの中で棚に背中を預けながら会話に加わる。

「でっ？ 何が聞きたい？」

エヴァがかなり不機嫌にそう切り出した。

恐らく昨日の下着姿が未だに尾を引いてるのだろう。

「とりあえず、なんでお兄ちゃんがエヴァちゃんのとこに居るの？ それになんか仲がいいみたいだし？」

エヴァにはある程度話すとアイコンタクトをした。エヴァは澁々な目でわかったと返してきた。

「はっきり言うけど、全部本当の事だから。よく聞いてくれ」

二人は頷いた。

「まず僕はこの世界の人間じゃない。魔法世界の人間じゃない」

「え！？それってどう言う事ですか？」

ネギが聞きかいた。

「そのままの意味さ、並行世界と言ったらいいかな。

たとえば、右と左という選択肢があつたとする。右という選択をした世界と、左という選択をした世界。それぞれ良く似通っているけれど、違う可能性を有することになるだろ。そんな、少しずれた可能性を持っている別の世界から僕はきたんだ」

アスナも何とか分かったみたいだ。

「ただ、かなり歴史が違うんだ」

「どう違うんですか？」

「まず、僕が来た世界では第二次世界大戦とか起きなかった、それは常に戦争が起きていたからだ。くわえ魔法は存在しなかった」

それを聞いたアスナ達はなんて顔をしたらいいかわからない表情をしていた。僕は構わず説明した。

「僕の世界では、三大国家が世界を支配していたんだ。僕は死んだはずだった、けど気が付いたら世界樹の前にいた。その後エヴァ達に逢い学園長と話をして、エヴァの家で世話になることになったんだ」

「あの、死んだって？どういふ事なのお兄ちゃん？」

「いりいろあってね、その事はノーコメントで頼む」

「あ、うん、ごめんなさい。無神経なこと聞いて」

「それより、坊やはナギのことが聞きたいんだろ？」

エヴァが会話を変えてきた。

「あ、はい…僕の父さんはどんな人でした？」

「奴とであったのは何年前だったか。とりあえず第一印象は馬鹿っぽい奴だ」

「バカっぽい…ですか？」

エヴァの意外な言葉にネギ君は目を丸くする。

それはそうだろう、英雄とまで言われていた自分の父を評価して、バカっぽいと言われればそんな顔をするだろう。

「サウザンドマスターの二つ名はあるが実際5、6個の魔法しか使えないバカだぞ？ 魔力だけは馬鹿げたくらいあったがな」

エヴァはククク、と薄く笑う。

まるでその当時の事がつい先程起こった出来事のように。

「ま……私はそんなバカにやられてこうしてここに封印されているわけなのだな……」

「と、父さんがそんななんだったなんて……なんかイメージが……」

「なんだ、信じられんか？　だが事実だぞ。小利口なお前とはまるで正反対。その上、細かいことなど気にもしない大雑把でもあった」

「そ、そうですか……」

「奴が死んだせいで、十数年にも及ぶ退屈な学園生活だ、ライの御蔭で何とかなるからよかったが」

「え？　死んだって……あれ？　ちょっと、ネギ……」
「ハイ……」

ネギ君は真剣な表情をするとエヴァに向けて言った。

「でもエヴァンジェリンさん。僕、父さんと、サウザンドマスターと会った事があるんです！」

「は？　何を言っているヤツは確かに10年前に死んだ。お前はヤツの死に様を知りたかったのではないのか？」

「違っんです！　大人はみんな僕が生まれる前に父さんは死んだっ
て言っんですけど……。6年前のあの雪の夜……僕は確かにあの
人に会ったんです」

エヴァの表情がみるみる驚愕のそれに変わる。

ネギ君はそれに頷くと傍らに置いてあった杖を手に取り、エヴァに見せるように胸の前でギュツ、と力強く握り締めた。

「その時にこの杖を貰って……。だからきつと父さんは生きていま
す。僕は父さんを探し出すために、父さんと同じ立派な魔法使い（
マギステル・マギ）になりたいんですよ」

そう語るネギ君の顔にウソを言っているような感じなど微塵も無い。

ただ真実をありのまま話している。

エヴァもそれが真実だと分かったのだろう。

まるで、真綿に水がゆつくりと染み込んでいくように言葉を噛み締めていく。

「そうか、生きてるか」

エヴァはそう呟いていた。

「なんあだ、嬉しくないのかエヴァ？ さっき茶々丸が言ってた好きな人はナギさんじゃないの？」

すると、エヴァはなぜだか怒って。

「お・・・オマエは、どこまで・・・もういい」

怒ったかと思っただがなぜだか沈んだ。

「カカカ、ゴ主人。獲物ハカナリ鈍感ダゾ」

「お兄ちゃん・・・もうちょっとのその自分に、なんていうか」

アスナは呆れた視線を向けてきた。

ネギはその空気に耐えられずエヴァにきいた。

「あ、あの、手がかりはこの杖の他には何一つとして無いんですけ

ど、エヴァンジェリンさんは何か知りませんか？」

エヴァは魂の抜けた声で。

「京都」

と、短く言った。

「京都に行ってみるが良い。どこかに奴が一時期住んでいた家がある筈だ。奴の死が嘘だと言うのならそこに何か手がかりがあるかも知れん、幸い今回の修学旅行は京都だ。……そうだな爺を脅し、そこでライと……」

最後の部分は聞き取れなかったが。ネギ達はそれ聞いた後帰って言った。

修学旅行当日

何故か、僕も3-Aと一緒に修学旅行に行くことになった。

表向きは、10歳のネギが旅行で興奮し暴走する3-Aを統率するには難しいと判断し、僕を以前と同じように担任補佐として付けていくことになった。

本来は学園長の孫であるこのかの護衛である。エヴァも修学旅行に行けると知った学園長の顔が人類ができる表情ではなかったのが印象的であった。

駅前での3-Aはやはりテンションは上がり上がりになっていた。僕はエヴァ達と一緒に席に座った。周りのテンションが高く、僕は少し休憩スペースに入った。

僕が休憩スペースに避難していると刹那がやってきた。

「ライさん今回はよろしくおねがいします」

「こつちこそよろしく頼む。でもごめんね。ほんと刹那だけで護衛したかったんじゃないの？」

「いついえ、ライさんは強いしその頼りになるからそのむしろ……」

刹那が顔を赤くしていた。気分でも優れないのかな？と、思っ
て聞いてみた。

「顔赤いけど大丈夫か？熱でもあるんじゃないの？」

「いえ、大丈夫です。それよりも……あれは？」

刹那はネギたちのいる車両から飛んできたツバメっぽいものを両断する。そしてそれが銜えていたものをライがキャッチする。

「つとこれは親書？刹那、さっきのは？」

「あれは式ですね。術者が使役する使い魔みたいなものです。呪術師や陰陽師たちが使ったりします。」

「ならさっきのは関西呪術協会の妨害か？」

そこでネギたちが駆け込んできた。そして焦った顔でライに向って何か言おうとしてして、ライの手にある親書を見てほっとした顔になった。

「ネギ、気をつけていなとだめじゃないか」

「すみません、突然のことだったんで……。でもライさんこんなところにいたんですか、さっきカエルがたくさんできてきて大変だったんですよ！」

「カエル？」

それって妨害じゃなくて嫌がらせなんじゃ？ライの頭にそんな考えがよぎる。だがライは

「ああ、ごめん、ごめん」

とだけ答えた。

「あれ桜咲さん？」

明日菜がライの隣にいる、といってもライの陰に隠れていて見えていなかったのだが、刹那に気づいた。

「あ、どうも」

刹那は軽く頭を下げる。

明日菜は僕と刹那の顔を見て

「へ〜、桜咲さんもお兄ちゃんの事が〜」

「か、神楽坂さん!？」

「相変わらず、お兄ちゃんはどこでもフラグ立てるよね、その内とんでもない修羅場になるんじゃない？」

「フラグ？修羅場？何言ってるんだ、アスナ？」

「うつわ〜、まだ気づいてない!」

その後エヴァ達の席に戻ったら、エヴァの機嫌が悪くなっていた。

9話

ライ Side

京都についたのだが、そこから大変だった。清水寺では楓が飛び降りようとしたが事前に止めた。

その後はなぜだかよく知らない女の人にお茶をしないか誘われた、それが一、二度ならともかく頻繁にあったから大変だった。断つてるのにエヴァは段々と不機嫌になり、ついに切れて。

「ライ、貴様の服装を変えるぞ」

と行って店に入った。

丸いサングラス、下と上はアロハ、頭にはタオルを帽子代わりに巻いた。そのおかげか、誘われなくなった。アスナは僕の格好を聞いたが理由を話すとなるほどと納得した。それどころか3-A全員が納得した。関西側からの妨害は音羽の滝の飲み水が酒に代わっていた以外はなかった。

しかし、その夜に旅館でこのかがさらわれた。

「エヴァ！」

僕がエヴァに声を掛けると。

「分かっている、爺の奴。道理でライが連れて行くのを簡単に了承したわけだ。やはり厄介ごとか、せつかくの旅行が」

エヴァは文句をいいながら敵を茶々丸と追いかけた。どうやら敵の一人は足止めをもう一人は先にいったようだ。ネギとアスナは先に行った敵を追いかけ、刹那は足止めを食らっていた。

「エヴァはネギ達を、僕は刹那のほうに」

「わかった」

そういつて、僕達も動いた。

刹那 S i d e

お嬢様が攫われ私はそれを追いかけた。人気の無さから察するに、人払いをしているだろう。

私が奥歯をかみ締めながら追いかけてくと一人の槍を手にした男に阻まれた。

それから

「お嬢ちゃんもなかなかやるね、その年で俺の攻撃を見切るとは」

男の槍を何度か受け止めながら私は悪態をついていた。

（強い、もしライさんとの特訓が無ければ既に数回死んでいた）

今私が生きているのは、男が本気でないのとライさんに体力が極限状態から特訓で今まで見えていなかった動きがある程度読めるようになったこと、そして槍での手合わせもしたことが幸いした。

「こっちは、本気でないとは言え、こつも塞がれちゃあ、本気を出すしかねえか」

男がそういうと

「じゃあ、僕が相手をするよ」

後ろから聞きなれた声が出た。

「あ！ライさん!?!」

「遅くなってごめん、後この方はネギとエヴァ達が行った」

「一番心配していたお嬢様にはあのエヴァンジェリンさんが向かったことで、私は安堵した。」

「ほう、今度の相手はそのい色男か」

そう言っつて男からとんでもない殺気が放たれた。

「そついいこと、相手をしてもらえるかな？」

私が男の殺気に緊張してる中ライさんは何事も無く言った。

「くく、アンタ強いなあ、こいつは楽しめそつだ」

ライさんと男が激突した

高速を超える突き出される槍の一撃、ライさんは刀で受け流す。

「ッ

」

ライさんがとまる。

槍の間合いまで、わずかな接近すらさせない。

長柄の武器を持つものは、距離を常に離し、踏み込んでくる敵を貫くだけでいい、それなのに。

男はみずから距離を摘めた。

喉を、肩を、心臓を、隙間無く貫こうとする男の槍はとんでもなく速く、残像さえ見えていた。

「ぶん」

しかしライさんはそれすら受け流していた。しかし男の槍は更に鋭さも威力もあがっていた。

カキン、キン、キン、カキン

そして、ライさんも反撃に出る。その攻撃は私と刀子先生とやったときより鋭く、速い斬撃。

しかし男もライさんの攻撃を防いでいた。

嵐のような連撃を繰り返していた。すでに二十合。いや、実際はその倍か。繰り広げられる激戦。
私はただ、絶句していた、いや見惚れていた。

「ホント、強いなあ、兄さん名は？」

「ライ、アンタは？」

「レイ、同じ二文字繋がりが、それにしてもうれしいね、この世界きてやっとまともな敵に出会えた」

「この世界？並行世界か？」

「へえ、てことはアンタもか、どうりで強いわけだ、この連中は気やら魔法やらで身体を極限まで鍛えないからな」

レイと名乗る男が言った。たしかに私達は気を練ったり、魔力で身体を強化している。しかし彼ら身体を極限まで鍛えている。

「なあ、このまま、見逃してくれなか？さっきの攫ったお譲ちゃん
は助かったみたいだしよ」

「断る、貴様はここで死ね」

ライさんは今まで見せたことが無い殺気を放ち答えた。

「そりゃあ、残念だ、あんたとは別のところで決着付けたいんだが」

そう言って二人はまた戦い始めた。

先ほどのような拮抗した戦いではなかった。ライさんは先ほどよりも速い、鋭く、そして重い斬激を繰り出した。

虎牙破斬、爪竜連牙斬、天狼滅牙

どれも始めて見る技を繰り出していた。正直私はライさんには一生追いつけないと思えるほど彼の斬激はすさまじかった。

「テムエ……！さっきまでは違うな」

ライさんの実力が予想外にあがったのか、レイは先ほどまでの切れがなくなると防戦一方になった。

絶え間ない、豪雨じみた剣の舞。

正直、レイには僅かに同情してしまった。

「調子にのるな、！」

勝機と見たのかレイは反撃に出た。しかしライさんは読んでいたのかレイの攻撃する瞬間を狙い今までの非ではない一撃を繰り出した。その攻撃でレイは始め傷を負った。しかしライさんは更に追撃に出た。

烈破掌、義翔閃、戦迅狼破

レイはすでにボロボロだった。

「まったく、とんでもない奴が敵に居るんだな、これじゃあ、奴ら

「に同情するぜ」

「貴様が、情報を渡し、そいつ等と離れる契約をすれば、見逃そう」
「へっ、ごめんだね、連中の事はどうでもいいが、アンタみたいな
のに見逃されちゃあ、俺は生きる気はねえ、ここでアンタに殺され
たほうが幸せだ、それにアンタはまだ切り札があるんだろう。生き
残ってもアンタに勝てる気が全くしないんだ。最後にアンタの様な
強い奴に殺されるなら本望だよ、逆の立場なら俺は容赦しねえぞ」

「そうか、済まなかったな、今のは僕が無粋だった、お互い命を賭
けたんだからな」

「あんたは、こっちの平和に馴染みすぎたな」

「そうみたいだな」

レイは最後まで笑いながら逝った。

人が目の前で死んだのに私は驚くことに冷静だった。二人はお互い
命を賭けて、死闘をした、そこで相手を気遣うのはやはり負けたも
のへには侮辱だっただろう。二人の死闘は神聖な戦いだったと実感
していた。

ライさんは校長先生に頼んでレイという男の死体を埋葬するようた
のんだ。学園長はさすがに死人がでるといは思っていないかつたらし
い。しかし相手の心情を聞いて納得したみたいだ。

その後旅館に戻りネギ先生達に私の護衛のことを話した。

ライさんは私達の飲み物をかいに言った。

ライさんが部屋を出て行ってからアスナさんが聞いてきた。

「あのさ、お兄ちゃんて、強いのか？私とネギは戦ったところは見たことが無かったら？」

「強いぞ、なんせ魔力や気も使わず私を倒したからな」

エヴァンジェリンさんが答えた。

「嘘!？」

「本当なんですか!？」

ネギ先生達は驚いて聞き返した。

「本当です、私もその時は居ましたし、私も圧倒されました。それに先程の戦闘で学園は愚か日本にはあの人に勝てる人間が居ないと思うほどのものでした」

私は先の死闘を思い出していた、嵐のような連撃、私は一生あそこには行けない。それほどまでにライさんは強かった。私の特訓の時はどれほど手を抜いたか実感した。しかし怒りや嫉妬などの感情は出てこなかった。むしろあの人に師事を受けている自分に誇りにもついていた。

「それほどに、先の戦いは凄まじかったのか？」

エヴァンジェリンさんが聞いてきた。

「はい、今までどれだけ手を抜いていたか分かりました」

「ツチ、私も見てみたっかたかな」

それからライさんが戻ってきて、明日の方針を決め私達は各部屋に戻り眠りについた。

9話（後書き）

やっとまともな戦闘を書けることができました。
おまけにオリキヤラをださして貰いました。
レイはFATEのランサーをイメージです。

ライ Side

戦闘のあった翌日、敵は全く襲ってくる気配がなかった。それどころか監視している素振りすない状態が今日は続いた。エヴァ曰く、レイ程の男がやられたから策を練り直しているんだとのこと。エヴァは刹那の記憶を覗いて僕とレイの戦いを見たいらしい。連中は僕とエヴァまでいる事が計算外らしいと刹那が説いていた。

とりあえず境界をはり、今日は明日に備えてある程度のんびりできると思いきや、内から問題が三つ生じた。

そのうちの一つはネギがのどかに告白されて悩んでいたが、エヴァが「ほつとけ、自分で解決させる、それより敵の事だ」といったら誰も反論できなかった。

しかしその後、ネギが泣きながらわけの分からない事を言って僕の部屋に入ってきた。

「みなざん〜、どうしよう、僕まだ先生やりたいに
!!!」

アスナが呆れて顔で質問した。

「とりあえず、なにがあったのよ、それじゃわかんないから、しっかり説明して?」

明らかにさっきの問題とは違う様子だったのでエヴァも文句は言えなかった。

「そうだな、僕たちも力になるから」

「はい、実は」

「「実は？」」

「朝倉さんに魔法がばれました!!」

「えええ!!!」

アスナと刹那が同時に叫んだ。エヴァは笑いながら追い討ちをかけた。

「そうか、あのパラッチにばれたか、坊やならオコジヨになつても生きていけるだろ。ククク」

「ええ、やっぱりそうなるんですか!!!??」

「これは、諦めるしかないですよ。ネギ先生。朝倉さんにはれたら世界に知れ渡るの問題です」

「まったく、なんでよりに朝倉なの？他の子なら説得できたというのに」

「ネギ先生、今までお世話になりました」

女性はネギに追い討ちをかけて言った。僕は心情的に彼女達と一緒だか流石にかわいそうなので彼を弁護した。

「まあまあ、とりあえず、和美を説得しよう、事が重大だから」

僕がそういつとネギが飛び付いてきた。

「ライさん」

するとエヴァが急に不機嫌になった。

「ライ、小僧を甘やかせるな、そいつの為にならんぞ!!」

「おーい、ネギ先生ー」

「ここにいたか兄貴〜」

不意に声がかかる。

そちらの方を見てみるとが和美の肩にカモを乗せてこちらに手を振っていた。

「うわっ、朝倉さん!?!」

ネギはかなりびくついていた。

「ちよつと朝倉。アンタ子供苛めてんじゃないわよー」

「苛め? なーに言ってるのよ。って言うかあんたの方がガキ嫌いじゃなかったっけ?」

「そうそう、このブンヤの姉さんは俺らの味方なんだぜ?」

カモが言う。それに違和感を感じたから僕はきいた。

「味方?」

「ああ、それなんですけどね。コホン、私、朝倉和美はこの度、カモっちの熱意にほだされてネギ先生の秘密を守るエージェントとし

て協力していくことになったんでよろしく」

「え……え……!? ほ、本当ですかーっ!?!」

「……………」

その言葉にネギ君は喜んで朝倉さんに駆け寄るが、とても怪しい違和感がきえない。だから僕はオコジヨを捕まえて質問をした。

「カモくん、正直に言ってくれなか」

「さあ？俺ツちには何のことだか？」

カモはあくまで白を切ろうとする。

「さっきの説明には納得がいかないものが多い、さあ、白状しよう」

「な、な、なんと言われても俺ツちには……………」

仕方がないな。

「茶々丸、オコジヨのミートパイは確かレシピにあったよね？」

「……え!?!」

エヴァと茶々丸以外が驚いた。

「はい、たしかにあります、中世ではメジャーな食材ですから、レシピはあります(うそ)」

「すみませんでしたー!?!?!旦那!俺ツちが旦那に隠し事をするはずがないじゃないですか!?!だから食べるのだけは勘弁してく

だせー！、てか旦那の目、狩人の目つすよ？旦那は絶対小動物を焼いて食ったことがありますよね！！？俺っちの勘が言ってるすよ？」

「ああ、あるよ、ウサギとか鹿と後は何が聞きたい？味か？それとも切った時の感触か？」

「なにも、聞きたくねえつすー！！言いますから！！後生や後生の頼みやー！！」

「ブンヤの姉さんには俺らの取材を独占させる変わりに色々協力してもらってるんでさあ」

「ほかには？」

「・・・」

「塩、コシヨウと」「ほ、ホンッとすっよ」

「はあ、もういい、和美」

「あ、はい」

「とりあえず、他の人には言わないようにしてくれ」

「それは約束します」

エヴァは我間なしとばかりに決め込んでいた。アスナ達も何とか納得して彼女対達を自分の部屋に帰らせた。

それから、僕がテレビを見ていると急3・が騒ぎ出した。修学旅行だから仕方ないと思ってるけど今度は静かになった。

「なんだ？この差？先生に注意されたのかな？」

とりあえず部屋をでて、自分の目で確かめに行ったら、刹那とアスナにあった。

「刹那、アスナ、お疲れ」

「ライさんもお疲れです」

「お疲れ〜おにいちゃん」

「どうかしたのか？3 - のテンションの落差が激しいけど？」

「ああ、あのエロガモがなんかたくらんでるけど？どうする止めに行く？」

「いや、辞めて置くよ、流石に・・・うっ！？」

「どうしましたか？ライさん？」

「いや、なんかとてつもない、嫌な悪寒が？でもこれ以前何処かで？」

確か、ルルーシュと一緒に、など思い出そうとすると。

「・・・ライさん発見！！！！」

3 - の生徒達が僕の方に向かって走り出してきた。

思い出した！キューピッドの日だ、会長のあの言葉で生徒達に狙わ

れたカンジだ。

『3年D組ルルーシユ・ランペルジ、同じくライの帽子を持ってきた部は部費を10倍にします!』

あの台詞を思い出し、僕はすぐさま逃げ出した。

「あっ!ライさん!?!」

「お兄ちゃん!?!」

朝倉 Side

「ちょっと、姐さんどう言うことですか?」

私達はある部屋でモニターを見ていた。

「ああ〜、やっぱりこうなったか」

「何がすつか、つーか旦那のやつドンだけモテルんすか?」

そう、私達の計画だと皆、ネギ先生の仮契約をさせようとしたが、殆んどの子がライさんの方に行ってる。

まあ、ある程度予想はできたけど、ネギ先生を狙ってるのは本屋ちゃんと委員長だけだし。

「ライさんは一月で500人近くの女性にフラグ建てたのよ」

「一月で500?!?!?!」

「二つ名が一級フラグ建築やフラグ王とか人間ホイホイとやばれるし」

「なんつー羨ましい」

ライ Side

とりあえず、僕は携帯でアスナ達に元凶である和美とカモの事をたのんだ。

僕はかつての悪夢が蘇ったのか体力がぐんぐんへり限界まで来ていた。アーニヤーがモルドレットで追いかけてきて、ジノも悪乗りしトリストアンで追いかけてきたあの悪夢を思い出した。

「ライとルルーシュを探せエー」

「ライ、見つけた、後はルルーシュ」

「ははは、面白いな、庶民の学校というのは」

「くそ、まさかここまで常識がない連中だとは」

そんな悪夢を思い出しながら何とかエヴァに助けて貰おうとエヴァのの部屋に入った。

「はあっ、はあっ、エ、エヴァちょっと匿ってくれ」

「どうした？外が騒がしいが？何があった？」

「なんか、皆が僕を追いかけてきて・・・いた」え!？」

後ろを振り向くと……の殆んどの生徒がいた。中にはこの空気について悪ふざけをしているこもいる。

「さあ、ライさん諦めて私達の誰かとキスをして、修学旅行をすすのよ」

ピク

エヴァが反応した。

「なるほど、そういうことが、ライ」

僕はエヴァの方に顔を向けると、キスされた。

「「「あ~~~~~!!!!???」」」

「これで、修学旅行中はライは私と一緒にまわるぞ」

ニヤケながら……の子達に言った。

その後新田先生に見つかってこの騒ぎに加担した子達は正座させられた。何故だかエヴァはかなりご機嫌だった。

11話

アスナ Side

「で、昨晚の騒ぎ？何であんな事になったの？しかも本屋ちゃんは一般人なのに」

私は元凶である朝倉とエロガモを睨んだ。

「あ〜いや、その〜なんて言うか。姉さんあんなつもりはなかったんですよ」

「そうそう、まさかネギ先生じゃなく、殆んどがライさんに行くとは思わなくて」

「ほ〜う、お兄ちゃんに。つまりクラスの皆をネギと仮契約させようとしたと？」

「そうっすよ〜、そうすれば戦力アップしますよ」

「そうそう」

「あんた達ねえ、クラスの殆んどは一般人よ、もしその所為で怪我とかしたらどうするの？しかも敵がまだいるのよ？」

「ちょっと刹那さんも何か言って」

刹那さんの方を見ると魂が抜けてる姿があった。エヴァちゃんがお兄ちゃんにキスしたのがショックがまだ抜けてないらしい。

「ちよつと、刹那さん、キスを先にされただけで、まだ挽回があるんだから」

そう言つてやると。

「えっ？あ、いえ、そ、その私はそんなのじゃなくて」

まだ言つてるよこの子は。

「そ言つ、アスナだつてライさんの事、どう思つてるの？」

朝倉に聞かれて考え、答えた。

「頼りになる、人かな。なんかお兄ちゃんが居たらあんな感じなのかなつて思つて」

ネギも同意した。

「僕もその気持ちがかかります、雰囲気がそんな感じで。僕も兄さんと読んでもいいでしょうか？」

「いや、私に聞かれても。お兄ちゃん本人に聞かないと」

「そうですね」

「つて、話が脱線してる」

「「チッ」

「あんだ達ねえ〜」

「相変わらず、騒がしいな？神楽坂アスナ」

するとエヴァちゃん達が入ってきた。

「はい、飲み物」

ライ Side

僕達は買ったジュースをアスナ達に手渡した。

「ありがとうございます」

「さてと、とりあえず。昨日の事を聞きたいんだが？」

僕が座った後、昨日の事でのどかが仮契約したことがきになった。

「はあ、ネギの戦力をあげたいからだって」

「なるほど、その後どうなるかぐらい分かるよね？」

「え！？」

カモ達が驚いている。

「まさか、戦力がアップするだけだと思っているの？」

「どういう意味ですか、ライさん？」

ネギが聞いてきた。どうやらエヴァと刹那や茶々丸以外はわかってない。

「はつきりいうよ、もし僕が敵なら仮契約をした従者を真っ先に殺しに行くよ」

「何言ってるの？お兄ちゃん？」

「アスナさん、私モライさんと同じ意見です」

「私もだな、従者が刹那みたいに強ければともかく。それが素人の中学生だ。そのガキを殺すだけで戦力が減るなら簡単だろ？」

二人が意見が一緒だと言ってきた。

「和美、カモ。この修学旅行中のどかが殺されたら？君達はどうする？まさか、敵が遊びで襲ってきていると思ってるのか？特にカモ、君は関西との関係を聞いてだろ？」

僕が真剣に言っていると彼女は言葉を失くした。

「とりあえず、この修学旅行中だけでも、僕達と離れていてくれ」

「うっす」

和美には退室させてもらった。

「ネギ」

「は、はい」

「カモは君の使い魔だろ？君が面倒見なくてどうする？今回のこと
でどかが殺されたら君もショックを受けるだろっ？」

「はい！すみませんでした」

ネギは優秀だ。だから今回見たいな事は起きないだろう。

「あの、ライさん、ありがとうございます」

「は？いきなりお礼を言われるような事は言った覚えがないんだけ
ど」

「いえ、ライさんがはつきり言ってくれる御蔭で僕も習うことが沢
山あります。試験の時もそうでした」

ああ、アスナに言ったこか。など僕は思い出していた。

「あ、あの、これから、兄さんって読んでいいですか？」

「へ！？あっああ、別にいいけど」

最初は何を言っているのかが分からなく。自分でもかなり間抜けな
顔をしたと思った。

「まあ、とりあえず。これからどうするかだな」

僕が聞くと。

「それなら、僕は親書を届けたいと思います」

「まあ、そうだね、エヴァってこのかのお父さんと知り合いだよね？」

「ああ、そうだが？」

「だったら、その人のに連絡をして。木乃香に実家に顔を出してもらえるように頼べばいいじゃないか？エヴァの知り合いだし。不自然じゃないうえ、親書と木乃香を同時に護衛もできるしね」

「確かにな、刹那。詠春の連絡先を教えろ。私が話をつける」

「しかし、途中で襲われたら、お嬢様に魔法の事がばれます」

「あほ！すでに、その坊やが担任としてきた時から覚悟をしているだろう。あの馬鹿は。身近に魔法が使える坊やと同じ部屋にいたんだ、今まではなかったのが不思議だ」

「うっ、しかし、長は「奴らは親書より木乃香を優先してるぞ」

その一言で刹那は渋々納得した。エヴァが詠春さんに連絡をした。

「皆は親書と木乃香を頼む」

「え！？兄さんは！？」

「連中はレイを倒した僕を警戒してる。一人で動けば必ず何か仕掛けてくる。それに敵の情報もほしいね」

「まあ、いざとなったら貴様を召喚すればいいし」

「召喚？」

「私と仮契約をしたらだろ、お前のカードだ。5〜10kmならお前を強制召喚することができる上、アーティファクトが使えるぞ。アデアッドと言葉にしてみる」

そういつてエヴァはカードを渡した。そこには。

名前表記 ライ・エス・ブリタニア

称号 皇帝陛下

色調 銀

徳性 導手

方位 南

星辰性 冥王星

アーティファクト 王の証

「アデアッド」

そこには、剣に蛇と獅子が巻きついた、ペンダントが現れた。

「変わったアーティファクトだな、どんな効果があるんだこれ？」

エヴァが聞いてきた。僕の頭にこの王の証の情報が入ってきた。

「どうやら、今まで手に使った武器や兵器を全て再現して引き出せるみたいだ、武器庫みたいなものだ」

そういつて母上が日本から持ってきた刀をイメージして何もないと

こちら取り出した。

「すごい、刀ですねこれ、何て刀ですか？」

「草薙の剣」

「へ？」

刹那の目が点になった。そして

「えええええー！？く、く、草薙の剣？！」

「またつく、お前はあの聖剣だけでなく日本の神話級の刀まで持っていたのか？」

エヴァは呆れた顔で言った。

「ちょっと、話が追いつけないんだけど、なにこのカードに書かれてるお兄ちゃんの名前とこの皇帝陛下ってのは？」

アスナとネギが驚いて聞いてきた。そういえば僕の生い立ちの話してなかったかな？と思いつき、エクスカリバーもだして説明をした。アスナ達もエヴァ達みたいに一度で納得してくれた。

「あ、あの、その剣がキングアーサーが持っていた聖剣エクスカリバーですよ？うわ〜」

ネギが年相応に興奮している。無理もないと思った、イギリスではアーサー王のことを知らない人間は居ないぐらい有名だ。

「それより、草薙の剣を何でお前が持つてるんだ？」

僕はエクスカリバーを仕舞い。草薙の剣を説明した。

母上が日本を統括していた皇族であること。その時代の実家には幾つか現代の日本では神話級お物が幾つかあつたらしい。その中でブリタニアに嫁ぐ時に草薙の剣を持っていった。僕が皇帝に即位してから4年後の15歳の成人の儀に貰ったものだと言明した。

「と言う事は、本物か」

「ちがうよエヴァ、あくまで再現だからね、本物と変わらないけど」

「だったら、オリジナルと同じだ、お前も思いつきしバグ能力だな。他に何が再現できる？」

僕は試しに武器ではないものを出した。

「なんだ？ただの本じゃないか？」

僕は苦笑して答えた。

「子供のころ武器として投げて使ったんだ。どうやら武器として使ったら再現できるみたいだね」

その後ネギ達と別れ、僕は敵をおびき出すために行動した。

12話（前書き）

お気に入り登録が150人いました。
こんな駄文ですが、皆様に読んでもらえれば嬉しいです。

12話

ライ Side

エヴァ達と別れ人の少ない場所に向かう途中に殺気を感じた。自分に向けられた者ではないがあまりにも異常な殺気だったため様子を見に行った。

そこで目にしたのは、綾瀬夕映が殺されそうになっていた。だから急いで止めに入った。

夕映 Side

私はのどか達と逸れてしまった為二人を探す内に奇妙な感覚に襲われた。私の本能が行くなと告げていた。しかし周りを見渡すと誰もいなかった。恐らく普通の人は無意識に此処を避けているようでした。だから余計にその原因を知りたくくなりました。置くへ向かうとそこには信じられない光景があった。

人が大量に死んでる。死体がバラバラで数は分からないが少なくとも10人以上なのが分かってしまった自分を怨んだ。その中心にいた人物が殺した本人だと直ぐに分かった。血の様な赤い髪の毛が楽しそうに生首を持って笑っていた。私は直ぐにそこから離れようとする不意に。

「ああ、誰だそこに居る糞は、わざわざ殺されに樹来たのか？」

そういつて私の方に向かってきたと思ったら、いきなり私の目の前に現れた。

「夕映、此処に居てくれ、僕はアレを何とかするから」

男は明らかに私達を殺そうとしている。殺す理由が目撃者を消す様な訳ではなく、タダ殺したいそういう顔をしていた。私は目の前の死体と男から発してる雰囲気と言葉が出せなくなったから、首を縦に振った。

「俺をなんとする、笑わせてくれるぜ身の程のカスがよオ！」

「いいなあ、いいぜおまえ、そそるぜえ、串刺しにして引き裂いてやらア！」

狂喜　それは紛れもない歓喜叫び。

私はこの男が人間には見えなかった。人殺しや殺人鬼というカテゴリーにはアレは入らない。化け物と呼ぶのも生易しい。

「行くぜ！」

男がライさんに向かって残った腕で攻撃しようとした。ライさんは持っていた刀で受けようとするが刀が折れた。とんでもない力だった。ライさんは咄嗟に下がった。

「どうした？まさかあ、これで終わりじゃねえだろうな、おい？」
するとライさん。

「アデアッド」

そう言ったら、ライさんの右手に装飾がされた刀が現れた。信じら

れない光景です。マジックとは思えない、私の頭に魔法？という単語がよぎった。私の考えとは裏腹に男は襲い掛かった。

「面白え！」

ガツン

ライさんが避けた、掠っただけで、ごっそり服の胸元が裂かれた。人間業で断じてないと言い切れる様な力だった。

「いいぜえ、楽しいなあ」

男が次々攻撃をする。

ライ Side

僕は折れた刀の変わりに王の証を呼び、そこから草薙の剣を出した。エクスカリバーは切り札、余程のことがない限り使うなとエヴァや学園長にも言われている。当然である、あの剣が存在していると魔法側の人間が知ったらわんさか僕から奪いにくるだろう。そんなことを思い出した。

赤髪の男の攻撃は人間にはありえない力だった。

「いいぜえ、楽しいなあ」

ゆらりと男は奇妙に弛緩した姿勢をとって攻撃を繰り返した。その攻撃は雑であるが、工夫は弱者のやり方だといわんばかりの力任せの早い攻撃。当たれば死ぬが、避けるのは簡単だった。男の拳には感情を丸出しにしている分攻撃が非常に分かりやすい。さっきは学

「すみませんねえ、ああ、私の名前はヨハネといいます。まあ貴方と同じ異世界の人間です」

こちらが聞く前にヨハネは説明しだした。

「簡単に説明しますね。この世界にきた異世界の人間は7人だけです。しかも全員別々の並行世界ですよ。アレも同じです」

先程自分で殺した相手を指を指しアレと言った。こいつの神経もヤバイと僕は思った。

「私達が呼ばれた理由は分かりませんが、呼んだ人間は全員、私が始末しましたよ。関西の方々に協力したのは多少の利害が一致しただけです。これ以上ここで貴方達と構えるきはありませんから。安心してください」

「貴方の目的は？」

「今は言うつもりはありませんよ、代わりにコレを差し上げます」

ヨハネは小さな原石を渡した。

「それは、彼、ロイの記憶が入ってます。先程始末したときに彼の記憶を吸い出しました。それは見るなり、捨てるなり好きにしてください。あとこの後片付けは私がしておきますよ」

そう言った瞬間、ヨハネとそこにあった死体は消えた。ただ血痕の後だけは残っていた。

異世界から来た人間。その中で知ったのは3人。3人の中でマシな性格をしたのはレイのみ。残りの3人は彼と一緒にいるのか？レイみたいになまとも人間か？それとも先程のロイみたいに殺人狂か？訳の分からない事が多すぎる。

（とりあえず、夕映をどうするかな？僕は記憶を消すべきか考えた。普通ならあんな光景を見たならトラウマものだ）

「夕映、大丈夫か？」

僕が聞くと平然とした顔で返してきた。

「はい、大丈夫です。ライさんのおかげで命拾いしたです」

とんでもない精神力だなと思った。表情を見ると強がってるような感じじゃないし。とりあえずはこんな場所からはく出たい。だから夕映とすぐに出た。

僕は離れながらエヴァに念話をした。どうやらエヴァ達も襲撃を受けたらしい。僕は急いでエヴァ達の下にむかった。夕映には異世界から来たことをある程度話した。魔法の事は先程戦闘で一言も発していないからそのことは伏せておいた。詳しい説明はエヴァ達のとこでやると約束をした。

エヴァ達に合流したらなぜかのどかがいた。

「あ！？ライや〜」

「おう、旦那が来たか」

「どこで見つけたです。ネギ先生と一緒にでしたか」

「なんで、夕映ちゃんが居るの？」

アスナ達は夕映が居ることに驚いた。

僕は嫌な予感がしたので聞いてみた。

「なあ、もしかしてのどかは？」

エヴァが頷いて答えた。

「ああ、魔法の事を知った、木乃香もな。そっちはどうだ、何か掴んだか？」

僕は簡単にエヴァに説明をし、その間に夕映は先程の事をアスナ達に説明していた。

「異世界から来た残りの奴も気になるが、ヨハネとやらの目的もきになるな。爺に言っつて調べさせるか」

エヴァは茶々に丸に頼んで学園長に連絡した。ついでに現場の血痕のことも頼んでくれた。

いきなり木乃香が抱きついてえ来た。

「ライが無事でよかった〜、願いやから、無茶せんといてえ」

どうやら先程の事で心配させたようだ。

「ごめん、心配を掛けさせたみたいだね」

僕が謝るとなぜかエヴァは不機嫌になって睨み付けて来た。

「木乃香ったら、今までの遅れを挽回するように、ここぞとばかりにアタックしてるわね」

「む、私もそろそろ仕掛けないと駄目ですね」

「夕映頑張つてね、私も協力するから」

「お。お嬢様!？」

「マスター、私はどうすれば」

「さすが、旦那」

「なんで、エヴァンジェリンさんが兄さんを睨んでるんですか？」

君たち助けしてくれ頼むから。僕は内心悲鳴を上げていた。

その後直ぐに木乃香の実家に向かった。僕はエヴァ達の情報を頭の中で整理した。

月詠る呼ばれる神鳴流の女剣士。

陰陽術師の天ヶ崎 千草。

ネギと同年代の犬上 小太郎

そして、見た目以上に強いフェイト・アーウェルンクス

後はヨハネの言ったことが本当なら彼はもう此処で問題は起こさないだろう。信用できないが、あの時、僕と戦わなかったことから彼は此処での事は興味をなくしたのかもしれないと勘が告げている。

情報を整理している内に本山についた。

しばらく歩いている内に門に着く。

門をくぐると、

「お帰りなさいませ、このかお嬢様」

盛大な出迎えをされた。

なんか懐かしいな、戦場から戻った後の事を思い出した。沢山の人と同時に挨拶される感覚はあまり好きでない。

なんか硬いしな、当時の臣下にやめてもらおうと相談したときは『なりません、陛下には常にあのように挨拶しなくては他のものに示しがつきません』など起こられた記憶を思い出した。

「ここが、木乃香の実家か…」

「へえ〜」

以外にデカイ、本山と言うからてっきりもう少し小さいと思っていた。

「アスナ、ライ……ウチの実家おっきくて引いた？」

「え？ ううんっ……ちょっとビックリしたけどね。私はいいんちよで慣れてるし」

「僕は慣れてるけど、ただ、本山と言っていたから神社みたいなのを想像してた」

「ライは慣れとるん？」

「ああ、後で説明するよ」

「ははは、木乃香は驚くと思うよ。お兄ちゃんの事は」

「??？」

僕達は案内され、大きな部屋に入った。そこには人数分の座布団が置いてあった。僕達は適当に座った。

すると、目の前にある階段から、木造の階段の軋む音を鳴らしながら壮年の年の頃と思われる柔和な表情をしたメガネをかけた男性が

ゆっくりと降りて来た。

「お待たせしました。ようこそ明日菜君、このかのクラスメイトの皆さん、御同行して下さい。御方、そして担任のネギ先生」

「お父様 久しぶりやー！」

このかが立ち上がり、その男性に体ごとぶつかるように抱き付いた。そしてその男性はこのかを受け止め、暖かく微笑んだ。

「東の長、麻帆良学園学園長、近衛近右衛門から西の長への親書です。お受け取りください」

「確かに受け取りました。ネギ君、大変だったようですね」

「い、いえ……」

詠春さんはネギ君から親書を受け取り、ソレを開き、読むと苦笑いの様なものを浮かべた。

「……いいでしょう。東の長の意を汲み、私達も東西の仲違いの解消に尽力するとお伝えください。任務御苦労！ ネギ・スプリングフィールド君……」

「さて、今から山を降りると日が暮れてしまいます。君達も今日は泊まって行くと良いでしょう。歓迎の宴を御用意致しますよ」

破顔一笑、晴れやかに言い放った。

生徒の皆が盛り上がる中僕は少ししたら一度ホテルに戻ると伝えた。

「貴様、泊まらんのか？」

「ライは、泊まらんの？」

すまない、けどさすがに担任も担任補佐もないのはまずいだらう

「？」

「む〜」

何とか木乃香達を説得した。

それから、僕が戻るまで僕の事を木乃香達に話をした。

「なるほど、君から威厳を感じるはその為か、若いのに対した者だ」

「ライは王子さまやったんや〜」

「納得したです」

「ふわ〜！！！」

詠春さんは納得していが、木乃香達はやはり驚いていた。

「まあ、僕の話は此処までだけど、とりあえずのどかと夕映は魔法の事を知った。これからどうしたい？」

「私はネギ先生の力になりたいです！」

「私は誰かの為より、まず魔法についてしりたいです。たとえばどのような事になっても」

のどかはネギの為にと。夕映はまず自分の好奇心のためだと言った。それにしても、夕映はアレだけの光景を見ても瞳が緩んでいない。これ以上いってもしょうがないと思った。彼女達が自ら決めたのなら僕は何も言うつもりはなかった。彼女達にそれを言っ僕はホテルに戻った。

詠春さんに言われた敵の目的がきになった。

「敵の目的ですが、おそらくこの地に眠る鬼神を利用しようとしていると考えられます」

（鬼神か、封印をといても人に操れるのか？最悪聖剣を使うしかないか。あの時この世界でシャルルと対峙したとき聖剣が有ったらコードをもつ彼でもその命を絶つことができた。アーカーシャの剣と同等、神を殺せる数少ない
神剣。エヴァもいるし問題が起きたら直ぐに召喚すように言ったから何とかなるか）

13話

ライ Side

ホテル嵐山に着きコーヒを飲んでいたらエヴァから念話が来た。

(ライ、今来れるか?)

(敵襲?)

(ああ、かなりの数の鬼を呼び出してきた、周りの被害を考慮しなければ私一人で十分だが、坊や達のお守りはをしながらだとキツイ。召喚すがいいか?)

(ああ、かまわないよ!)

すると僕の前にある風景がかわった。

刹那 Side

ハア、ハア、ハア、ハア

数えるのも嫌になるほどの鬼や烏族、異形の軍勢。その中心に、肩で息をする2人の少女が立っている。

「・・・大丈夫ですか?アスナさん」

「う、うん!まだまだ全然へーき」

強がってはいるがアスナも刹那も相当消耗していた。
アスナは始めての人外との戦闘に。
刹那は敵の数と、アスナを気遣いながらの戦闘に。
ライとの特訓の御おかげで未だに冷静さを失っていない。

「ふんっ！」

「！！！」

ガキンッ

襲ってきた鬼の腕が無くなっていた。

「ごめん、遅くなった」

「お兄ちゃん」「ライさん！」

そこには聖剣を持ったライさんがいた。

「こいつらは僕達がやるよ」

ライさん今、僕達と言った。

「僕達って、お兄ちゃん一人じゃない？」

ライさんがアスナさんの頭をなで微笑んで言った。

「これから、紹介するよ。かつて僕が背中を預けたエーデルリッタ
達を」

「アデアット」

ライさんが王の証を身につけた。そして

「私に、今一度力を貸してくれ」

たった一言、ライさんが力を貸してくれと誰かに問いかけたすると、周りの景色が変わった。壮大な草原が映し出された。そしてライさんの後ろには8人の騎士達立っていた。そして彼らの前に居る人物が私達が知っている人物とは違っていた。

喫茶店のマスターでもない

私の師匠でもない

そこには一人の王が居た。この草原を駆け、騎士達を指揮をする一人の王が。

「鬼達を殲滅しろ」

たった一言の命令。

「……イエス！ユア・マジエステイ！」

騎士達が返事をした。その表情は喜びに満ちていた。ライと共にまた戦える喜びが顔に全員でていた。

そこからの戦いは彼らが圧倒していた。一人一人がかの時代で一騎当千を誇る騎士達の前では鬼達は次々やられていった。

「異形とはコノ程度か？」

「陛下と共に戦うなら無様な戦いができねえなあ」

「しゃべるな、戦いに集中しろ」

「しかし、陛下が居るのだぞ」

「す、すごい！」

騎士達の戦いも凄いが、彼らと共に戦っているライさんが凄かった。戦場を駆ける戦神。まさにそう呼ばれる強さだった。

エヴァ Side

私はライを召喚し、刹那達の下に向かわせた。ライの上級魔法は範囲がデカイからそれで鬼達を倒すと思っただが。上級魔法を上回るとんでもないものを使った。

「なんだ！！景色がいや、世界を侵食した！？」

私が戦っているフェイトと呼ばれるガキが驚いている。無理も無い私も内心では驚いていた。しかもライと共に戦っている騎士みみたいな奴らは圧倒的な強さで鬼共を倒している。

(くくく、差し詰め王の軍勢といったところか、一人一人が強い、それもそうか、かの時代は魔法がない、己の肉体のみが頼り、故に極限まで鍛えればいい)

「彼か、レイを倒したイレギュラーは？」

「何を、余所見をしている、貴様はそんな余裕は無いだろ？そうら
っ！」

「クッ！！」

ライ Side

「お前たち、此処は頼んでいいか？」

「陛下！陛下は命令すればいいだけです、我々は貴方の臣下ですか
ら」

彼らは笑みを浮かべ答えてくれた。

「そうか、ならば此処は頼むぞ」

「」「御意」「」

エヴァが少年と戦ってる中、僕は刹那達に状況説明を求めに行った。

「大丈夫か？二人とも？」

「あ！うん、それよりあの人達は誰なの？」

アスナが聞いてきた。

「彼らは、僕が王だったときに背中を預けた騎士達、エーデルリツターだよ。それより現状は？」

僕が聞くと刹那が答えてくれた。

「ネギ先生は、お嬢様を助けに行きました、あの鬼神を復活させた天ヶ崎 千草のところにいきました。エヴァンジェリンさんが戦っている少年が一番強いから、ネギ先生は鬼神の方に」

あの鬼神は本来ならエヴァが担当するはずだっただろう。しかしあの少年が居たからエヴァは鬼神の方にいけないか。

「刹那、君はネギの加勢に行つて、木乃香を助けたら直ぐにネギと共に此処に戻れ。アレは僕が何とかする」

「しかし、ライはさん?!」

この空間が存在するだけで、僕の魔力は失っていく。それに気づいたのだろう。

「大丈夫だよ、それにエヴァにお前があのデカブツをやれって言われたからね」

(ライ、いい機会だ、お前の聖剣をアレに試せ。このガキは舞台から退場させる、それなら聖剣を使ってもいいだろう)

先程僕が来たとき念話で言ってきたことだ。アレは再封印ではなく

完全に消さないといけない存在だ。

だからエクスカリバーで行く、それにこの剣が魔力で攻撃するなら僕は一度もこの剣を本当の意味で使ったことが無い。エヴァはアレで試してみると言う。

「……わかりました、この場をお願いします」

「それと、皆さんに黙っていたことがあります」

そう言うと刹那の背中から翼が生えてきた。

「これが私の正体……やつらと同じ化物です。でも誤解しないで下さい、お嬢様を守りたい気持ちは本物です！今まで秘密にしていたのは、この醜い姿をお嬢様に知られて嫌われるのが怖かっただけ・
・！」

僕は自分で自分を卑下する刹那の頭を撫でた。

「大丈夫だよ、刹那は化け物なんてじゃない、だって自分の大切な人を守るうとしてるんだから、それに綺麗な羽だよ。君が注意を惹き付けてくれ、僕は弓で彼女に射て隙を作るからその時に君の羽で、木乃香を助けてやってくれ。」

「はい！」

刹那が鬼神の方に飛び出した。僕は聖剣を戻し弓を武器庫から取り出し構えた。

「お兄ちゃんって弓も使えるの？」

「ああ、昔は弓は重宝したからね、死にたくないから覚えられるもの覚えたよ」

「うわ〜」

僕がアスナの質問に答えるとフェイトが攻撃をしてきた。

「君には、退場して貰うよ」

しかし、エヴァがそれを止めた。

「私が相手をしているのに、目移り小僧？」

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック」

「契約に従い 我に従え 氷の女王」

来れ とこしえのやみ！ えいえんのひょうが！！」

「クッ」

「貴様は此処で消えろ」

「どうやら、分が悪いみたいだね、僕は「スパイラルフレア！」な
っ」

「ついでに出て来いフレイムドラゴン！」

僕はフェイトがエヴァに注意を向けた隙に魔法を仕掛けた。

「以下省略、ブラッディハウリング！」

フェイトは炎を喰らい、さらに直ぐに炎の竜に襲われ後方まで吹き飛ばされ。最後に地面から闇上級魔法をくらった。

「ライ、以下省略って？しかもあの威力。相変わらずデタラメな魔法だな」

「エヴァには言われたくないかな」

僕はそう言いながら弓を構えなおす。

千草は刹那達に集中している、だから射た。

千草にあたり、その隙にネギが追い討ち、刹那が木乃香を助けた。

「すごい！」

「本当に弓なで達人弓だな。まったくこの距離から当てるとは、そのうえ不意打ちか！」

「戦場で隙を見せれば死ぬだけだ、遊びで戦っているわけじゃないだろう彼らも？」

「違うない」

刹那達はこちらに向かってきた。

「まったく、レイを倒す剣術に無詠唱であれだけの魔法くわえ弓は達人級か。君は何もだい？」

フェイトと呼ばれた少年が聞いてきた。あれだけの魔法を喰らってまだ生きていた。しかし体はかなりボロボロだった。

「ライ・ランペルージ」

「ライか、覚えておくよ、僕は失礼させて貰うよ」

「「逃がすと思うか！」」

僕とエヴァは同時に言った。しかしフェイトの姿が消えた。刹那達が戻ってきた。

「ライさん、先程は有難う御座いました」

「ありがとな〜」

「さて、ライ邪魔な小僧は消えた、後はあのデカブツだけだ」

「そうだね、僕の臣下達もまだ戦ってるし、そろそろ終わりにするか」

鬼神は千草が制御していたのか、千草がやられたら立っていただけだった。

僕は聖剣を呼び出し鬼神の方に駆けた。

ライは聖剣をてにし鬼神の方に向かった。

「さっきのライが持ってた剣、綺麗やったなあ」

「あの、アスナさん、鬼達と戦っている人たちはだれですか？」

坊やアスナに聞いた。

「お兄ちゃんのかつての部下みたい、確かエーデルリッターって言うってた」

なるほど、よく言ったものだ、奴らは強い、そう呼ばれる資格と力がある。

「エーデルリッターってなんなん？」

「エーデルリッターはドイツで『高貴な騎士』という意味だ。それよりライを見ておけ、世界でたった二人だけが持つことを許された聖剣の力が見えるぞ」

私がそう言うと、坊や達はライの方を見た。この戦いはもう勝ったも同然、フェイトは消え、千草も負傷し、鬼共はライの臣下が倒している、しかももう終わったみたいだ。

ライは鬼神の前に止まり聖剣を構えた。すると、巻き起こる烈風。

コレが伝説の剣の力。

コレがライの力。

ライを主と認めた聖剣は間違っていなかった。

そう思える、あれだけの威力はこの世界の魔法には存在しない。

私は自分の本能のまま笑っていた。

皆がライの元に駆けた。

ライは臣下達に質問した。

「お前達は、私を「陛下、我々は陛下に命を預け、忠誠を誓いました。」

たとえ結果があのようなものであっても我々は後悔は微塵もしていません」

「そうか」

「我々は死しても陛下の力になれることを誇りに喜びに思います」

「ありがとう」

ライが礼を言うと騎士達は地理になって消えた。風景もそれに合わせて元に戻った。

そして、ライが倒れた。

「「ラ、ライさん!?!」」

「お兄ちゃん!?!」

「兄さん!?!」

「あわてるな、馬鹿ども、魔力を使い過ぎただけだ」

無理も無い、臣下達を呼んだ結界、フエイトに使った魔法、最後には聖剣。これで魔力が残っていたらそれこそ化け物だ。

「まったく、強がって。貴様は」

臣下達の前では強がっていたようだ。

「近衛木乃香、ライと仮契約をしろ」

「はい!?!いいのエヴァちゃん?」

アスナが聞いてきた。

「仕方ないだろう、ライは王の証を出したまま気絶した。ライのアーティファクトは出てるだけで魔力を消費する。こいつが何時目が覚めるか知らないんだ。私の魔力補給だけでは足りないかもしれないからな」

木乃香が仮契約をしたら、奥から思わぬ人物が現れた。

「そ、その男か、内の作戦を邪魔したのは?」

天ヶ崎 千草

彼女は大怪我していた。くわえ敵意をむき出しにしていた為、皆が構えた、更に直ぐに千草と違う方向から知らない人物が現れた。

「あれ〜やっぱ、もう終わったのかよ!？」

金髪の男、年はライと同じぐらい。赤いコート。右裾は無く、そこには刺青があり、タバコをくわえたチンピラ学生と言っても伝わるだろう。

「だ、だれや!？」

天ヶ崎 千草が聞く。

「あん？見て分かるだろう、ただの通りすがりのイケメンだよ」

ふざけた答えだ。

「あのデカイの出したのお前だろ？メガネ女？」

「だったら、どないするんや？」

「こっするんだよ」

男の左手に銃が構えられた。そして

バン バン バン

男は何の躊躇も無く天ヶ崎 千草の額を撃った。

「……な!?!」

私以外は驚いていた。目の前で人が撃ち殺された。しかい奴の銃はアーティファクトはない。

奴は呪文も使わず出した。それに奴から魔力を感じるが銃には感じない。

「んじやなく、お譲ちゃん達、後野郎も」

「待て、貴様何者だ!?!」

私が質問すると

「あん?だからさっき言ったろ、見て分かるだろう、ただの通りすがりのイケメンだよ」

先程と同じ答え。

「貴様、ふざけているのか!?!」

「そう、怒んなよ〜、お前たちの敵じゃないのは保障すぜ」

「どう、保障するんだ?!?!」

「時期に分かるからよ、それにミステリーなイケメンって印象はかっこよいいからよ」

そう言って、男はこの場を後にした。

その後直ぐに爺が呼んだ助っ人が来たが、終わった後だと分かる
悔しがっていた。

13話（後書き）

ライは小太郎達とは絡まなかったな。

スイマセンでした、絡もうと考えてたけど自分の力じゃ無理でした。

そして新キャラは某ゲームの主人公の悪友です。

名前が出たらキーワードに追加します。

14話

ライ Side

僕が倒れてすぐに木乃香と仮契約をし、エヴァと一緒に魔力提供をしてくれた。そのおかげで直ぐに意識が戻った。

そことで礼を言っ、一人で涼んでたら刹那が別れを言いに来た。理由を聞くと自分がハーフであり禁忌の白い翼を持っていると。一族の掟で去らなければならぬらしい。

「刹那は木乃香と離れたいの？」

「いえ、できれば一緒にいたいです」

泣きそうな顔で答えた。僕は彼女の頭をなでながら言った。

「刹那、僕はね、君と同じで大切な人達から逃げたことがあるんだ。しかも僕に関する記憶を消してね」

初日に学園長達に言っていないことを話した。

「記憶を消し、一年ぐらいして再開したら、彼の記憶が戻って、記憶を消した理由を言ったら。こう言われたんだ」

「っ！ ふざけるなっ！！ 記憶を消せば、俺たちが苦しまないだ
と！？ 悲しまないだ！？」

「俺が、俺たちがどれだけ苦しんだと思ってるんだ！？」

「ナナリーはお前と折った桜の折り紙を握り締め、何度も泣いた。会長はどこか遠く眺めることが多くなった。

シャーリは何時もお茶を入れるとき、一人分多く淹れてしまい寂しそうに苦笑する。

リヴァルもカレンもニーナも、スザクだって」

「俺が……どれほど、苦しんだか、お前は……っ」

「俺は、俺は 忘れたくなかった!!」

僕はルルーシユと再開したと時の事を思い出し語った。

「僅かしか過ぎさなかった僕の事で彼ら苦しんでいた、悲しんでいた。木乃香と君は幼馴染なんだろう。木乃香の前を去ったら。彼女は苦しむと思う、悲しむと思う。だって、あの子はアスナや僕に君とまた仲良くなりたいと相談したんだよ」

「木乃香に話をしてやってくれ。お前達はお互い一緒に居たいならそれが答えだろ。掟も周りの声も関係ない。自分の気持ちを大事にしてくれ」

「はい、ありがとうございます、おかげで気持ちが決まりました」

刹那はお礼を言つと部屋から去った。

「ルルーシュ、スザク

僕は」

翌日、木乃香と一緒に居ると二人で報告にきた。

最終日の修学旅行を楽しんで僕達は学園に戻った。

ただ、ナギさんの手がかりが無かったのが残念だった。

学園長室に行き、異世界から来たヨハネのことを話、ロイの記憶が入ってる鉱石を渡した。

「これに、記憶が入ってるのか？」

タカミチが質問してきた。

「ヨハネと言った男が嘘を言ってないのなら、入っているとおもいます」

「一応、畏かどうか調べたが、記憶の残留の後しなかったぞ」

エヴァと僕が答えた。

「今から、見てみるかのう、ワシら四人で」

こうして、僕達は鉱石にある記憶の残留を覗いた。

そこには一人の異常者が居た。

「子供！？ライ君、彼がロイなのか？」

タカミチが聞いてきた。

「はい、見た目は幼いですけど、この殺気は間違いありません」

体から放たれるさつきは異常すぎる思っているだろう。

周囲に見境無くばら撒かれる敵意。明らかに外見の年齢とは不釣合
いすぎる凄烈さには、学園長達は冷や汗を流していた。

異常者が言葉を発した。

「……喰いたりねえ、ああつまんねえ」

ぼそりともれたのは、呪詛と不満の声。

含まれていた感情は、餓鬼の獣が懐くそれとお同一だった。

「どいつもこいつも、んだよ粹がるのは最初だけか。」

ちよいと遊んでやればこの様か、人を散々屑だの何だの抜かしてお
いて、腕の一本でも裂いてやったらもう命乞いかよ、くだらねえ」

「なんだそりゃ？屑って言ったんだろっ、屑と思ってるんだろ、ならそれに頭下げてるてめえらはなんだ。屑以下じゃねえか、あっさり肯定しやがって。」

そうまで自分が惜しいかねえ、楽しんで壊して晒したいかよ。ハッ、救え根名、そりゃくずか。なあ、なんか言ってみるよ、なあ」

「っっ」

首や手足を玩具のように折った。そして死体置き場らしいところに投げ捨てた。

そこには2、30人の死体があった。

僕達は言葉を失っていた。

「ッチ」

異常者は舌打ちをする。

不満や苛立ちを隠そうともせずそのまま死体に蹴りを入れた。

……これは飢餓感による癩癩。

いい加減にしやがれ、残飯処理はうんざりだ

というような表情をしていた。

景色が変わる。

そこには先程と変わらない異常者。

「おいおい、もう終わりか？それでも軍人か？ああ？」

そう言いながら、何十人と居た軍人を素手殺していった。

歳はネギと変わらないだろう。見た目は栄養失調でかなり腕が細い。しかしとんでもない腕力。

次々と軍人を素手で、首を、腕を、心臓を潰していく。

また景色が変わった。

次は僕と会った時と見た目の歳が一緒だった。

町の人間全員がバラバラにされていた。

「くはっははははははは」

直ぐにまた景色が変わったと思ったなら現実に戻っていた。鉦石は塵になつて消えた。

「ライ、お前が言ったことが分かった。アレは呼吸する事と人を殺すこと同列と考へてる異常者だな。まったく600年生きてきたが、あんなの居るのを想像すらしたことも無いぞ」

「まったく、異常者だと君が言ったことは正解のようじゃな、しかしアレを殺したヨハネは君から見てどうじゃ？」

「はっきり言って、アレよりやばいと勘が言っていました。先程のような大量殺人はする人間とは思えないですけど、危険のベクトルが違っ感じしました。少なくともアレより強いですね」

「アレより……」

タカミチが不安な顔をする。

「一応、情報を集めてみるかのう」

「お願いします、僕達はこれで」

「おお、すまんかったのう」

こうして僕達は帰った。気分はかなり鬱だった。

14話（後書き）

この回が一番悩みました。刹那の説得にロイという異常者の説明。ヨハネの危険性を匂わせるために悩みました。

気分を害された方はすみませんでした。

そして、とんでもなく短くてスイマセン。次回は弟子入り編です。

15話

刹那 Side

修学旅行から三日たった。私はライさんの言葉でお嬢様のそばに居ると決めた。

それから、何時もこのちゃんと一緒に居るようになった。以前のよう楽しい日々だと感じていた。そんなある日に。

私はライさんとの特訓をしていた。

「今日は此処までにしよう」

「ハアツ、ハアツ、ハアツ、あ、ありがとうございます」

「せっちゃん、あんな強いのにライには一本も取れん上、ライは息切らしてへんなあ」

「当たり前だ、ライと違ってまだ動きに無駄がある。京都の月詠との戦いだってライの特訓が無かったら苦戦はしていたんだ」

エヴァンジェリンさんの言うとうりだ。ライさんの特訓が無かったら絶対に苦戦していた。ライさんは私が守りの時はギリギリ反応が出来る打ち込みを常にしている。私が打ち込む時は私が好手を打ち込むようにワザと隙をつくり誘導している。

そんな時、ネギ先生が別荘に来てエヴァンジェリンさんとライさんに弟子にしてくれと頼んだ。

二人の答えは。

「面倒くさい」

「ごめん、無理」

ノータイムで断った。

「ちょっと、エヴァちゃんなら兎も角、お兄ちゃんが断るなんて。お兄ちゃんは刹那さんに教えてるんでしょ？」

「アスナ、僕が刹那に剣術を教えるわけじゃない。刹那の動体視力と反射神経をギリギリまで引き出して、感覚を研ぎ澄ませる事しかやってないよ」

「本当なの？」

「はい、私は元々神鳴流の型がありますから」

しかし、ライさんに鍛えてもらったおかげで刀子先生に「私もうかうかしていられないな」など言ってくれた。

「それに、僕の剣術などは相手を確実に殺す為のものなんだよ。正義の魔法使いを目指すネギにとって天敵見たな物だよ、エヴァに魔法を教わるのは良い案だと思うけど」

ライさんは今まで自分は正義と言ったことが無い。以前いた世界で

行ったゼロクイエムで一億の人間を殺したとっていた。しかしその御蔭で世界は争いではなく話し合いというテーブルに着くことが出来たと私は思う。ライさんと関わってから正義は曖昧な物だと思えてきた。

「僕には、エヴァンジェリンさんも兄さんも悪い人には見えないです」

ネギ先生は引き下がらない。

「エヴァに魔法を教わるのは兎も角、僕の剣術とかだけは駄目だよ。僕のは戦場で鍛えた見たいな物だからね」

「生き残るために守りたい人を守る為なら何でもする。死体を利用したり、利用できるものが無かったら敵の攻撃を利用して自分の指を手首を切って、噴出した血で相手の視覚を奪い残った手で相手の喉を握りつぶし殺す。そうしないと死ぬ時代だったからね」

そう言ったライさんの目は本気の目だった。遊びでも戯言でもない。もしそんな状況になったら彼なら迷わず今の言った行動を取るだろう。ネギ先生は困惑した顔を浮かべていた。無理も無いと思った。マギステル・マギを指すならそんな事は出来ない。

エヴァンジェリンさんが呆れた顔にライさんが頼んだ。

「エヴァ、ネギに僕のの記憶を見せてやって良いか？」

「そうだな、いい機会だし、私も見たいからな。ゼロレクイエムの事も。私はお前達が行ったことは平和をもたらすための必要な事だと思っっている。学園の魔法教師の馬鹿どもは絶対に認めないからな。坊やが学園の魔法教師と同じなら私に弟子にしてくれと言ったことは撤回するだろう」

エヴァンジェリンさんは私達の方おみて聞いてきた。

「お前達は、どうする？」

「私も知りたいです」

私は答えた。ライさんの覚悟を知りたいから。修学旅行の時にライさんが私を説得したとき、私は自覚した。ライさんが好きだと。以前は尊敬をしていたとか言い訳をしていたがあの時以来自分の気持ちを素直に受け止めることが出来た。だから好きな人の事を知りたいと強く思った。

「うん、うちも知りたい」

「わたしも知りたい」

「そうか、坊や、ライは大量殺人者と言われているが私はライを認めている。そんな私に魔法を教わる気が消えていないならチャンスをやる」

「わかりました」

「すまないな、ライ」

「かまわないよ、いずれ話すつもりだったし、エヴァは気にする事は無いよ」

ライさんはエヴァンジェリンさんの頭を撫でながら優しい表情で言った。このとき私やお嬢様は少なからず嫉妬した。

エヴァンジェリンさんが魔方を発動させた。

そこは戦場だった。剣や槍などの武器を使った戦場。火器など存在しない時代の戦場だった。

その戦場で場違いな子供が居た。

年齢は7・8歳ぐらいの子供。白銀の髪に綺麗な顔立ち。間違いないライさんの子供の頃だと思った。

ライさんは常人離れた動体視力と小さい体で素早く敵の攻撃を避け、鎧や籠手の隙間に躊躇無く刀を突き刺し、敵を殺していく。

私やエヴァンジェリンさんはある程度、話を聞いていたが、私は驚いていた。

私ですらそうなのだから、お嬢様達は言葉を失っていた。

ネギ先生は自分より年下だったライさんを見て複雑な表情もしていた。

特訓をして戦場を駆けても、いくら政治の勉強しても自分は所詮はハーフ。二人の兄の純粋なブリタリア人より王位は遠い。母や妹すら守れず。税金で苦しんでいる市民にも何もしてやる事が出来ない自分に苛立っていた。

そんな時ある人物が現れた。

「力が欲しいかい？皇帝になれる力を」

「ほしい、皇帝になれる力を。母上達を守る力を」

「ならば、契約しよう。君の願いはかなえてあげる。変わりに私の願いをかなえてもらおう」

こうしてライは絶対遵守のギアスを手に入れた。

Side OUT

ギアスを使い兄達を事故に見かけ殺し、父親を病に見せかけ殺した。ライが皇帝になってから国のお経済は安定し始めた。

彼の父親は政治に向かない俗物だと彼女達、エヴァジェリン達から見ても明らかだった。

ライは幼くとも政治や交渉術も勉強して為、父親より美味しく国を治めていた。

陛下に即位しエクスカリバーをギアスを授けた男から受け取った。

国は経済は安定しても隣国からの争いは無くならなかった。

戦場ではライは先陣をきり兵士達の士気を高め勝利をしていった。

15歳の成人の時に母親が日本から持ってきた草薙の剣を授かる。

17歳の時に隣国に平和を持ち駆け平和の道が切り開けようとする中、北の蛮族が攻めてきたと聞いてある言葉を口にした瞬間にギアスが暴走してしまった。

「奴らを皆殺しにしろ」

平和の道が見える中、それを無に帰そうとする蛮族に言った言葉で母親、妹、従者や町の間人全てが武器を取った。

そして彼らは戦った。

結果は全てを失った。

ライは全てを失った事で死にたかったが、契約である以上、死ぬ事ができなかった。

ギアスを渡した男はライに自分の願いを叶えるその時が来るまで眠るかを持ちかけた。

ライは生きる意志がなくなっていた。ライにとってもうどうでもいitと言う理由で彼は眠りについた。

それから、千年近く経ち、彼はある研究所に眠っているところを発見される。

そして、現在の知識や歴史にナイトメアなどの脳に擦り込まれた。

ある日にテロリストが研究所のカプセルを盗み出した。その時、ライのギアスが発動し訳の分からぬままライはその研究所から逃げた。

行き着いた場所はとある学園。ある生徒達が近づいてきた時にライの意識が消えた。

意識が回復し移った先には刹那達より少し年上の少年少女達がいた。名前を聞かれた時に、ライは名前以外の記憶を失ってる事に気づいた。

彼らの名前を聞き、此処に住まないかと持ちかけられる、しかし、自分は記憶も無く得体の知れない人間ということで断ったが、ミレイと呼ばれた子に無理やり住まわせられる事になった。

記憶を探している内に自分が居る国の現状を知ってしまった。

日本と呼ばれていた国はエリア11と呼ばれていた。かつて日本人と呼ばれていた人種もイレブンとよばれ虐げられてきた。

その現状を知った刹那達はショックを受けていた。

敗者には絶望、そして勝者には栄光を。

コレがライがいた世界。自分達の世界とは違いすぎる。

数日の日がたったある日にC・C・と名乗る不思議な少女出会う。彼女から自分が持っている力、ギアスが何のかを教えてくれた。記憶は無くても生きていけると言われても納得出来なかったライは記憶を求めた、それが絶望だと知らずに。

記憶とギアスの使い方が思い出しつつあるライに、自体を重く見たC・C・はライを黒の騎士団に誘う。

ライは黒の騎士団で活躍しながら、生徒会の生活に馴染んでいた。ルルーシュとチェスを打ち、彼の妹に折り紙を教えたり。二人と毎晩一緒に食事をした。食事はルルーシュと当番製になった。

他のメンバーとも仲良くなりライの中で生徒会は大切なものになっていた。

ナリタでは初めてナイトメアに乗りブリタニア人のナイトメアを倒していく。

黒の騎士団の目的は日本いるブリタニア軍の退去が目的。イレブンにとっては正義の味方として思われていた。ネギは複雑な気持ちになっていただろう。

ネギ達の世界で言えばマギステル・マギと呼ばれてもおかしくない。

黒の騎士団の目的が達成できれば、国を奪われ、尊厳も人権もない彼らに救いになるのだから。

ライは新しいナイトメアを授かり敵国のブリタニアの矛と呼ばれている男を倒した。

日本解放戦線と呼ばれてる組織の幹部の四聖剣を味方にして彼らの隊長である奇跡の藤堂を助けた。

しかし、敵として戦っていた白カブトのパイロットは生徒会のスザクだと知ってシヨックを受ける。

スザクを捕らえるために式根島で作戦が行われた。

しかし、作戦は失敗して、ゼロとカレンが行方不明になる。

ライはC・C・に神根島に居るといわれ、単独で助けに行った。

謎の少年に襲われたが、何とか撒いた。

その時ライはかなり消耗をしていた。

ゼロ達を見つけたが、場は混乱していてゼロと接触できずにその場で意識を失った。

目を覚ますと、そこには誰も居なく、ライは遺跡らしきものに見覚えがあると感じ、調べた。

その時に自分の記憶が蘇った。全てを思い出しギアスがまた暴走したら生徒会の人たちを失う。

そう思ったライは再び眠りにつく事を決意した。

黒の騎士団に戻り、ゼロに自分は長く生きられないと報告し騎士団を脱退。

生徒会に戻り生徒会の仕事を出来る範囲をして、ナナリーに記憶が戻ったと報告をして戻らなければならぬと言った。

ルルーシュにも報告したかったが彼は最近になってよく居なくなっていた為、挨拶は出来なかった。

C・Cには神根島に行けばいいと言われ、そこに向かった。

V・Vと呼ばれた子供に遺跡の力を発動させてもらい、ライは再び眠りについた。

「自分の存在を忘れますように」と「ギアスを駆け眠りについた。

15話（後書き）

弟子にしてもらう前にネギが目指す正義は何か？と覚悟を決めさせるためにライの過去を見させました。

此処まではゲームのギアス編です。

何か硬い説明になったことをお詫びさせていただきます。

次回からはライがR2に介入した過去です。

16話

意識が眠ってる時に声が聞こえた。

「起きてくれ、ライ」

聞いたことがある声にライは返事をした。

「それは出来ない」

「お前の力が必要なんだ、お前のギアスのことを理解した上で頼んでるんだ」

「わかった、ただし僕のギアスが暴走したら迷わず殺してくれ、それが条件だ」

「…わかった。その契約を結ぼう。その時は私の手でお前を殺してやる」

「契約成立だね、ありがとう。C.C.」

そう言っただけでライは目覚めた。その後、黒の騎士団の事をゼロがルルーシュである事、そして彼もギアスを持っていて暴走させてしまった事を知った。ルルーシュの記憶が書き換えられ自分がゼロだった事を忘れてる事も聞かされた。

現状を説明されてからライは黒の騎士団に新しく入隊する新人として挨拶をした。

そこには数あまりにも少なかった。団員達はライを警戒していた。しかし、ライの能力で騎士団はある程度建て直しができた。ゼロであったルルーシュの記憶を呼び覚ます作戦を立てた。

ルルーシュと接触してC・Cがルルーシュの記憶を呼び戻した。そして、ライは新しく入った新人として挨拶をした。ルルーシュはライを引っ張り言った。

「ようやく、見つけたぞ仕事の出来る妖精君。貴様には聞きたい事が山ほどある」

ライは心底驚愕した。

「おい、C・C。これはどういう事だ？僕に関する記憶は戻らないんじゃないのか！？」

「なるほど、俺達から記憶を消したのはおまえ自身か」

C・Cは微笑みながら答えた。

「その坊やが自力で思い出したんだろ？意外と根性があるじゃないか」

「黙れ、魔女」

ルルーシュはC・Cに怒鳴る。

「どうして俺達の前から姿を消した？」

「僕は君と同じギアスを持つてるんだ。一度暴走している。今は沈静しているけど暴走したら悲劇が起こるんだ。僕のギアスは聴覚で発動すから」

「だったら、なんで俺達から記憶を消した？」

「……………悲しみさせたくなかった。苦しんで欲しくなかった」

ルルーシュはライの胸倉を掴み叫んだ。

「っ！ ふざけるなっ！！ 記憶を消せば、俺たちが苦しまないだと！？ 悲しまないだ！？」

「俺が、俺たちがどれだけ苦しんだと思ってるんだ！？」

「ナナリーはお前と折った桜の折り紙を握り締め、何度も泣いた。会長はどこか遠く眺めることが多くなった。

シャーリは何時もお茶を入れるとき、一人分多く淹れてしまい寂しそくに苦笑する。

リヴァルもカレンもニーナも、スザクだって」

「俺が……………どれほど、苦しんだか、お前は……………」

ルルーシュの胸倉を掴んでる手が怒りで震えていた、目から苦しんできた悲しんできた、訴えていて、そこには涙が零れ落ちていた。

「俺は、俺は

忘れたくなかった!!」

この台詞に刹那は罪悪感を感じていた。自分も木乃香の前から姿を消そうと思っていた為に自分も木乃香をあんなふうに苦しませることになっていたのでから。

そして、ルルーシュはギアスが発動し続ける左目を左手で隠し、ライに言った。

「二度と、俺の記憶を消すような真似をするな。二度と、俺の傍から離れるな。そして　二度と、ギアスを使うな」

「ほお、優秀で有用な最強の駒に出来るライを駒にしないと?」

「お前は黙っている、C・C・っ!!」

「君のギアスを使えば確実にやないか?」

「俺が欲しいのは人形なんかじゃない。俺はお前という意味を持ったライが、親友が欲しいんだ」

「僕は君の命令に背くかもしれない。君が大切であるゆえに君に背くかもしれない」

「それでも、忠実な駒じゃなくても僕を傍に置いてくれると言うのなら　僕は永遠に君の味方であり続けよう。そしてたと

えこの世界に住む全員が君の敵になったとしても。たとえこの世界自身が君を敵とみなしたとしても。僕は絶対に君の味方だ、ルルーシュ」

「だったら、先程俺が言ったことを、誓ってくれ。記憶を消すような真似を、そして　二度と、ギアスを使うなと」

「君のそばに居る事は誓えても、他の事はとりあえず努力はしてみるよ」

ルルーシュは胸倉を掴んでいた手を離れた。

「努力、か。まあいい、とりあえず　おかえり、ライ」

「ただいま、ルルーシュ」

重なった手、固く結ばれた掌。

彼らのやり取りにエヴァ達はルルーシュに嫉妬していた。ライがあそこまで忠誠を誓うような態度に台詞に、ライは少なくともルルーシュを絶対に裏切らないと確信できた。

その後、ライは自分の生い立ちを全て語り。現状を説明した。

エヴァ達は二人が立てた作戦には驚いていた。

カラレス総督が出口を一本に絞る事を予測して、バベルタワーに入った援軍を、逃げ道を作ったと同時にカラレス総督をと援軍を全滅させた事に。一石三鳥の作戦に。

その後、とらわれていた黒の騎士団の団員達を助けた。

ライは自分が設計した新型ナイトメアを受け取りに部隊と別行動を取った。

そのころ黒の騎士団は苦戦していた。敵は新型な上、制空権を握っていた。

ライは交戦ポイントに着き、すぐに新型で出た。

「発進後、僕はそのまま戦場に向かいます。それと、紅蓮のパーツを発射させてください。ラクシャータさん達はそのまま海底で待機を」

「蒼月、行きます」

紅蓮がパーツを換装した直ぐにスザクの方に向かわせた。

「新型か！？私を楽しませてくれよ？」

ライはラウンスであるジノとアーニャーを同時に戦い、互角以上に戦っていた。

「クツ、おいおい、エースは紅蓮だけじゃないか」

ライは記憶が戻る前と後では戦闘スタイルがガラリと変わった。記憶を失った後は体が覚えていた戦闘勘を頼りに戦っていた。しかし、記憶がもどり、かつて使っていた型や戦場で出していた動きをナイトメアに完全に再現をした為、以前とは全く違うスタイルになった。

ジノは蒼月の斬撃に苦戦していた。兎に角動きが速いだけじゃなく、こちらが動く先を知っているような攻撃をしてくる。

(おいおい、洒落になってないぞ。この動きはナイトオブワン並じゃないか。こちらの動きが読まれてる!?)

トリスタンはかなり損傷していた。なんとか致命傷にならない用に避けるのがやっとだった。

アーニャーも援護しているが、ライはジノの動きを利用しジノをいつでも盾のように使えた。

その為、アーニャーはうかつに攻撃が出来ない。

「なツ!?!」

ライはかなり損傷したトリスタンを掴みモルドレッドに投げつけ、左腕から輻射波動砲が発射した。

損傷は無いに等しいが機体の精密機械には深刻なダメージを与えられた。

この時の作戦は失敗したが、この戦いでブルタニアはライの蒼月を

危険視した。

中華連邦での戦闘は天子を誘拐し、大宦官の腐った部分を中華連邦各地に放送して中華連邦バラして一部を取り込む作戦を取った。この作戦は成功したがカレンの独断でカレンは捕虜となってしまうた。

刹那達は驚愕していた。自分と三つ年上の学生が本気で世界に挑もうとしてる事に。

ライとルルーシュが居なかったら扇達はただのレジスタンスで終わっていた。

二人の思考レベルの高さにはエヴァは呆れていた。

「お前たちは、アレか？未来でも読めてるんじゃないのか？」

刹那達も同じ気持ちだというように頷いていた。

「そうじゃないよ、大宦官達の腐敗振りと天子システムの御蔭で市民は実態を知らなかっただけ」

ライの言葉を聞いてもそれだけじゃないと彼女達は思った。

ライは学園に転入してルルーシュと共にこれからの事を学園で考えた。学園では生徒会にさそわれた。刹那達はそこに戦ったジノとアーニヤと一緒に転入した事を驚愕した。そこではちよつとしたトラブルがあった。

ライとルルーシュはブリタニアと敵対している国も協力するように持ち掛ける手筈をしていた。そ

嚮団の刺客としてジェレミアがやってきた。

嚮団の刺客であるジェレミアのギアスキャンセルでシャーリの記憶が戻り、彼女は混乱した。シャーリはライに相談した。その時ライは全てを話し彼女は本心でルルーシュの側に居たいと願った。

二人でこれからの事を話しをしてる中、嚮団の刺客達がライと彼と一緒にいるシャーリの抹殺を図るがライが返り討ちにした。

ジェレミアが仲間になったが、嚮団がライ達を狙った事で殲滅を決意した。

ライは殲滅に加わる部隊である零番隊に説明をした。

「皆よく集まってくれた、今回は極秘に君たちに任務を頼みたい」

「これから、ブリタニアが極秘に行っている人体実験場を殲滅をする、彼らは洗脳や薬物投与や脳にナイトメアの操縦技術を擦り込ませる実験をしている、放置しているとラウンズ並のパイロットが次々出てくる事になる」

ライは殲滅理由にギアスの事は話をしなかった。

そして、嚮団を追い込んだ、しかしライとルルーシュはCの世界に引き込まれた。

エヴァが呟いた。

「此処がCの世界、なるほど、我々が生きてる世界とは違う法則があるようだな」

エヴァがこのCの世界を理解していた。

そこに居たのはシャルル皇帝陛下。

「久しいな、ルルーシュ。そして、お初にお目にかかる、ライ狂王陛下」

「僕の事は知ってるみたいだな」

「はい、貴方はブリタニアにとって英雄です。今のブリタニアがあるのは貴方の御蔭ですから」

「耳が痛いな、自分の悪行がこつも感謝されるなんて」

その後にルルーシュはシャルルにギアスをかけ自決させたが。彼は死ななかった。

吸血鬼でもないのに死なない存在が居る事にこの事で刹那達は驚いていた。

ライが刀で心臓を突き、蹴り飛ばしたがシャルルは起き上がった。

「だったら、四肢と首を切り落としたりはどうなる？」

ライはそう言ってシャルルに近づこうとした時C・Cが現れた。そして彼女の願いが死ぬ事だと知ったルルーシュや記憶を見ていた刹那達は驚いた。

「エヴァは驚かないんだね」

「ああ、あの気持ちは分からんでもないからな。死ねない体を持つ者しか分からんよ。お前のほうこそ

驚いてなかったが？」

「なんとなく、気づいてたからね、C・Cが死にたがってた事は」

ライは別の空間に移動させられていた。そこでＣ・Ｃはライを死なないか誘ったが、ライは断った。

「僕は、やる事がある。だからまだ死ねない」

そしてライは別の空間に送り出された。そこにはルルーシュは居た。そして管理者と名乗るＣ・Ｃの姿があった。

そこで見たのはＣ・Ｃだった。

彼女の過去は刹那達にきつ過ぎた。Ｃ・Ｃの奴隷時代そして愛される事願い、愛されるギアスを手にいれた。しかし、愛されすぎて本当の愛を忘れた彼女が唯一信用していたシスターに利用された事に。

そして、不死身になった事で人に追われ、化け物や魔女と呼ばれ火あぶりにされた光景。

「なんで、そんな事が出来るの？」

アスナが怒り込めながら聞いてきた。その答えはエヴァが答えた。

「死なないからだよ。神楽坂アスナ。私も彼女と一緒にだ、人間に追われる日々、襲ってくる連中を逆に殺してやった。人間は自分と違うと思うだけでその化け物に対し残酷になれるんだよ」

エヴァもＣ・Ｃと同じじめにあったのだろう。そして刹那も同じだ。

自分達と違っただけで迫害を受けた。

それからライとルルーシュは自ら思考エレベータを開きC・C・Cに
問いかけた。

「「答えてくれ、C・C・C！なぜ、君は僕達と（お前は俺達）代替
わりして死のうとしなかった！」」

「「僕（俺）達を憐れんだのか！それとも」」

彼女はライヤルルルーシュに憎まれたかったのだ。

結局、彼女はライヤルルルーシュを遠ざけたかっただけだったのだ。
そして、C・C・Cを見ていたライとルルーシュの中で何かが切れた。

「「C・C・C……！！！」」

「「これ以上奪われてたまるか！」」

2人ともすぐに武器を立ち上げる。

蒼月は輻射波動砲を、蜃気楼はハドロンショットを展開する。

即座に2人は前方の建造物に向けて攻撃する。
被弾した建造物が崩れる。

「何たる愚かしさがああああああ……！」

ライ達は現実世界に戻っていた。しかしC・Cは記憶が奴隷時代の記憶に戻っていた。

ライ達は騎士団に戻り、シャルルが閉じ込められ、表に出ないかを確認したら超合衆国連合を発表した。だが発表したタイミングでシャルルがテレビジャックをして超合衆国連合に宣戦布告をした。

ルルーシュは親友であったスザクに頼み込んでナナリーを助けてもらいに行った。

ライは政庁でギャラハット、つまりナイトオブワンであるビスマルク・ヴァルトシュタインがキュウシュウ戦で前線を出ると予測し星刻と共にキュウシュウ戦に向かった。

「星刻さん、恐らくナイトオブワンが前線に出てきます。彼の相手は僕に任せてください」

「わかった。しかし、物好きな人間だな、君は」

「いえ、ただナイトオブワンの力が見たいだけです」

ライの予想道理、ギャラハットが出てきた。

「すみませんが、貴方の相手は僕がします」

「ほう、貴公が相手をしてくれるのか、では、黒の騎士団最強のお手並み拝見させてもらおう」

「最強！？随分持ち上げますね？」

「ラウンズを二人相手をし抑えた君の戦いはブリタニアではそう呼ばれている、さておしゃべりは此処までだ。いくぞ」

ライとビスマルクの戦いが始まった。

16話（後書き）

過去編第二話目です。

あともう二話ぐらい続きます。

ライがこの世界で使った刀はルルーシュが手配した業物ですがこれ以上は活躍しません。あしからず。

17話（前書き）

いっきに三話分書いたので誤字が多いと思います。
過去編が終わり次第直そうと思います。
本当にスイマセン。

17話

ライとビスマルクの戦いに刹那達は驚愕していた。

ライは光速と言ってもいいような突きを繰り出し、その突きを大剣エクスカリバーで受け止めるビスマルク。

ライは突きを大剣で受け流すビスマルクの技量には驚いていた。大剣で防ぐ技量は大した物だ。

ライは大剣の攻撃を受け流し反撃する為に守りに入った。

その攻撃は強烈で何とか双剣で防ぐ事が出来た。

しかし、ある程度その力も慣れてきた。もし受け流しを失敗したら蒼月は大破する。部の悪い賭けだと殆んどの人は思うが、ライは蒼月でギアラハットを倒すにはコレが最善だと直ぐに理解した。

ギアラハットのパイロットの凄いところは、大剣で攻撃ではなく、その大剣で大抵の攻撃を防ぐ事にある。殆んどのパイロットは隙を見つければと攻撃をし続けるが反撃を食らって終わる。

だから、ライはビスマルクにはこちらの攻撃でなく、ビスマルクの攻撃を受け流しその隙に叩き込むのが最善だと理解した。

ビスマルクが大剣の攻撃を防いでその中で自分はこの攻撃を一番受け流せるか頭の中で計算した。

そのもつとも受け流せる確立が高い攻撃である左斜め上からの斬撃きた。

ライはそれを完全に受け流しギヤラハットの左腕を破壊した。

「何!？」

ビスマルクは距離を取ろうとしたがライが迫って来たため大剣を蒼月に投げつけた。

そのタイミングは確実に避けれない投擲な為、ライは防御をした。その際にギヤラハットは撤退した。

「逃がしたか、それにしても厄介な人だな、あの人は」

ライはビスマルクの投擲は完璧に避けられないタイミングで投げた事を驚いた。

「さて、エナジーは、まだ残ってるな」

ライはすぐにナイトオブテンと戦ってる星刻の援護にいった。

そこには、味方の艦艇を武器にし投げつけた。

ライは輻射波動砲弾で防いだ。

「すまない、ライ」

星刻はライにお礼を言った。

「ビスマルクは？」

「左腕を破壊しましたが、うまく逃げられました。恐ら前線に復帰するのは時間が掛かるでしょう」

「そうか、まったく。恐ろしいな君はあのビスマルクを引かせるとは」

「星刻さんは、部隊の確認をお願いします。その間は僕がアレの相手をします」

「わかった」

ライはナイトオブテンの方に向かった。

「ほう、今度は貴様が私の生贄か」

ライはナイトオブテンに嫌悪感を抱いた為、通信に応じず攻撃した。

「おいおい、イキナリか？またつくコレだからナンバーズは」

ライは間合いを詰め攻撃に出るがナイトオブテンは盾からミサイルを撃った。

しかし、ライはそれをハンドガンで全て落とした。

ナイトオブテンはライがミサイルを落とした隙に左からブレイズドリルで貫こうとしたが、ライはそれを読んでいた。

ナイトオブテンには死角である右手に剣を持って一瞬でブレイズドリルを持つ右手を切り落とした。

「貴様！？ナンバーズ風情が！！」

ナイトオブテンがヘッドハーケンで反撃出たが。

「襲い」

ライはそれを左手で止め、右手に持っていた剣でコックピットまで貫いた。

この戦いを見た星刻や騎士団とエヴァ達は戦慄した。これが味方なら頼もしいが敵になったらどうなるか。

「星刻さん、僕は補給をし直ぐにトウキョウに向かいますから、此処をお願いします」

「あ！ああ、分かった！ここはもう私達だけで大丈夫だ」

星刻はライと一度中華連邦で戦った事があるが、その時はここまで強くなかった。ライは確実に自分の動きの速さをナイトメアに再現を出来るようになっていた。以前は動きだけで速さは藤堂達並ゆえに星刻と実力は同じかそれ以下だった。

しかし、生身の速さを再現が出来るようにして、ライは蒼月の限界を超え始めていた。

もともと戦いのセンスは高いうえ、頭の回転が速く戦闘中に戦闘理論が組めるぐらいの思考の切れがあった。

それらは、幼い頃からの実戦経験は確実に担っていた。

刹那やネギはナイトメアの腕が上がっていくライに驚いていた。

ライは補給を終え直ぐにトウキョウに向かった。

ライが着いたときにカレンが新型の紅蓮で政庁を出たときだった。

ゼロは6機の敵に囲まれていたがライが全て破壊した。

「無事か？ルルーシュ？」

ライは二人しか分からない極秘回線で会話をしていた。

「随分速かったなライ？」

「ああ、ラウンズの撤退が思ったより早かったからね」

「そうか」

その時にカレンから通信が入った。

「ゼロ！親衛隊隊長、紅月カレン。ただいまをもって戦線に復帰しました！」

「カレンか？しかしその機体は？」

「手土産です」

「よし、紅蓮と蒼月は私と共に政庁へ行くぞ」

「ああ」

「はい」

「そうはさせない！」

スザクとジノが来た。カレンはスザクのもとに行つた。

ジノはライの方に向かい、通信をした。

「やあ、まさかライがその機体に乗ってるなんてな。アーニヤアの奴もかわいそうに。」

「戦場で知り合つた事を悲しむべきかな？ジノ」

「いや、それより楽しむつてのはどうだ？」

「悪いけど、僕は君見たいに戦場では楽しめないから、一気に終わらせてもらつよー！」

「つれないなあ、一緒にチェスをやったりアーニヤアと遊園地に言った中だろつ？」

「それはプライベートでだろつ？此処は戦場だよ。ふざけていると死ぬぞ！」

ライはトリスタンに間合いを詰めに行つた。ジノは後退をしビーム・ハドロンスパアーを発射させる。

ライはそれを避け、すぐさま輻射波動砲を繰り出した。ジノは遠距離戦を選んだ。

「さすがに、接近戦は嫌かい？」

「ああ、キュウシュウの戦闘データを見たぞ、ギャラハットを後退させた初めてのパイロットだぞ君は、おまけにルキアーノを一瞬で倒したんだ。そんなライと接近戦を挑むほど俺も馬鹿じゃないぞ」

「けど、このままだと平行線だよ、まさかと思うけどエナジー切れを期待してるんじゃないよね？」

「いや、ただ、ライに聞きたいことがある、アーニャーの事をどう思ってる？」

「は！？イキナリ何を！？」

「ただ、聞きたいだけだ、敵としてじゃない。生徒会の人間としてだ」

「だったら、友達としてなら好きだよ、もっとも戦場で出会ったら僕は相手が誰であろうと容赦はしなけど」

「はあ、アーニャーもかわいそうに」

「??？」

困惑してるライにアスナ達はため息を吐き、ライに質問した。

「お兄ちゃんは、あのアーニャーって子、どう思ってるの?」

「いや、今ジノに言ったとおりだけど。それが何か?」

ライとネギ以外はこう思った。

(どこまで鈍感なんだろう)

記憶を見ている彼女達を他所に戦局は進んでいた。

その中でランスロットは紅蓮に止めを刺される直前だったそれを避け、見たこと無いミサイルを発射した。それを確認したジノは。

「ばっ！馬鹿野郎！？スザクそれは」

ジノは通信を聞いたライは危険だと感じ斑鳩や他の団員を下がらせ。ルルーシュをの雇気楼を引っ張った。

「ライ！！何を、あそこにはナナリーが！！」

そうルルーシュが叫んだ瞬間、光が収束し、ミサイルが破壊の光輪を一気に広げる。

その光が消えた後には、円形の大穴……クレーター……。

そこには都市があったはずだった。

何もかも消えていた。

「う、うああああああ！……！！！」

ライは叫んだ。

この光景をみた刹那達は本当にこんな物を使ったのか？と信じられなかった。

「な、なんなの！？今のは？」

「あそこには、都会あって、い、いっぱいひ人が？」

異世界の出来事とはいえ、アスナ達には困惑していた。

「このフレイヤで少なくとも2500万の人が消えた」

「に、にせん、ごひゃくまん！？」

その事実には彼女達は言葉を失うどころか蒼白した。

しかし記憶は勝手に進む。

ルルーシュは混乱していた為、全人権をライに移しこの場を撤退させた。

自体が落ち着いた後、シュナイゼルがフレイヤを積み、斑鳩に来た。ライは警戒をして彼らを会議室に案内させた。

黒の騎士団はライを始め藤堂や四聖剣、ディートハルトと玉城がブリタニア側にはシュナイゼルやコーネリアと副官のカノンだった。

シュナイゼルはフレイヤの印象を小さくさせ、ゼロの正体が自分の弟であると告げた。

さらにギアスの事まで話した。

その話し方は美味く、ゼロを裏切るためではなく、裏切られたと思わせるように話した。

黒の騎士団にゼロを引き渡して欲しいと言った時ライは。

「断る」

「しかし、ライ、ゼロは僕達をだましていたんだぞ？」

幹部である彼らはスツカリシュナイゼルの掌で踊っていた。

この話4シュナイゼルは自分がフレイヤを持っていると警告しゼロやギアスの事を話す事でフレイヤの事を忘れさせた。

ゼロを最後まで利用しブリタニアを破壊しその後でゼロを摩り替える事すら考えない彼らの頭の無さにライは頭にきていた。

「ゼロを引き渡すなり好きにしる。僕は黒の騎士団を抜けさせても

らっ」

ライはゼロを引き渡す以上にフレイヤの事を忘れている彼らを殺したいと思っっていた。

「待つてくれ、君にはゼロの代わりに「動くな、それ以上動くな」ここでお前たちを殺す！」

ライは刀を何時でも抜けるようにして言葉を発した。

「これ以上は時間の無駄だ」

そう言ったライからとんでもない殺気が放たれた。藤堂達ですら冷や汗をかいていた。

シユナイゼル達はシャルルが放つ雰囲気と同じだと感じた。ライが会議室から出て少し離れてから場の空気が戻った。

ライはその後、ロロに事の顛末を教え彼からルルーシュを救いたいといわれた。

幹部達の行動を予測してロロに救出プランを渡し、蒼月で斑鳩を出た。

ルルーシュは救い出されたがロロはギアスの使いすぎで死亡した。

「僕を怨むか？」

「いや、コレは俺が招いた事だ。お前が口口に教えなくてもあいつは動いた」

「シャルルが神根島に居るみたいだ。どうする？」

「我が父シャルル・ジ・ブリタリアよ。俺の地獄への道行きにおまえも一緒に来てもらうさ！」

「なら、僕も最後まで付き合おうよ」

二人は神根島に向かった。

ライは先に行きそこでスザクと会った。

「なんで！？ライが此処に！？」

「ルルーシュと一緒にシャルルを殺すためだよ」

「ゼロの正体を知っていたのか！？」

「ああ、ゼロが復活した日にね。それで君はなんだ2500万の間を殺しておかしくなり此処に来たのか？」

「僕は全てに決着をつグア！」

ライはスザクを殴った。

「君は自分の意思でブリタニア軍に入ったんじゃないのか？
ギアスを憎んでる君が何故、シャルルのギアスを認めた。矛盾して
るぞ」

スザクは起き上がりライの顔を見られなくなった。

「これ以上、ここで時間を欠けてられないから、僕はもう行く」

「僕も、連れってくれ」

ライは無言で進んだ。

洞窟の外には、ビスマルクとシャルルがいた。

「スザクか、それに君は？」

ビスマルクが聞くとシャルルが答えた。

「この方は、ライ・エス・ブルタニアだ。今では伝説となっている
英雄」

その答えにスザクもビスマルクも驚いた。

「驚く事は無いだろ、僕はこの遺跡で千年寝ていただけだ」

「何しに来たのですか？貴方は？」

「愚問だね、お前を殺しに来たんだよ」

その言葉にビスマルクは剣を構えた。

「ここは、任せたぞ」

「イエス！ユア・マジエステイ！」

ライはビスマルクに切りかかった。

「では、あのナイトメアに乗っていたのが貴方です？」

「どうしたんだ？急に敬語を使って」

「ブリタニアにとって貴方は英雄です。文武と共に優れ、国を治めた器。それらは私達騎士にとって貴方は目標ですから。そんな憧れた英雄と会ったのですから、敬語も使いますよ」

そうやってビスマルクはライと斬り合う。しかしナイトメア戦と違ってライに分があった。

ライはビスマルクの斬撃をあっさり流し掌底を腹に叩き込み蹴りを入れビスマルクを蹴り飛ばした。

「まさか、ナイトメアと同じ用に行くと思ってるのか？貴方とは生身の戦場を経験してる数が違う」

スザクはライの動きに驚愕した。ビスマルクは生身でも帝国最強を誇るラウンズ。それを簡単に吹き飛ばしたライの技量に驚いた。今ここでライと戦う事になったらと考えると『生きる』というギアスが反応した。

「ゴハツ、まさか此処までとは」

ビスマルクは血を吐きながらもライに向かっていく。

ライはビスマルクの後ろの周り攻撃をした。

「動きが遅い」

三散華、烈破掌、戦迅狼破

ライは最後にビスマルクを戦迅狼破で吹き飛ばした。

その時、ミサイルの流れ弾がビスマルクの近くの地面に着弾した。地面が崩れビスマルクはそれに巻き込まれた。

ナイトメアに乗ったルルーシュが降りてきた。

「ルルーシュ!？」

「スザクか」

「ようやく来たか」

「ルルーシュ、君は？」

「ライと一緒にシャルルを殺すためだ！ライに聞けなかつたのか？」

ルルーシュはライとスザクのやり取りを予測できたらしくライが言った台詞を言った。

これを見たエヴァは。

「お前はあのルルーシュに似ているな。考え方や頭の回転の切れも」

「みただね、ルルーシュの妹によく言われた」

「スザク、君も来たいのなら、この後来るC・Cと来い」

「へ！？どうして!？」

「お前じゃあ、一人でこの世界には行けないからだ。時期にあの魔女も来る」

ライとルルーシュは遺跡の方に向かった。

エヴァは二人の言葉に疑問を抱いた。

「なぜ、お前たちはC・Cがくると思った？」

「シャルルの作戦が完遂しかけていたからね、彼女なら記憶を戻しくるはずだと。ルルーシュと予測したんだよ」

「お前達の頭の構造が知りたいぞ。私は」

エヴァはライとルルーシュの先を予測する予言じみた頭の構造が気になっていた。

ライ達がCの世界に入り。遺跡を爆破させシャルルを閉じ込めた。

その後。死んだはずのルルーシュの母がやってきた。

彼らから語られた事はルルーシュにとってシヨックだった。

そんなタイミングでスザクとC・Cが来た。

ライ、ルルーシュ、スザクは彼らの目的を聞いた。

そして彼が作戦を実行しようとした時。三人はそれを止めに入った。

ライが語る。

「人は何故嘘を付くのか。それはなにかと争うためじゃない。なにかをもとめるからだ」

ルルーシュもかたりだした。

「ありのままの世界とは変化がない。生きるとは言わない。完結した閉じた世界。俺達は 嫌だな」

ライとルルーシュを説得しようとマリアンヌが語る。

「バラバラだったみんなが一つになる事はいい事だわ。死んだ人も一つになれる。貴方の母親や妹とだって」

「やはり、そうか…」

ライ「貴方達はそれをいいことだと思っている」

ルルー「それは押し付けの善意だ。悪意となんら変わらない」

その言葉にシャルルは。

「皆、いずれ分かるときが来る。世界が変わったとき」

「「そんなときはこない」」

ライとルルーシュが彼らを拒んだ。

そして。

ライとルルーシュが思考エレベータにギアスをかけた。

「「神よっ！集合無意識よ！」」

「「時の歩みを止めないでくれ」」

シャルルとマリアンヌは二人を止めようとしたがスザクに遮られた。

「っ、ユフィと話をさせてあげるために、つれてきたのに！」

「それを、押し付けというんだ！」

ライとルルーシュそしてスザクも彼らを拒んだ。

「勝てるはずが無い。神に人類その者に……」

「「それでも僕（俺）達は明日が欲しい」」

ライとルルーシュの両目にギアスの紋章が浮かび上がる。

そして思考エレベータが崩れだした。

「そんなっ」

「思考エレベーターが…兄さんの夢が朽ちてゆく」

「…シャルル。もうやめよう。おこがましいことだったんよ、これは」

「このっ」

シャルルがルルーシュに掴みかかる。

「手を出すなライ、スザク！」

シャルル達の体が崩れていく。

「わしを拒めば、そのさきにあるのはあやつのお世界だぞ！善意と悪意は所詮カードの表裏！それでも貴様達は！」

「それでも！俺はお前の世界を拒絶する！」

「ッ！」

「消えうせる！！」

「ぬああああああああ！！」

「きゃああああああああ！！」

ライはスザクとC・C。に質問をした。

「死ぬときくらい笑って欲しいだろ？」

「…そして、私はまだ笑っていない。契約不利行未遂だな。是正を要求する」

「ルルーシュはユフィの敵だ」

「だから？」

17話(後書き)

過去編の残りはゼロレクイエム。

エヴァ達はライ、ルルーシュとスザクが本気で世界の憎しみの連鎖を断つた為の計画に驚いていた。

計画の綿密さ、思慮の深さに、入念かつ膨大な下準備に、そしてルルーシュ達が死んだ後の二、三百年後の世界で起こりうるだろう戦争の原因すら考慮していた。

彼女達は夢物語が現実に可能なことにしようとしてる自分達より三つ年上の彼らにただ驚くしかなかった。

そして、計画の第一段階のライとルルーシュの皇帝の即位。

オデュッセウス達は王座が二つ用意されていたことに疑問を持ったが噂で皇帝が客人を迎えるためなど流れていたゆえにあまり気にしていなかった。

「皇帝陛下、ご入来！」

そこに、現れたのは二人の学生。一人はよく知っている人物でもう一人は知らないが何処かで見たとある人物だった。

「ルルーシュなのかい？」

「ええ、そうですよ、地獄から舞い戻ってきたんですよ」

「それに、彼は？どうしてこんなことを？」

「簡単ですよ。我々が次の皇帝なのだから」

「ルルーシュ、いけないよ国際中継でこんな、君もルルーシュに付き合わなくても」

「彼の名前は、ライ・エス・ブリタニアです」

「な、なにを!？」

室内はざわめいた。当然であるブリタニアにとってライは英雄であると同時にその名は神聖ゆえ、皇族とて名乗ってはならない名である。

「本当だ、私はかつて狂王と敵国から呼ばれた人間だ。そして、我々は新たなブリタニアを作る、そのための二人の王だ」

「いけないよ、父上が「98代シャルルは私達が殺した。よって、今ここで我々が新たな皇帝となりブリタニアは新しく生まれ変わる」

「なに言つての!?! ありえない!」

「あの痴れ者を排除なさい」

警備員達がライ達を捕らえようとするが、そこで二人と同じ学生服を着たスザクが現れライと一緒に警備員を倒した。そしてルルーシュが説明をした。

「彼は、枢木スザクこれから生まれ変わるブリタニアを守る、ラウンズを超えたラウンズとしてナイトオブゼロの称号を与えた」

オデュツセウスは三人を止めようとしたがルルーシユのギアスにかかり、彼らを認めた。

それから数日が経ち、ライ達はジェレミアの反乱分子の討伐の知らせを受けた。それから、園庭でこれからの事を話していた。

「足場は固めた、後はシュナイゼルと黒の騎士団」

スザクが言葉を発した。

「いや、その前に、前ラウンズ達が襲撃してくるだろう」

「ライ？本当にビスマルクを蒼月で倒すのか？新型も完全に完成してないとはいえ実戦には支障は無いだろう」

「ビスマルクを同世代の機体で倒すことが黒の騎士団に有効なんだよ。黒の騎士団でビスマルクと戦った者はいないが彼の強さは知ってるはずだ。蒼月で倒し、新型に乗ったら警戒心が強くなってくれる」

「勝算はあるのか？」

「一度戦って癖は掴んだ。スザクが他のラウンズを倒せば問題はない。その戦いを全て世界に流す」

「報告です！ラウンズが直属の部隊を引き連れてこちらに向かって

きます」

「スザク！他のラウンズを頼むぞ」

「イエス！ユア・マジエステイ！」

スザクはビスマルク以外を倒していく。そして、ライはビスマルクと再び戦うことになった。

「何の様だ？」

「我々は陛下に忠誠を誓った存在。ゆえにあなた方を此処で倒す」

「そうか、じゃあ、波乱分子として、消すのみだ」

二人は以前と同じように切りあいになった。ライはビスマルクの攻撃から反撃に出ようとしたが動きが読まれたかのように防がれた。

「私のギアスは未来を読む」

「未来を？なるほど、だったら、話は簡単だな」

「なに！？」

ビスマルクが再び攻撃をして、ライが受け流し反撃に出る。ビスマルクは未来を読み、反撃を防ごうとするが失敗に終わり右腕が破壊された。そして直ぐに残った左腕を破壊し、輻射波動を叩き付けた。

「馬鹿な!？」

「終わりだな?ビスマルク・ヴァルトシュタイン」

ライはビスマルクの攻撃を受け流した瞬間に、一秒間に12回の操作を入力という驚異的なスピードでビスマルクが反応する前に勝負を決めた。

このライの操作にエヴァ達は化け物を見る目でライを見た。

「お前を、人間とし見ていいのかわからなくなったぞ、私達は」

この戦闘は世界に放送し、超合衆国に参加も発表した。アツシユフォード学園で交渉するように指定した。

交渉にはライと数人のSPで行った。途中でスザクのアルビオンを使い、超合衆国の代表を人質を手に入れた。

シュナイゼルはこのタイミングで帝都ペンドラゴンにフレイヤを落とした。その連絡がライとルルーシュに言ったとき、シュナイゼルが二人に通信パネルで挟んだ会話をした。

「他人を従えるのは楽しいかい。ライ君、ルルーシュ」

「シュナイゼル」

ルルーシュが険しい顔をした。

「残念だが、私は君たちを皇帝として認めない」

「では、皇帝にふさわしいのは自分だと？」

ライが聞き返す。

「いや、彼女だよ」

そう言った時、画面の人物がナナリーに変わった。

「ナナリー！？」

「やはり、生かしたんですね？」

「ほう、君は気づいていたのかい？」

「確信は無かったただけだ」

ライとシュナイゼルの会話にナナリーが割り込んだ。

「お久しぶりですね。お兄様、そしてライさん」

「記憶が戻ったのか？」

「はい、私が帝都に戻ったときに、どうやったんですか？」

ナナリーの質問にルルーシュが答えた。

「俺だよ、ナナリー、ライに開いた記憶をもたれると厄介だからな」

ルルーシュが低く、そして冷徹に答えた。ライもそれに続いた。

「そんな話はどうでもいいだろう、お前が何を聞きたいこと、何が言いたいのかわかっている。だから言わせて貰おう、私は自分の意志で世界を手に入れる。その邪魔をするなら消すだけだ」

かつて敵国が狂王と言った意味が理解できるようにライは冷徹に言った。

「ラ、ライさ」

ルルーシュがパネルを切った。その後、ルルーシュもナナリーが生きている可能性に到達していたが、ライ動揺に確信が無かった。ナナリー生きてたことに喜びたいが、敵として彼女と戦う意志が弱かった。これにスザクがルルーシュの胸倉を掴んだ。

「ルルーシュ、ライは一番重い役を選んだ。僕や君はこんな程度で揺らぐわけにはいかない。甘さはすてる。ゼロレクイエム為に」

そう言つてスザクはルルーシュの部屋を後にした。C・Cがルルーシュの近くに腰を下ろした。

「分かっている。ライはまた狂王として世界に名前を残すキツイ役を選んでくれた。ライの覚悟のためにも、もうナナリーを特別扱いはしない」

ルルーシュが決意を固めてる途中にライはロイド達のところ居た。

「ロイドさん、ヴァリスピストルはどうです？」

「うん、アルビオンのヴァリスより威力は低いけど陛下の射撃なら問題ないよ。連射はアルビオンより上だし、発射速度はの三倍の速さだからねえ」

「それに、陛下の新型ナイトメア・イシユタルは陛下の動きとその速さを完全に再現できるようにしたら、ランスロット・アルビオンや紅蓮聖天八極式でも歯が立た無くなったし。アヴァロンに残っていたフレイヤのデータをみてエンジンにしちゃったからねえ」

ライはバトラーの擦り込みで物理やエネルギー工学の知識もあったためフレイヤのデータでフレイヤをエンジン化に成功し、イシユタルのエンジンにした。

アルビオンにも追加するはずだったが材料がイシユタルの分しかなかった為、出来なかった。

ライのナイトメアも完全にローラーアウトした。

旧エリア11行政区上空

ペンドラゴンが消滅したことにより内政機能が麻痺したが、黒の騎士団とシュナイゼルを叩く絶好の機会でもあった。

黒の騎士団は星刻を始め藤堂に四聖剣にカレン、ジノにアーニャーが居るがシュナイゼルと星刻との間に権限が分散しているあまり好ましくない。

ブリタニア側にはルルーシュに指揮に加えライモルルーシュ以上の指揮能力に加えスザクのKMF操縦並みにある、ライの新型にスザクの新型に対抗できるKMFは紅蓮聖天八極式だ。しかし、兵の数が黒の騎士団の三分の一しかない。

この段階ではシュナイゼル達が有利だと移っていた。

ダモクレスノの中枢司令室にライがオープンチャンネルで通信したのは両軍が戦闘可能空域に突入する寸前だった。

「ごきげんよう、シュナイゼル」

「ライ君、降伏する気は無いかね、こちらにはフレイヤがある」

「撃てますかな、こちらには合衆国の代表がいるが？」

その言葉に怒りを感じたのは黒の騎士団だった。

「代表達を人質にするきか？」

「そこまでやるなんて、ライ」

「シュナイゼル、貴様にとって関係ない人間であるが」

「そうだね、平和に比べれば「撃つなよ、シュナイゼル！」

星刻が割り込む。

「各合衆国は代行代表を選出したと聞くが」

「いざという覚悟はあるが、死んでいい命など存在しない」

「だそうだ、シュナイゼル？」

「星刻、私に指揮権を預けてくれないか？」

「相手はルルーシュとライだぞ」

「大丈夫だよ、僕はね一度だってルルーシュに負けたことが無いんだ。君たち幹部がライ君を抑えてくれれば勝てるよ」

ブリタニアに勝つにはライとルルーシュの指揮を割るのが最善だと思っていた。ライは強いが複数のエースで掛かれば問題ないと思っていた。

「わかった」

代表達を人質にした時、事前にゼロレクイエムを知らなかったら刹那達は黒の騎士団と同じ反応をしていた。

「この戦力差をどう覆したんだ？お前たちは？」

エヴァがライに質問するがライは見てれば分かるといった。だが敵の戦力はライ達の3倍近くあるうえ、フレイヤもあるため勝てるビジョンが思い浮かばないといった表情をエヴァ達はしていた。

戦闘開始直後にライは突撃した。シュナイゼルは迎撃の指示を出したがライにはカスリもなかった。

逆にライが二丁のヴァリスピストルで次々に黒の騎士団を迎撃していた。ライに注意が向いた瞬間に左右に展開していたブリタニアの射撃部隊が射撃を開始した。

それに斑鳩が反撃に出た。ハドロン重砲の発射準備に掛かったときライはイシユタルの一点集中拡散構造相転移砲を撃って斑鳩にダメージを与えた。斑鳩は飛行が難しくなり扇は隊員達に脱出させた。ライの目的は敵部隊を叩きながら斑鳩を落とせる射程距離を詰める為だった。

「扇さん！？応答してください、南さん！？ラクシャータさん！？」

カレンがオープンチャンネルで叫ぶ。玉置はライに襲い掛かる。

「よくもおおおお！」

ライはそれを簡単避け、右手のヴァリスピストル仕舞い、MVSを取り、玉置の機体を胴体を真っ二つにした。

「俺だつてな、意地

玉置が叫び終わる前にライはコックピットを破壊した。そして低空飛行を続ける斑鳩のブリッジをヴァリスピストルで撃ち、ブリッ

ジを破壊した。斑鳩がダメージを受けたことにより動揺した好きに玉置と斑鳩のブリッジを破壊されたことでカレンは怒りよりシヨックがさきに頭をよぎった。

『黒の騎士団のエースが聞いて呆れる。目障りだ、消える』

ライはその隙にカレンに一点集中拡散構造相転移砲を撃ったがカレンはギリギリに障壁を展開したが威力を殺しきれず地面に叩きつられた。

玉置、扇 他 死亡

そして、斑鳩が落とされたと同時にルルーシュは前方の兵士達を進ませた。

藤堂達が斑鳩を落としたライに仕掛ける。

「権力に取り付かれた君を此処で止める」

四聖剣が四方に展開したが、イシュタルが高速で一機に接近し躊躇無く破壊した。

「「仙波 ！！」」

「余所見をしてる暇があるのか？」

ライは仙波を落とした直ぐにイシュタルを高速でもう一機に追撃を駆けた。

MVSでコックピットを貫きもう一機いる方に蹴飛ばした。

暁は咄嗟に受け止めたがその隙を突かれヴァリスピストルに撃たれた。

「馬鹿な、一瞬で三機を!？」

「朝比奈!止まるな！」

その声もむなしく朝比奈はライに撃たれた。

「これで、四聖剣は死んだ。たいしたこと無いな元日本解放戦線は？」

「クッ！」

藤堂は追撃に出るが動きを読まれ、反撃を喰らい機体が中破した。ライは止めを誘うとしたが他の団員たちがライを追撃したため藤堂は落とせなかった。

「ふんっ！」

ライは追撃きた部隊の攻撃を避けながらヴァリスを連射して次々敵を撃墜した。

刹那達は戦慄していた。イシュタルが高性能とはいえ、全く攻撃を受けず数分で40機近くを落としたライに。

ブリタニア軍が押し始めていた。左右に部隊前進させ量産型暁を次々落としていく。

「フレイヤ！？前方部隊！」

ルルーシュがギアス兵に迎撃の指示をだした。フレイヤを打ち出し
てきた為。

「アヴァロンはそのまま後退、各部隊はダモクレスに接近して、フ
レイヤを撃たせ続ける。弾切れに追い込ませる！」

「ライ、君がここまでやるとはね。でもフレイヤがある限り君たち
は勝てないよ」

フレイヤは連射ができる兵器ではない為、スザクは次弾が発射され
るまでダモクレスの障壁を突破しようと攻撃を続けていた。

ライはアヴァロンの守りに入った。

「ルルーシュ、アレの完成はどれくらいだ？」

「すでに、最終段階だ、星刻に隙をつくり侵入させる」

ルルーシュは切り札の完成が近づいた為、アヴァロンを前進させた。

シュナイゼルがアヴァロンにフレイヤを撃とうとした時に星刻が通信を繋いだ。

「シュナイゼル、人質ごと消すきか？」

「黒の騎士団が押されてるいま、ほかにては」

「我々はまだ敗れていない」

「では10分待ちましょう」

「たったの10分!？」

「反撃の目処がついたから、連絡したのでは？」

「クツ、分かった」

シュナイゼルは気づいていない、ワザと隙を作り星刻に侵入させようとした事に。

「残存兵力をアヴァロンに集結させ、ダモクレスに突撃をかける」

「よろしんですか？」

ロイドが問いかけた。

「お前が戻ってきたということは、目処がついたのだろうか？」

「後は陛下達とスザク君にかかってますがね」

その時、アヴァロンの後部で爆破が起きた。

「やっと来たか、星刻」

ルルーシュはロイド達にミッション00を言いつけた。

ルルーシュは屋気楼に乗りライと共にダモクレスに向かった。それを機にシュナイゼルはフレイヤを撃ったがライ達の切り札で失敗し屋気楼の絶対守護でライ達の侵入を許してしまった。

ダモクレスに侵入したライ達を迎撃に出たのはジノとアーニャーだった。それに対しスザクが足止めをした。

「たいした者だね、彼らは、私に最後の策を使わせるとは」

シュナイゼルはダモクレスを自爆させライ達を消そうとした。シュナイゼルとカノンとディートハルトは脱出艇に入って、座った瞬間に通信パネルが開いた。そこにはライが映っていた。

「待っていましたよ、シュナイゼル」

「そうか、チェックメイトをかけられたのはわたしのほうか。」

「なるほどね……教えて欲しい。何故、私の策が分かったんだい？」

「僕が読んだのは貴方の本質だよ」

「本質？」

「あなたには勝つ気がない、ただ、負けないようにしてるだけだ」

「以前、黒の騎士団に仕掛けた、ルルーシュへのクーデター」

「あれは手際はよかったが、あれで確信を得た。結局、状況にあわせ最善の手を打ってるだけだ」

「最善手を選択するのが間違っている？」

「最も善い手が、やらなければならない一打であるとは限らない、たとえ悪手でも打たなければならぬお時は必ずある。しかし、あなたにはそれが出来ない」

「だから私がダモクレスを放棄すると？」

「シュナイゼル、あなたには今度こそ負けていただく」

「私を殺すと？」

「質問したい」

「あなたは、ダモクレスで世界を手にしたかったのか？」

「わたしはただ、平和を造りたかっただけだ」

「人の本質を無視してでも？」

「見解の相違だね」

「…あなたは、フレイヤの恐怖をもって、今日という日で世界を固定し様と考えた。しかし、変化なき日常を、生きてるとは言わない、それはただの経験です」

「しかし、その経験の連なりが知識というが？」

「やはりあなたは優秀です。優秀すぎるがゆえに見えていない

そう、シャルルは過去を求めた、そしてあなたは今日を、しかし、

僕は明日が欲しい」

「明日が今日より悪くなるかもしれない」

「いいえ、よくなる、たとえどれだけ時間をかかろうとも、人は幸せを求めろ」

「それが欲望に繋がるといのに　ははは。愚かしさも極まったな。それは感情にすぎないよ。ライ君。希望や夢という遺物だ」

「それが皇族という記号で世界を見下してきたあなたの限界だ」

「……………」

「僕は過去も現在も見えてきた。不幸に抗う人を、未来を求めろ人を、幸せを求めろ人を、抗いを続けてきた」

「矛盾だよ、ルルーシユのギアスで人の意思を否定し続けた君たちが、人の意思を、ここに来て肯定するのは」

「もういい、はやく殺したまえ　ただし、君たちもフレイヤで消える」

「その空虚な内側」

「だからこそ、あなたに」

シュナイゼルの後ろから

「僕やルルーシユとスザクに仕える意志をプレゼントしよう」

「まさか、君もギアスを」

「しまった、なぜ気づかなかつたんだ、シュナイゼルの思考を読んだ録画だと」

エヴァ達はもうツツコマないぞオーラをだしライを睨んだ。

「優秀な人ほど分かりやすいんだよ。思考パターンは。ルルーシユと一緒に念入りに考えたから」

その視線と雰囲気耐えられずライは答えた。

ライはフレイヤの発射ボタンはナナリーが持っていると思った。ルーシュに連絡を入れた。

ライはイシユタルに戻り、残った部隊を掃討にいった。

スザクがジノとアーニャーをダモクレスノ中で相手をしていたが、モルドレッドの火力は危険と判断し外にでた。

「悪いが、直ぐに終わらせるよ？ジノ？アーニャー？」

「言ってくれるね」

「スザク」

ジノはスザクにビーム・ハドロンスピアー撃ち、その際にアーニャーはブレイブルミナスのシステムを破壊した。

「ブレイブルミナスのシステムを？」

外からカレンと星刻と藤堂が来た。

「ちっ」

その時、ダモクレスからライのイシユタルが出てきた。

「ライ!?」

「スザクはジノとアーニャーを」

「イエス! ユア・マジエスティ!」

「ライ、私はあなたを許さない。扇さんを殺したあなたを殺す」

「ここで、終わらせる」

「朝比奈達の為にも」

「なら、来い」

「スザク、私はお前達を作るブルタニアを認めない」

「スザク、記録してあげる」

「ジノ、アーニャー」

「お兄様とライさんは私が止めます」

「ナナリー!? (眼が)」

兄妹で

元ラウンズどうしで

元黒の騎士団どうしの最後の戦いが始まる

18話（後書き）

終わらなかつた。次回で確実に過去編を終わらせませう。
そして、扇、玉置、四聖剣のファンの皆様すみませんでした。

ルルーシュとナナリーは向かい合っていた。

「何年振りでしょうか。お兄様の顔を見たのは」

そう言った、ナナリーの瞳はルルーシュを真っ直ぐ捕らえていた。

「それが人殺しの顔なのですね」

「おそらく私も同じ顔をしているでしょうね」

「やはりお前がフレイヤを？」

「はい、止めるつもりでした。お兄様を、ライさんを。たとえ貴方達が死ぬことになっても。」

ですからフレイヤの鍵をお渡しする事は出来ません」

ライもスザクもかつての仲間と向かい合っていた。

「諦める、お前たちの未来はきまっている」

「ふざけるな、扇さん達を殺して、言うことはそれなの？」

カレンは叫びながら質問をした。

「ルルーシュがいなければ、お前たちはクロヴィスが死んだ日に死んでいたのだろうか？彼の策が無ければブリタニアに嫌がらせ程度し

か出来なかった集団がここまで生き残れなかった」

「しかし、ゼロのギアスを君達がしようとしていることを認めるわけにはいかない」

藤堂が答える。

「藤堂か、片瀬ごときの部下がほざくな」

「片瀬少将に何故ギアスをかけた？あの人は 「片瀬にはギアスはかけていない」何？」

「片瀬には困になってもらっただけのことだ。深海から爆薬を仕掛けて」

「なっ!？」

「私は元々、日本解放戦線に情など無かった、むしろ怨んでさえいた」

「何故だ？」

「何故？当たり前だろう、草壁は人質を取っていた。その中にはシヤリリ達も入っていたんだぞ」

「あれは、ルルーシュがギアスを使って「ちがうな、ルルーシュはギアスを使ってやらせたのは自決だけだ、それに、片瀬が死んだ後、僅かに黒の騎士団に入った解放戦線のメンバーにギアスをかけ聞いたところ、片瀬は草壁が人質を取ったところを大層喜んでいたと言ったぞ」

その言葉に藤堂は何も言えなくなった。

「そんなの、ルルーシユのでまかせでしょう?」

カレンが質問した。

「違うな、それにその時、私も居たんだからな」

「何を!？」

「あの、青い月下は誰が乗っていた? 何故私が乗れたんだ? 簡単だよ、私もその時から居たんだからな。ただ、ギアスで記憶を消しただけだ」

「っじゃ、あなたはその時から一緒にいた皆を殺したって言うの?」

カレンが何処かライが居たことを納得し、質問をした。

「敵を殺さないでどうする? もう話は終わりだ」

「あなたは、そんなに地位や権力がほしいの?」

「だったら?」

「だったら、私達が止める!」

イシュタルと紅蓮聖天八極式がエナジーウィングを展開して飛翔した。それに続き暁も神虎も続いた。

「お兄様たちに世界を手にする資格はありません。ギアスで人の心を踏みにじったお兄様に、それを認めたライさんにも」

「なら、あのまま暗殺者に脅えながら暮らせと？お前の為にも「いつ私がそんな事を頼みましたか？」」

「私はあのまま、お兄様やライさんと暮らせればよかった。あれだけで私は幸せだった」

「しかし、現実にはさまざまなものによって支配されている。抗うことは必要だ。その為に」

「その為に」

「レジスタンスとして、戦ってきた」

紅蓮がイシュタルにミサイルを放ちながら叫んだ。月下はハンドガンで、神虎も荷電粒子重砲を放った。

「スザクのように組織を使う手だってあったはずだ」

イシュタルは三機の攻撃を避け、ピストルヴァリスで追撃しながら

叫んだ。

紅蓮はイシュタルに輻射波動砲を放ちながら叫び返す。

「その組織に、システムに入れない人間はどうすればいいの？」

しかし、イシュタルにはカスリもなかった。

「ふざけるな！！入れない人？貴様がそれをいうか。カレン・シュタットフェルト？」

「私は紅月カレンだ」

紅蓮がイシュタルにMVSで斬りかかるが、避けられ蹴り飛ばされた。

「そう、言い訳をして、レジスタンスで何をした？子供の嫌がらせ程度しか出来なつたお前達が！」

ライは紅蓮にMVSで追撃を使用よしたが、藤堂達が斬りかかりに来た。

「それで、ギアスを使って貴様は何を望む？」

ライは月下と神虎の攻撃を受け流した。

「決まっている。未来に繋がる明日だ」

「貴様が望む未来など」

藤堂は受け流されても更に追撃に出ようとするが。

「目の前の現実も見えない貴様らが言うな!!!」

ライは追撃に來た暁より早く斬りかかり、暁の両腕を切り落とし、ダモクレスに蹴り飛ばした。暁はダモクレスに叩きつけられ両足も飛翔滑走翼を破壊された。

刹那達はライ達の行動の意味を知っていたため、叫びたかった。

「なにも、知らないくせに。彼が何を指そうとしているのかをわかるず。シュナイゼルが何をしようとしたのか分からず。えらそうに言うな」と彼らに叫びたい顔をしていた。

ライはそのまま、神虎に追撃出たが、神虎がギリギリ止めた。

「星刻、貴様は気づいてるだろう？黒の騎士団は私達に消されるか、シュナイゼルのフレイヤに消される運命しかなかったことを、この戦いで私達を倒せば終わりではないと？」

イシュタルと神虎はMVSの押し合いになっていたが、イシュタルが押し始めライは星刻に質問をした。

「クツ、それは？」

星刻は気がついてた。シュナイゼルがライ達をフレイヤで倒した後、黒に騎士団も倒そうとしていたことに。

「馬鹿の集まりに言っても、混乱するだけだから、黙っていたか。それとも相打ちをなんて馬鹿な可能性に願っていたか？」

「しょせん、黒の騎士団は目的がないと何も出来ない集団だ。いい加減に消えている」

「いい加減、消えてもらうよ。ジノ、アーニャー」

アルビオンは高速で飛翔しながらトリスタンにヴァリスを撃つたが、ジノはそれを避けた。

「お前達の、正義とは何だ？スザク」

C・Cは蒼月に乗って黒の騎士団を落としていった。蒼月の性能をかなり落としてC・Cに合わせた。かなりの数を落とした後、C・Cは戦場から離れ戦場を見ていた。

「人の歴史は抗い続ける事か……」

そうつぶやいていた。

イシュタルは神虎を押しつけ、ピストルヴァリスを左手で構え、神虎の四肢を破壊した。

「しよせん、貴様らはこの程度だよ星刻」

ライは神虎を眺めながら言った。その時

「高いトコから、偉そうに言うな!!」

カレンが叫びながらイシュタルに輻射波動砲を放った。

「まだ、懲りないか、カレン？」

「当たり前よ、あなたを殺すまで、扇さん達の敵を討つまで」

「なら、ここで死ね」

イシュタルは双剣を手にし紅蓮に斬りかかった。カレンは避けられないと判断しMVSで受け止めようとしたが、ライは一瞬にして後ろに回りこみ斬りかかったが、カレンは咄嗟に避けた。

「人は、平和を望んでも、世界はそう思い道理にならない」

ライは言った。

「だから、自分達の思い道理にしようというの？」

「それは」

カレンは叫びながら輻射波動砲を撃ったが紅蓮からエナジーの警告音がなったが、

「それは卑劣なのです」

ナナリーはルルーシュに断言した。

「人の心を捻じ曲げ、尊厳を踏みにじるギアスは。人を駒として扱うゼロはお兄様たちの存在そのものは」

「なら、ダモクレスはどうだ？恐怖によって人を従わせる卑劣なシステムでないのか？」

ルルーシュはナナリーに問いかけた。

「ダモクレスは憎しみの象徴になります」

「!?!」

「そうか…ナナリー、お前も」

ルルーシュはつぶやき、そして、決心した顔で。

「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが命じる。ダモクレスの鍵を渡せ」

ナナリー震える自分の両手を見つめ、悲鳴を上げる。

「い……いや。お兄様に…渡してはいけない…これ以上の罪をお兄様達に…」

だが、ギアスの前に抵抗は空しかった。

「どうぞ、お兄様」

ルルーシュは鍵を受け取りナナリーに言葉を発した。

「ナナリー。俺はお前やライをずっと理由にし、いや、言い訳をしてきた。しかしお前は立派に自分の考えで生きていたか」

「だからこそか、ライは…」

「すまない、お前のライへの気持ちを気づきながら、あいつに全てを背負わせることにした、俺を怨んでくれ。それが、俺への罰になるのだから」

ルルーシュは立ち去った。ナナリーはルルーシュに叫びながら泣いていた。

紅蓮がイシュタルに斬りかかるが、イシュタルにカスリもしない。

「マシンスペックがここまで違うの？」

カレンは攻撃は読まれていた。紅蓮のエネルギー残量の警告音がなっているのに、イシュタルのライの通信からは警告音はなっていないかった。

（どうして？あれだけの攻撃をしえ、コレだけ飛んでいるのに、ライの機体は持つ？）

カレンは知らなかった、いやブリタニアでも知っている人間はルルーシユ達を含めても十数人しかない。イシュタルはフレイヤの技術をフレイヤをエンジンに成功したことを。

「クッ、これで」

紅蓮が全てのスラッシュハーケンを放ち、イシュタルがそれを叩き落した瞬間に輻射波動の切れた腕を構え、攻撃をしたが。イシュタルは一点集中拡散構造相転移砲を撃って輻射波動の腕を破壊し、MVSで足を切り落とした。

「そ、そんな……全く届かないなんて」

「消える、目障りだ」

ライは冷酷に言って、紅蓮をダモクレスに蹴り飛ばした。

「ライイイイイイイ！！！！」

スザクがトリスタンに切りかかろうとした隙にアーニャーはシユタルクハドロン撃つが、スザクはそれを避けた、その瞬間、トリスタンはランスロットの足を掴んだ。モルドレットはすぐさまシユタルクハドロン撃つが、スザクはランスロットの足を切り落とし回避した。

「クッ、これ以上！」

スザクはモルドレットに斬りかかった。アーニャーは気づくのが遅れ、ブレイブルミナスを展開したがランスロットのMVSがそれより早く貫いた、ジノはその隙にエクスカリバーでランスロットを斬りかかるが、ランスロットは余った腕のMVSでトリスタンの腕を切り落とし、もう片方のエクスカリバーでランスロットの上半身と下半身を両断した。

モルドレットの爆発に巻き込まれ、ランスロットとモルドレットはダモクレスに落ちた。

ジノは落ちたランスロットを確認してすぐさまカレンの援護に向かった。アーニャーを助けることよりライを倒すのが先決だと判断した。

ジノが見たのは紅蓮を撃墜したイシユタルの姿だった。

ジノは叫びながらライに突撃をした。

「ライイイイイイイ！！！」

ライが突撃してくるトリスタンをみて迎撃にでた。

「スザクを退けたか、ジノ？」

「うおおおおおお」

トリスタンは片腕をなくしたまま、イシユタルに斬りかかるが、避けられ、アツサリと残りの片腕を切り落とされた。ジノは距離をとりビーム・ハドロンスピアを撃つが、イシユタルは一点集中拡散構造相転移砲を撃つた。

互いを狙った攻撃は途中でぶつかり合ったが、トリスタンが押され下半身に当たり破壊された。

「クソオオ」

「終わりだ、ジノ」

ライはトリスタンを蹴り飛ばした。トリスタンもダモクレスに叩き落された。

「ライ、フレイヤの鍵を手に入れたぞ」

ルルーシュからの連絡が来た。

「そうか、撃ってくれ」

フレイヤが撃って、ライは世界に告げた。

「全世界に告げる、私は神聖ブリタニア帝国のライ・エス・ブリタニアである！」

「シュナイゼルは我が軍門に下った。これによりダモクレスは我が物になった。黒の騎士団も私に抵抗する力はない、それでも抗うのなら、フレイヤの力を知ることになる」

ライは冷酷な笑みを浮かべ言った。

「脆弱なEYは相手ではない、かの昔、私が目指した願いが、今ここで叶った。この瞬間をもって世界は私のものだ！」

世界中の人たちがこの映像を見て、悲嘆と憎しみの声を上げて言った。

黒の騎士団の処刑一週間前

誰も知られることはない、部屋の中で三人は向き合っていた。

「スザク、計画道理に僕を殺せ」

「やるのかい、本当に？」

「ああ、イシユタルもダモクレスも破壊した、フレイヤに関わった人たちの記憶もデータも消した」

「予定道理、世界中の憎しみは僕に集まってる、後はその僕が消えるだけで、憎しみの連鎖を断ち切るだけだ」

敵がいなくなり、和平を持ちかけたルルーシュを裏切り、世界を支配する最悪な王。世界中の人間はルルーシュが和平を持ちかけたことで希望を持ったが、それを裏切り独裁をするライは世界中の人間に怨まれ、ルルーシュは同情された。

「ライ、本当はお前にはやらせたくなかった」

ルルーシュが言う。

「これが、自然の流れだよ。ルルーシュ」

ルルーシュよりライの能力が危険視されていれる。ルルーシュ並みに頭が切れ、スザク以上にKMFを操縦し、かつて狂王と敵国に呼ばれた、自国の民間人を戦わせた。

狂王本人だとか、生まれ変わりだの噂は世界中に流れた。DNA検査も世間に流れている。

「これで、世界は戦争の行き着く果てを分かった。だから人々は話し合いを求める。もうあんな悲劇は起こさないと。これで世界は軍事力ではなく、話し合いというテーブルにすることができると」

「それがゼロレクイエム」

「人々は昔から平和な明日を求めている。」

「俺達はCの世界で知った」

「願いとはギアスに似ている、自分の力で叶わないことを誰かに求める」

「願い」

「そうだ。僕はギアスという名の願いかろう。世界の明日のために」

ルルーシュとスザクは悲しそうな表情をした。

「未練はある、だから未練はない。C・Cに以前言った言葉だ。今も同じ気分なんだ」

そして、スザクが後悔処刑前にライの前に現れ、狂王を刺した。

「ぐはッ・・・」

スザクの手にした剣がライの心臓を突き刺す。

「スザク・・・ルルーシュ・・・これからの世界・・・をみんなを頼・・・」

「・・・その願い確かに受け取った」

スザクは涙をこらえながら答えた。

バランスを失ったライは台座を滑り落ちた。

ナナリーの目に映ったのは、血まみれの人。かつて兄、ルルーシュと共に三人でクラブハウスに暮らしていた、自分が好きになった人。

「ライ...さん」

ナナリーは手を伸ばした。記憶が戻ったと言ってきて、戻らなければならぬ所があると言ってきた。必ずココに帰ってくるそう言っているから、通信パネルで会話はしたが、一度もまともに再開はしていなかった。だから、ふいに手をのばした。

瞬間であった。

膨大な記憶が映像がナナリーの脳に流れ込んだ。

「そ.....そんな!？」

ナナリーは知った。ライがルルーシュがスザクが、なぜあんなことをしたのか。

「ライさん……」

ナナリーはライに呼びかけるが、ライは反応しない。ナナリーはかつてライに言いたかった言葉を言った。

「愛しています……あの時折り紙と一緒に……折ってくれた日から……好きでした……」

握った手を頬にあて、ライの耳元でささやいた。すると、

「あ……ああ……これでや……」

「ライさん！？いやっ！？目をあけてください！」

ナナリーの目から涙が溢れた。だが、ライのまぶたがはゆっくり閉じていく。

「ライさん！ライさん！」

そのとき、周囲から爆発的な歓声が「上がった」。

「魔王は死んだぞっ！人質を開放しろ」

その言葉に人々が人質を解放し始めた。警備兵達は撤退していく。

その騒ぎの中心にいたナナリーはそんなもの見ていなかった。

正義の皇帝ルル シュ様の騎士のスザクだ」

沸き起こるスザクとルルーシュコール。

ナナリーはあふれ出る涙を拭おうとせず、ライの顔に近づける。

「ず、ずるいです……私はお兄様とライさんと一緒に暮らせるだけで良かったのに……ライさんがいない明日なんて……」

「……………う……………うあああああああああつ、あああああああああああつ……………！」

それを見ていたルルーシュとスザクは懸命に涙を流さぬよう堪えていた。

それから、景色が暗くなったら、直ぐに見に覚えがある景色に変わった。

麻帆良学園の世界樹。

記憶を意識を現実に戻そうとした時。目の前にC・Cが現れた。

「やっぱり、生きていたか。ライ」

「なっ!?!」

エヴァが驚いていた。

「なぜ、君が?」

ライがC・Cにたずねた。

「さあな、ただ、Cの世界でお前の気配がしたからな、かなり弱弱しいが」

「そうか、記憶を遡ってみているからか」

「恐らくな、それと、お前の死体が出てこなかったからな、生きていると思っていたぞ。それにしてもCの世界を通って別世界にいたか」

「そうみただね。この事「ルルーシュとスザクにはお前が生きていると言っている」…相変わるぞだね君は」

「私は魔女だぞ」

C・Cが微笑んだ。

「もう、時間が無いか、ライ、ルルーシュ達からの伝言がある」

「伝言!?!」

「ああ、お前が何処かで生きてるといったからな。それより伝言だ生きてくれと」

「!?!」

「ただ、それだけだ、世界はお前達が願っていたとおりに動いてるぞ。戦争に向けられていた力は飢餓や貧困に向けられている。ルルーシュもスザクもブリタニアと日本の代表として頑張っているからな」

「そうか、君にとって今の世界は？」

「昔と違い、優しい色に見える」

すると、もう限界なのかC・Cの姿が消えていき、声も聞こえなくなった。けどC・Cは微笑んだ。

ライ達は現実に意識が戻った。

20話

ネギ Side

兄さんの過去を見終わって、僕達は啞然していた

「どうだ、坊や？ライの過去を見て何を感じた？」

僕は言葉を失っていた

「私は、ライが間違っていたとは思わん、ライが生まれた時代ではライが国を大きく発展させ

民を国を良くしたことは間違いはないぞ」

エヴァンジェリンさんが言うことも理解できた

兄さんの兄達やお父さんでは国は疲弊するばかりだったろう

ギアスを手に入れたのは国を家族を守るため

その御蔭で国は良くなった、臣下達はギアスではなく兄さんの人柄に惚れて心酔していた

僕より二つしたの八歳の時に戦場にでた

僕より少し小さくても、それを利用して、相手の死角からの攻撃躊躇なく敵を殺す姿には身震いし、嫉妬をってしまった

兄さんは小さい頃から、訓練をして、政治や交渉術などの勉強もし

ていた

剣だけでなく槍や弓なども常に戦場で敵から奪える武器も使えるように訓練していた姿に尊敬した

臣下達が兄さんに心酔するのがよく分かった

僕もその時代に生きていたらあの人の下で戦いと思っただらう

そして、時代が変わり、兄さんは記憶を失い友達を得た

その時代はとても酷かった

黒の騎士団に入ったのも共感できた

最後はゼロレクイエム、一億近くの間人が死んだ

でも、シュナイゼルさんが使用としていたことは二、三十億の間人を殺すことで世界を平和に導こうとした

それぞれの正義ではなく、平和を望んでいた人達の戦争

僕の考えは甘かった、殆どの方が平和を大切な人の為に戦っていた戦争に勝てば平和になる、そんな単純な程世界は甘くない

だから兄さんやルルーシュさん、スザクさんはゼロレクイエムを考えた

憎しみの矛先を自分に向ける為に世界を支配した

その苦しみは尋常なものじゃなかった、兄さんの過去をみると同時に兄さんのその時の感情が頭に流れてきた

憎しみの連鎖は断ち切るために自分を犠牲にした
そして

「僕も同じ考えです、兄さんの過去を見て自分が甘かったと思えま

した

それに、善意の押し付けは悪意と変わらないと分かりました」

ルルーシュさんがお母さんに言った言葉

自分の善意の押し付けはけしていいことではない

悪意と変わらない時もある

僕が以前、茶々丸さんに攻撃した時

僕は生徒の為にと思って攻撃した

もし、兄さんが止めなかつたら茶々丸さんは死んでいた、そして3

- Aの生徒は悲しんだらう

自分の視野が狭いと自覚ができた

「ふん、どうやら貴様はまともな様だな、他の魔法使いはそんな感情は出ないだらうしな」

その言葉にアスナさんが質問した

「そんなに酷いの？」

「ああ、自分に正義があると信じてるからな、ナギ達が英雄と呼ばれているから、英雄は魔法使いと

短絡的な考えだからな、爺やタカミチは頭を痛めていた、「ナギさん達はそんな事の為に戦った訳じゃないと」な」

「それにな、人を救うには何も魔法だけじゃない、医術を学べば多くの人も救えるぞ」

今の魔法使い達は真っ先に魔法を使うしか考えが無いぞ」

エヴァンジェリンさんの言葉に僕は言い返せなかった

学園に来てから、僕は何か問題が起きたときは真っ先に魔法で解決する事しか考えなかったからだ

「まあ、ネギもそうだったからね」

「そうなん？」

「そうよ（その所為で私が何度裸になったか）」

「話はそれだが、私が言いたいのは、貴様は敵を倒す力が欲しいの
だろう？」

エヴァンジェリンさんが聞いてきた

兄さんの過去を見る前なら『違います、人を救いたいです』と
反論していただろう

でも僕が今まで覚えたのは攻撃魔法だけ

「はい！」

今なら分かる、マギステル・マギ（立派な魔法使い・偉大な魔法使

い)は僕が思っていたものではない
でも、それでも困ってる人たちを苦しめてる人を倒して、困ってる
人たちを救いたい

「なら、三日後茶々丸から一本取れたら、一応弟子にしやる」

「一応ですか？」

「ああ、封印が解けたら私は学園を出るからな」

「そうなの!？」

「そうなん!？」

アスナ達さんが驚いた

「ライが解除の目処がついたと言ってくれたからな」

「学園祭の日に世界樹が活性化する時に解除するのが良いからね」

「と、言うわけだ、茶々丸から一本取っても、師匠として教えるの
は二ヶ月程度だ」

「はい!」

それでもありがたかった、今より強くなるにはエヴァンジェリンさ
んに魔法を教えてもらうのが一番いいから

「それと坊やは、ライには届かないし、ライのように強くなれんぞ」

「ちよっ！何もそこまで言わなくても」

「神楽坂アスナ、ライの世界に魔法は無かった、だからライは自分の身体能力を極限までに鍛えた、

ライと同じ位置に行きたいのなら魔法を捨てるしかない」

僕も同じ考えだ、兄さんの強さを求めるなら魔法だけでなく、教師もやめて身体を鍛えるしかない

それだけの覚悟が無いと絶対に無理だ

あの時代の兵士達は現代に比べれば身体能力が高い

「ライさんを目標にするなら、魔法を覚えている暇はありません」

刹那さんもエヴァンジェリンさんと同じ意見だ

「うっ！たしかにそうだけど」

「とりあえず、茶々丸から一本とってからだ

それと、お前たちはライをどう思う、ライの過去を見て？」

「私は、間違っただとは思えません、私は今までのようにライさんの元で修行したいです」

「うちも、同感や、ライ達がゼロレクイエムをせんかったら戦争は続いてたか、フレイヤで何十億に人達が死んでたん、だからライが

やったことは否定はせんよ」

「私も、同じね、お兄ちゃんは頑張ったんだから、誰も文句は言えないし、言わせたくない、私は馬鹿だけど、お兄ちゃんが戦争が終わっても戦争が無くなる訳じゃないと分かったし」

「僕も同感です、過去を見せてもらった御蔭で、自分の視野が狭かったことが知りました」

「ありがとうと言えば良いかな？」

兄さんは複雑な顔をしていた

その後は、時間も遅いので僕達は寮に帰った

その途中

「にしても、凄かったね、小さい頃のお兄ちゃんは」

「そっやな、一杯訓練して、勉強もして、国を治めて
うち等とそんなに変わらん年だったのに」

そんな事を話しながら僕達は帰った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0862o/>

白銀の王麻帆良の世界に

2010年10月30日10時39分発行